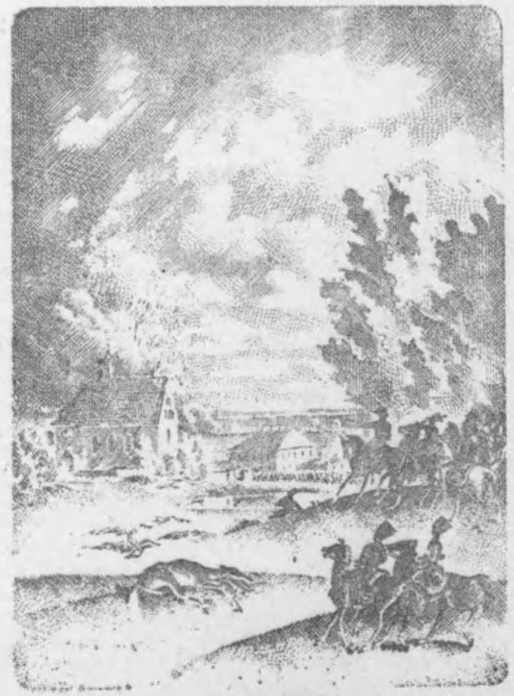
始



林書房版

特231
983

篇長 十字軍

517-16Pq

加藤朝鳥 著

ユスチニアヌス大帝がその都を圍繞させた城壁は、更にテオドシウス大帝の時代になつて、大改築が施された。時代から云へば寧ろ頽廢期に屬して居るが、その緻巧は愈々爛熟して來て、新たに美觀を增ましたその凱旋門は、玆土耳古の首都コンスタンチノポリスを訪ふ外客に威嚴の念を起させずには置かぬ門の頂きには勝利の女神の銅像が、テオドシウス大帝の爲めには飽くまでも見榮氣をして居ると云はむばかりの顏付きだ。之れをつくり出した藝術家もまさしく、その時代の頽廢的傾向そのまゝのものらしく、美と云ふよりも寧ろ豐富と云ふことが念頭の第一位を占めて居るその證據には、それよりも以前の、もつと眞率な時代に出來た多くの胸像などが、城壁の彼處此處に埋つて居るのであるが、それ等の美は一向に凱旋門の金飾燦爛とは調和して居ない。

此の時代の凱旋門は昔の土耳古の凱旋門とは大ぶその意味が違つて來てしまつた。昔の土耳古は遠征と掠奪とを誇る豪强國で、戰利品を此の『永久平和』の門に飾つたのであるが、今は寧ろ防禦、かの最大型の弩箭を射だすと云ふ五六のものものしい武器も、今は勝利の光榮を紀念すると云ふよりは、人を威嚇する爲めに、わざわざ置いてあるものと見るべきだ。

丁度夕暮れ時で、海から吹いて來る凉しい風は心持ちがいゝ。あまり身に用事のない散歩の群れは、此の凱旋門のあたりに杖を曳いて居る。矢張り凱旋門は此の都の誇示たるを失はない。土着の都人は之れを自慢の種にするし、初めて來た異邦人はひたすら驚異の眼を見開くばかりであつた。

特に玆に一人の異邦人があつた。彼は珍らしげに此の凱旋門の裝飾を凝視して居る。恐らく今彼は異常な想豫を此の凱旋門によつて動かされつゝあるであらう。その眸は吸はれるが如くに簷牙の端、釘頭のひとつにいたるまでも熱心に注がれて居る。彼は外國から來た軍人らしいものであることはその容貌と服裝とでもわかる。すくなくとも此の土耳古近邊に產れたものでは無い。

その年齡は二十二三歲で、體格は實に立派だ。鋭い碧い眼と、華やかな銀の兜の下から垂れて居る美しい髮、その兜は決して重さうなものでは無く、その頂には顎を開いて居る龍がついて居

り、北歐の傳統を曳いたものであることを思はせて居る。兜は華洒だが、しかも彼の容貌には一點も女性的なところはなく、如何にも力の權化だ。自信に充ち溢れて居る。その凱旋門を見る眼附も、たゞ呆然として見惚れて居ると云ふではなくて、むしろ强烈な心膽を以つて瞰みつけて居る態度だ。彼こそまさしく男性美の標本である。

潑剌とした生氣ある彼の態度は、其の邊に群つて居る人々の眼を引いた。君府（コンスタンチノポリス）の人達は自分達だけが文明人だとばかり自惚れて居たのであるが、何處か遠いところから來た異邦人に、之れ程の立派な態度があるかと、此の青年を見て內々驚いたのであつた。

此の青年の服裝には華洒な一面はある。前にも云つた樣にその兜は輕い。その胸當の銀の板も戰場の用にはたたない薄いたゞ飾りに過ぎないものだ。またその兩方の肩から背に垂らしてある熊の毛皮の樣なものがあるが、之れは武人が野獵に出た紀念を語るまでのものに過きない。腰に佩いた劍も、象牙と金で鞘を飾つた細い型のものである。肌にぴつたりとつけた紫色の服は、肘きでと膝まで、何れを見ても、たゞ戰場の重い物具を、型ばかりにして身輕に武士の姿を偲ばせると云ふに止めてあるのであるが、只一つがつしりとして重さうな戰斧だけは、慄つとする程物凄い。

此の重い斧だけは、此の青年の腕力でなくてはとても振り翳せない程巨きなものだ。その頑丈な楡の柄は澤々と手摺れの輝きを漾え、正しく戰場の勳を物語つて居り、三ケ月と冴えた諸刃の研ぎが氷よりも冷たさうだ。普通の人だつたら、これを擡げるだけでも一骨折れる筈だが、此の青年の掌に携えられて居ると羽根毛一本ほどの輕さにしか見えない。

當時一斑の君府の市民などで、こんな武器を平生携えて居るものは一人もない。此の青年がかくも大きな斧を持つて、悠然と凱旋門のあたりを佇むて居ると云ふのは、君府の皇帝が北歐の海賊國から傭兵として宮廷を警護させるために高給を拂つて優遇したバランジャン隊に屬して居ることを語るのであつて、當時北歐の荒武者と云へば、泣く兒も默つたと云ふその勇敢の象徴を、今彼の携へて居る巨斧に見ることが出來るのである。

此の警護の武士は、いつも君府の市民から好奇と警戒との目で見られて居た。彼等バランジャン隊に屬するものは、いつも宮廷のなかに居るのであるから、市民と接觸する機會も尠ない。それにその特殊な服裝はよく市民の眼を引き、話題にのぼることも多かつた。彼等は皇帝から高い俸給を得て居るから、錢使ひも荒つぽい。

だから今その一人が凱旋門の近くに逍遙して居るのを、市民たちが物珍しげに見て、互にさゝ

やき合ふのも無理もない事だ。

「オイ、彼處にバランジャンが居る。」

と一人が云ふと、

「どうしてあんなところに何時までも立つて居るのだらう。」とその相手が怪訝つた。

「用愼しろよ。皇帝は市民がどんな風評をするか、それをさぐらせに……」と極く小さな聲で耳元に私語いた。

「だつてさうは思へないよ。バランジャンは希臘語を知るまいからなあ。いくら勇敢でも僕等の言葉に通じないのぢや、間諜の役目は出來まいよ。」

「しかしバランジャンには各國の言葉に通じたものもあるんだ。あの凱旋門に書いてある文句を讀むで居る樣ぢやないかね。」

「危きには近よらずか。」

二人の市民は分別らしい顏付をしてその場を去つてしまつた。

するうち太陽は西に沒しかけた。城壁や堡塔や凱旋門やの影が西より長く長く地に曳いて次第に夜は黑ずむで來た。それでも尙ほそのバランジャンは其處を立ち去らない。もう既に小一時間

もその邊を迂路づいて居て、顏にも疲れが彰れて居るのであるが、恰かも憑きまふ亡靈か何かでもある樣に凱旋門の側から立ち去らないで居る。いや、立ち去らないばかりではない。彼は西の方の蓊然と繁つた絲杉の森の赤々と燃えたつた雲に夕陽が最後の光りを投げるのを見て居たが、軈て凱旋門の影にある石の腰掛けの一つを撰み、その上にどつかと腰をおろし、巨大な斧を身近に引きよせ、上衣を肌に纏ふやうにくるまりながら、三分間の程のうちに熟睡してしまつた。いかにもそれは堪え難くて眠つてしまつた樣な態度であつた。大かた此のバランジヤンは前夜徹夜の勤務でもしたのであらう。

かうして熟睡して居ても尙ほ彼は醒めて居る時の樣は威風を見せて居た。すると二人の男が凱旋門を潜つてそこへ來た。一人は輕快さうな痩型の男で、名をリシマカスと云ふ圖案師で、その手こ持つて居る卷いた紙と、白墨や筆やをいれた小さな腰の鞄が彼の全財產である。安價で壁畫などを書いてまはる破戸漢だ。も一人の方はがつしりした大男で、見るからに逞しい。それもその筈だ。彼は近頃君府で評判の力士でステファースと云へば、知らないものは無い。

「おい。ちよつと待つて呉れ。こいつ立派な恰好だ。一つ寫生しやう。」

と圖案師は、鉛筆を出しながら、眠てゐるバランジヤンを指して語つた。

「ウム、元氣さうな奴だ。だが何處の馬の骨だか判らないあんな外國人に美と力とを君は認めるか」とステファースは不賛成の心持ちで答えた。

「だが、いくら外國人にだつて、藝術の神は力と美とを惜まないね。」と力士の言葉に答えて、圖案師は寫生しやうと思つたが、次第に暗くなつて來る夜の闇は思ふにまかせなかつた。軈て此の二人も過ぎ去つて、暫く凱旋門をくゞるものもなかつたが、すぐと閉門の時刻が來た。此の時刻から君府の凱旋門には金扉に門が嚴かにかゝつて、夜の警戒がおろそかにはされないのである。此の時刻までに君府に歸れなかつた商買人などは、門をあけて貰ふ爲めに、高い金額を門番に拂はねばならなかつた。

さてその門番の眼に、此の熟睡したバランジヤンの姿が映らないでは置かなかつた。門番のひとりが云ふ。

「どうだ。此の頃は不景氣ぢやないか。——時に見えるかあれが。」

「あれが——つて何さ。」と云ひかけられ男はまだ新參者らしい。「あの眠て居る男か。月の光でよく見えるよ。皇帝直屬の禁衛門に傭はれてるバランジヤンだらう。」

「さうさ。君はあゝ云ふ處を見て何とか思惑も湧かないか。」

「おら何時もあんな外國の武士を見ると羨しいだが、おれ達土耳古の人間よりもよつぽど陛下から可愛がられたものだね。甘い酒にでも醉ひつぶれてあゝして睡て居るところを見りや營所に歸る道でも忘れたんだらうあいつ乃公達が案内でもしてやらなきや。酷い罰でも喰ふだらうが、只で案内も出來まい。いづれ財布を空にさせなくつちや……」

「そりや無論だ。だがなと。」古參の方は急に聲を低くしてしまつた。「だが、たつたそれだけかね君の考へついたと云ふのは、財布だけぢや物足るまいよ。金毛勳章も……おい見ろよ。あの胸當と兜とは輝いてる。みんな銀だ。こちらの扱ひひとつで、みんな舞込むで來るものだよ。」

「でも」と臆病な新參はおづおづした聲で、「でも、あれは陛下相屬の禁衛軍だ。そんな事をすればこちらが罰せられるやうなことになるかも知れぬ。」

「そこが君が新發布のリカルガス法を知らない馬鹿さ。僕等は首都防衛隊に屬する番兵で、首都防衛隊の兵士は告發されないことになつて居る。假に此の凱旋門近くで一人のバランジヤンが——バランジヤンと云へば、どうせ北歐羅巴の方から來た野武士に違いないが、その野武士が亂暴を働くとすると、僕等には充分にそいつを捕抑える權限がある。殺したつて大丈夫なんだ。」

それから何か此の二人はひそひそと話しあつて居たが、聽てそのリカルガス新法を知つて居る

方は見張番でもする樣に足を爪先立てゝそつと門の前の石の上に登つた。腕が自慢の新參の方は短劍を拔き放つて、後ろに置しながら盜み足で熟睡して居る野武士に近づいて行つた。銀の胸當の隙きを見定めながら。今にも一突きと云ふ一瞬間にがばと身を起して、片手でしつかりと下手人の手を摑まえ、殘る片手で斧を持ち、斧の先きで傷つかぬ樣に對手の胸を押しあげてしまつた新參の番人は身動きさへ出來ない。

石の上で見張りをして居る方は此の時大聲をあげた。

「オーイ。みんな來い。バランジヤンが番人を殺す——こつちは何んにもしないだ。門の近くに睡て居るから樣子を見に行つただけだ。——おや、禁衛軍の團長閣下が見えたぞ。」

と最後に意外な聲を出した。

禁衛軍の團長閣下——と云つた通り、その場には意外な嚴めしい武官が現れたのであつた。騷ぎを聞きつけて集まつて來た五六名の番人は、此の武裝の嚴めしい禁衛軍團長の前に嚴かな敬禮をするのであつた。

禁衛軍團長はづかづかと、バランジヤンのところに近づいて、鷹揚な聲で、しかも親しげに、

「ヘレワード。お前は泥棒でも摑まえたのか。」

「さうです。破戸漢と云ふ奴でもありませう。」とそのバランジヤンは極めて沈着に答えた。
「何と云ふ名前のものだ。」
「咽喉を放してやりましたら申しますでせう。」
「放してやるがよからう。」と團長。
ヘレワードは團長の言葉通り、その手を緩めると、番人は脱兎の様に逃げ出した。凱旋門の複雑した間をあつちに抜けこつちに抜けて巧みに身をかはすのであつたから、それを追つかけるヘレワードは、たゞまごついて居るばかりであつた。一方は身輕な上に痩せこけた男であるのに反し、一方は武装して居る身であるからどうすることも出來ない。それを眺めた團長はからからと笑つて、
「ヘレワード。逃げるものは追つかけなくてもよからう。」
と云つた。
「閣下のお望みなれば赦してやりませうか。」とヘレワードは呼吸をはづませながら、不満足な顔付をして團長の身近に歸つて來ながら、
「あんなやくざ者を摑まえるのは何んでもないことですが、此の武装が厄介で御座いまして。」と

目面なげに云つた。
「そんなことは何うでもよいでは無いか。」と團長は如何にも皇帝直屬の軍團長であり同時に陛下の最も身近にある重臣の一人であると云ふ驕揚な態度と威嚴とを仄見せながら「しかし、何うして番人はお前にそのような悪戯をするのであらう。みなが組むで居てその様なことをするとしたら、捨て置けない事でもあるやうに思へるが。」
と云つた。
「そこです。閣下。閣下の御力で御糾名ありましては如何でせうか。」とヘレワードは眞面目に凛とした張りのある聲で云つた。
「おい・おい。そんなことはもつと靜かに云ふものだ。お前は單純過ぎて困る。お前は北歐……しかも英吉利の田舎者まる出しの正直者だから、そのお前には此處の朝廷の複雑ないきさつはよくは判るまい。まあ私に隨いて來るがいゝ。私はお前には此の朝廷の込みいつた微妙なことは話して聞かせても判るまいとは思ふが、しかしお前は稀代な正直ものだ。立派な信用すべき心掛けを持つて居る。數多いゝバランジヤン隊のなかでも、お前の様な善心のある兵士は比類が無い。私の腕ともなつて呉れる心掛けがあるならこれからは、此の朝廷に流れて居る祕密もいろいろ語

つて聞かせよう。バランジヤン隊は斧の偉力で押したてられて居るのだが、此の私がその團長として宮廷の暗流を乘りきつて行くのは、容易なことではない。私はいろいろな策略にも長けて居る。どうじや。日頃から私の腕は冴えてるとは思つては居らむか？」

二人はかう云ひながら、凱旋門につゞく城壁のあたりを、月に照らされながら、靜かに歩いて行くのであつた。ヘレワードは、

「閣下。私は腕つぶしにかけての御忠義は退けはとりませぬが、私に思案の御相談は無理かも存じませぬ。」

「その腕つ節が欲しいのぢや。お前の智慧はまさか賴みにはなるまいよ。私の云ふことさへよく聞いてやつて下れさへすればよい。お前に信賴して居るのは、その勇敢と正直とぢや。今夜も一つ賴みがあるのぢやが、よく了解して呉れるかね。」

「閣下。眞心罩めて了解仕りませう。閣下の御策略の深さはとても測り知れない深さで御座りませう。閣下の御武勇の程は先づ承知致して居りますが……」とまで言ひ足してしまつた。

之には閣下もすこしく顏を赤めて、どぎまぎした態であつたが、急に崩れた樣な調子で、「いや。よいとも。よいとも。お前も私も同じ戰場で戰つたのだつたね。」と云ひ紛らせてしまつた。

どうも斯うした會話の調子が、閣下よりもヘレワードの方がどつしりとして、ともすれば閣下の方を壓迫してしまひさうな態度だ。閣下の方が一つ言葉を用ゐるにも注意してでると云ふ有樣だ。と云つて此の野武士には何等の暴慢なところも無く、上官に奉仕する態度は如何にも節度に適つて居て、寸分の落度もない。閣下は

「ほんとうにお前の調子はさつぱりして居ていゝ。何しろ此の君府の朝廷の複雜な黑幕の奥をお前に理解る樣にはつきりと見せると云ふのは容易のことではないよ。ぢやが、たゞ要點は何よりも陛下の御機嫌、その依怙贔負と云ふことが眼目ぢや。何しろ陛下は太陽の樣にまんなかにあるのぢやから」

「皇帝陛下は太陽の如しとは、兼ねてからよく聞いた言葉で御座ります。」とヘレワードは相變らず眞面目な顏付きをして居る。

「敎會の僧侶達もよく其麼ことを云ふのぢやらう。大僧正がお前達戰斧隊の兵士をあつめて說敎をする場合には、きつとさう云ねばならぬことに決つて居るのぢや。」

「毎度それを聞かして貰つて居ます。」

「そこの處ぢやが。」と戰斧隊の隊長閣下は妙に變な薄笑ひを浮べながら、「これは我々の生れた

北歐の方では斷じて無いことぢやが、此の君府は熱帶で絲遊が多い。朝生れて夕べに消える果ないものばかりで、たゞ皇帝陛下に媚びるばかりで榮華を夢みて居るのぢや。あはよく皇帝陛下の御意に適つて、その眞晝時の輝かな榮光とともに、榮華の頂上にのぼるも束の間で、すぐに夕榮えの跡さへなく黑闇に消えて行くと云ふのが、此の朝廷の慣ひぢや。」

「閣下の仰せられる言葉はあまり奧床しいもので我々虫けら同樣の下賤な耳にはすぐと解りかねまするが、しかし虫けらでも夜になれば死ぬとは限りませぬ。また翌る日の太陽が輝くものと心得て居りまする。」

「それが、ヘレワード、下司悟と云ふので、立身出世を望まぬ凡骨の口癖ぢや。野武士風情ならいざ知らずぢやが、僕は皇帝陛下に最も身近く居る高貴な身分ぢや。皇帝アレキシウス陛下を繞る貴人達は、みんな嫉妬の烈しい眼付でお互を隙間もなく狙ひあつて居る。そしてわれ一と陛下の愛顧を得やうと、どんな機會ものがすまじく、徒黨を組むだり、陷穽におとし入れあつたりして居るのぢや。」

「閣下のお言葉は此の耳にも解りかけた樣な氣持ちがいたします。ですが、その樣な面到臭い複雜なことは、いつそやめてしまつては如何ですか。」

「さういふわけには行かない。ヘレワード、お前には榮華を望む心が無いから幸福なものぢやが北歐の蠻地から來たものでも、此の朝廷でいくらも榮華を極めたものがゐるのぢや。策略一つで、その運さへつくつて行けばよいのぢや。みんな自分が偉い天分を持つて居るから偉くなると云ふのではなくて、他人を陷穽込むことが上手でさへあれば偉くなれるのぢや。」

「解りました。では陛下のぐるりには、お互を援けあふのではなく、お互を陷穽れる、探偵見たいなものばかり居りますのですか。」

「さうぢや。ほんの三四日前も僕はその苦い經驗をした。誰も見る人は見て判つて居るだらうと思ふが、實はあの總元帥が日頃から僕を心よく思つて居ない。それと云ふのも實は僕が率ゐて居るバラジヤン隊だけは、陛下直屬で、あの總元帥の自由にならないところから、始終僕を眼の前の瘤の樣に思ひ、何時も陛下の前で戰斧隊の惡口を云ふのぢや。」

「あの總元帥がわれ〳〵戰斧隊の惡口を申すとは、」とヘレワードは眦を決しながら、

「われ〳〵戰斧隊の赤龍旗にかけてもその理非を糺さねばなりますまい。」と力みあがつた。

「その憤怒は尤ものことぢや。ぢやがその爲めに皇帝陛下に御迷惑をかける樣なことがあつてはならぬ。總元帥の言葉がどうであらうとも、われ〳〵戰斧隊の威光には何の差しひびきもゐる筈は

無い。しかし四方に敵はある。僕が禁衛軍團々長として戰隊を率ゐて居るのも容易な苦心ではない。ハン族、ラキシアン族、それからあの頭にタアバンを卷いた背信土耳古人達は絶えずわれわれの虧隙をねらつてばかり居る。その爲め實は僕の身邊には何時も危險が纏めて居る有樣、何時暗殺されるか判らない有樣ぢや。と戰斧隊軍團長のアキレス・タチウス閣下は感慨の深かさうな顏付きとしたするとヘレワードは、

「いや。此の戰斧で如何なる危險をも御防ぎいたしませう。」と巨斧に手をかけて自信に滿ちた顏を輝かした。

「それでこそ、僕は安心して居るのぢや。」

「此の腕は戰斧隊以上のどの勇士が二人かゝつて來ても大丈夫で御座ります。」

「勇ましいことぢや。それにしても忌々しいのはあの總元帥で、實はわれ等戰斧隊の兵士達が陛下御用の美酒を盜み飲んだと、高官の並み居る前で惡口をしたのぢやが。」

「あの總元帥がそのやうな虛構をいたして戰斧隊を陷穽れやうと致しましたとは、閣下、どうぞ何處へなりとあの總元帥をお呼び出しになりまして、此のヘレワードに一擊斧を振らして下されませ。」

「シツ靜かに、その樣な大聲を出すものでない。お前の腕を味方にして居る以上、總元帥の五人も來やうとて何も惧れることはないが、しかしそれは決して此の君府の朝廷で行ふべき事では無い。それこそ全く野武士のする事ぢや。まづよくと物の道理を考へて見るがいゝ。」

「すればいつたい何う致せばよいので御座りますか。」

「どうも出來まい。實はあの總元帥が云つたことも幾分の事實がないとは云はれないのぢやからなあ。」

「エツ。幾分の事實とは？　われ〳〵戰斧隊の兵士がまた陛下の美酒を盜み飲むので御座りますか。」

「盜んで飲むだと云ふ程でもないが、まあ、そんな事實があつたぢやないか。」

「何時、何處で御座いました。」

「お前も慥か記憶えて居る筈ぢや。戰斧隊が土耳古の大軍を擊破して、ラオデシアに長途の追擊をやつて、陛下の聖酒の樽を奪還したことがあつたつけ、あの時お前も咽喉の渴きをどうして癒したか身に覺えがあるぢらう。」

「ありますとも。あの時は長い追擊で、われ〳〵の咽喉は壁埃でおしつまる程に渴いて居り、激戰

また激戰に疲れきつて居るところに丁度見つけた酒樽が三つ四つ、箍が外れて酒が流れでて、われ〳〵の咽喉にしつかりと這り込みました。故郷の英吉利などでは夢にも味はえないうまいお酒で御座いましたが。」

「それが、その、運わるくも陛下御尊用の聖酒だつたわけぢや。陛下聖膳部の密緘がしてあつた樽ぢやつたさうだ。」

「いや。それは神かけて夢にも知りませんでした。それに閣下御自身も、此のわれ〳〵の兜——杯では御座りませぬ。此の大きな鐵の兜になみ〳〵と注いで、一のみに飲み干されました上に、みんな飲め飲め、是れ等の酒樽みんなあけて、戰斧隊は勢をつけよと大聲にお叫びになりましたことをよく覺えて居ります。」

「僕もあの時は、夢我夢中ぢやつたよ、ぢやがヘレワード。間違へてはならぬ。僕が飲め〳〵と大聲で云つたのは、あの陛下の聖酒ではなくて、密緘のない聖膳部頭が飲む分の樽を云つた筈ぢやつたがなあ。」

「どちらに致しましたところで、あの際は咽喉が干涸らびて死にさうな場合。飲んだお酒で咎められるとはちと酷な樣に思ひますが。」

「まあ。その心配はしなくともよいよ。陛下は充分に御寛大にあらせられて、よしむば總元帥がいくら執念深く讒言がましい事を申すにしても、決して深くはお咎めにはならなかつたのぢや。かへつて總元帥の方をおたしなめ遊ばされた上、あの酒は勇ましい戰斧隊が朕が聖壽を祝ふために飲んで呉れたと思へばよいとのお言葉だつたのぢや。これも此のアキレス・タチウスが日頃から御寵愛をうける樣に肝膽を碎いて置いた甲斐ぢや。」

「陛下の聖壽を祝する爲めなら、濁水だつて飲むだところですから……」

「さうぢや。兎にかく之れは濟むだことぢやからよいが、ヘレワード。之れからお前は陛下のお名前を云ふ時は、必ず兜に手をあげて敬意を表することを忘れまいぞ。總元帥のニカノルは何ぞと云へば、わが戰斧隊の缺點を探さうとばかりして居るが、こちらからも逆手をとつて、此の君府の城門の番兵が、夜おそく歸る商人を脅嚇して、財寶を奪ふことを實際に見やうと思つて、僕は今夜はわざ〳〵斯うして出かけたわけぢやつたが……」

「それは丁度のことゝ現に今城門の番兵は、この胸をさへ突き刺して、手前の胸當でも剝がうと思つた程でありましたものを、閣下さへ赦してやれのお言葉がなかつたら、生きた證據を現に摑まえることが出來ましたものを、」

「それもゆるしてやつた方がよかつたかも知れないよ。今夜宮殿では大僧正が、僕と總元帥との間の確執を調停することになつて居るし、それが出來たら國家の安泰と云ふのぢやさうだから、あまり騒がないのがよいかも知れぬ。陛下はなか〳〵の智慧のお深い方で、事はこちらから荒だてずとも、そのまゝ圓く治めて下さるのぢや。」

「そして戰斧隊への御信任は何時も變りませぬのでせうか。」

「變らないどころか、今になにか御褒美でも頒ち下さるかも知れぬ。ヘレワード。お前も戰斧隊の一人である以上、そのお褒美が貰つて、お前の斧を金箔で塗ることが出來るかも知れないぞ。」

「いや。手前の斧は此のまゝにして置きます。此の斧は手前の祖父がハスチングで剛盜を斬つてこのかた名たゝる鐵斧で御座います。」

「それはどうともお前の好み通りするがよからう。」

かうしてアキレスとヘレワードとは君府の城壁の外側を沿ふて、冴えた月に照らされながら將軍と一兵士との差異もないく親しげに語つて餘程、夜を更かし、更かし歩いて居るのであつたが不圖城壁の一部――こゝは凱旋門からは餘程離れてゐる――とある小さな門の前に立ちとゞまつた。

二

その小門の前でアキレスは二三の作法をして見せると、バランジヤンはそれを無恰好な身振りで眞似て見た。これはアキレセが野武士に宮中の作法を教えたのであつた。君府の朝廷の作法は世界でも有名な八釜敷しいものであつた。もとよりバランジヤンのヘレワードは日頃から其麼ことを夢にも心得て居やう筈も無い。

その二三の躾けを教えて置いてからアキレスは小門の扉を靜かに叩いた。叩いた數は三度で、之れも儀式と云へば儀式の一つである。そしてヘレワードを顧みながら「此の門のなかでは必ず謹むで僕がするやうに見做つてせねばならぬぞよ。」と云つた。そして門の扉が開くとなかから射し出すべき輝きの眩しさを避けるつもりであらうか、アキレスは顏を下に向け兩手で眼を蔽つたヘレワードは其の眞似をした。

軈て門の扉は靜かに開いたが、別に輝かな光も射して來なかつた。四人のバランジヤンが番兵として立つて居た。何れも戰斧を嚴かに翳して、怪しいものならば一擊のもとにと云ふ身構えであ

る。

「アクロメス」とアキレスは合言葉を發した。

「軍團長閣下！」と番兵は云つた。そして翳した戰斧を下におろした。

アキレスは兜の華々しい裝飾をわざと輝くやうに見せながら、將軍らしい威嚴をとゝのえて這入つた。ヘレワードも默々として隨いて行つた。そしてそのあたりの優雅な情景になんだか自身が這つて行くのが頗る相應しくない樣な變な心持ちに襲はれた。番兵の立つて居る間を潛り拔けて行くと一つの濠があつてそれに狹い長い板の橋が架けてある。そしてその橋の端が、向ふの城廓の出張つた石壁に返つて居る。

「此の橋が名高い「危雜の橋」と云ふのぢや。」とアキレスはヘレワードを頗みながら言つて聞かせた。「此の橋には時によると油を塗つたり、豆を蒔いて置いたりして、通るものが濠のなかに滑り込む樣にも仕掛けられることがあるのぢや。此の濠はすぐと金の角の港にも續いて居るのぢやから、宮殿からも顯な人々が旅に出る場合には、すぐとこゝから船出も出來るのぢや。」

「では此の橋から皇帝陛下も。」とヘレワードが云ひかけたのが大きな聲だつたので、アキレスは「シッ！　靜かに。こゝですこしでも谺のする樣な大聲をあげると、罰則に照らされることにな

つて居るのぢや。構えて大きな聲をあげるではない。」

ヘレワードは恐縮しながら、「閣下。手前の聲はどうも此の宮殿に似合ふやうに細つそりとして居りませぬので殘念で御座ります。此の樣子では手前は朝廷にあがりましてもお話をいたすことが六ケ敷しさうでなりませぬからたゞ默つて居りまする、もし誰方樣からか話しかけられた時だけ物を云ふことに心を決めました。持ち前の聲を細くするとは、まことに辛いことで御座ります。」

「そうぢや。さう心掛けて置けば間違ひはあるまい。此の奧には澤山の貴顯な人々が居り、皇族も居られるのだから、話しかけられた場合はお前の一番低い聲で返答をする樣にしなければならない。よくお前が食卓でやるやうに雷の樣な哄笑をやつて人を笑はせる樣なことは夢にもしてはなりませぬぞ。」

「だから手前は默つて居ることに決めました。」とヘレワードは少し慍つた樣な口調になつて、「默つて居ると誓つた手前の言葉を信じて下さい。それと反對に何處までも手前を大聲で怒鳴るやうにお危ぶみなさいますなら、いつそ手前は此の儘外に出て行きませう。宮殿のなかなど見たくもありませぬ。」

アキレスはあまり部下に機嫌を損ねてはならぬと思つたか、ヘレワードの此の一本調子をそつと柔かな言葉で包む様に、慰めの言葉で答へた。ヘレワードは心のうちで野武士の魂を持つて居ることが矢つぱり自分にはいゝことだと思つたのであつた。

宮廷内の複雑を乘りきる手練にかけては剛のものアキレスは、此の野武士を連れながら、二つか三つかの建築を過ぎて行つた、何の入口にも戰斧隊（バランジヤン）の兵が番をして居た。も一つ大きな建築にはいると、其は戰斧隊の司令部が置いてあるところで、幾人かの武士が何か骨牌の様なものを遊んで時を過ごして居る。強い香りのする酒壺も隅に置いてあつて、時々底の深い杯でそれを飲みに行くものもある。夜の宿直はなかなか怠屈であると見える。みんなヘレワードの顔なじみの同僚達で、一所に遊び度い様な心持ちも起つたのであつたが、將軍に連れられて居るので默つたまゝでゐた。軈てその司令部を過ぎて行つて、今度は贅澤な輝かな部屋へとはいつて行つた。

それからまた長い廻廊や、廣間やを、將軍はよく案内を知つて居ると見え、縫ふやうに通つて行つた。何時も默々として靜かな步調だ。あたかも高い天井に反響するのを恐れる様な恐縮振りである。これ等の建築の入口やまた廻廊などには哀れな阿弗利加人の奴隷が居て、手にサーベル

を拔いて見張番をして居るのもあるし、また絨氈の上に腰をおろして骨牌を戲れて居るのもあつた。これ等の阿弗利加奴隷達もみんな默つたまゝで、たゞ將軍に對して目禮だけをして居るに過ぎなかつた。そんな處を幾つか通り拔けて、最後に來たのが、黑大理石かなにか、とにかく黑い石材で造つてある天井の高い長い一室であつた。多くの廊下が此の部屋に聚まつて居る樣に見えたが、油の灯りでぼんやりとして居るので判然見定めることが出來ない。たゞその部屋の上手と下手との兩方に強い輝かな灯りが提げられて居るので、室内が明るく照されて居る。此の黑石材の大きな部屋の中央に來た時に、アキレスは、ヘレワードに極小さな聲で、あの「危難の橋」を渡つてこの方の沈默を破つて、

「僕が歸つて來るまで、此處に待つて居れ。何の樣な事があつても此の室を去らないやうにして居れ。」

と耳元に私語く樣に命令した。

御言葉通りに。」と戰武士は型の樣な反辭をして畏まつた。だがたつたひとり此の薄氣味の悪い夜の廣間に殘されるのは流石に變な心持ちがした。アキレスは朧ろな光のもとに音なくそつと扉をおして何處かへ行つてしまつたのである。

ヘレワードは暫く動かないで此の黒石材の壁や天井やを見まはして居たが、軀て重い歩調で室の下手の方の扉に行つて居た。その扉は極く低い鐵製の不恰好なもので、扉の上の方には銅製の耶礫像が凄く飾つてあつて、そのぐるりに手枷足枷だの鎖だのが氣味悪くも絡ませてある。その扉が半分ばかり開いたまゝになつて居るので、ヘレワードは將軍から此の室外に出てはならぬと命ぜられたまゝたゞ顔だけ扉の外に出して覗いて見た。外は濃い、赤い光りが、螺旋型になつた下向きの階段に照らして居り、その階段のぐるりまはつた底の方が、丁度井戸側かなんぞの様に地下の方に續いて居る。何んだか地獄に行く門でもあるやうだ。單純な野武士の判斷にも之れは宮廷内の牢獄だなとはすぐにわかつた。それでこそ此の邊にこんな沈鬱な氣分が漲つて居ることが讀めた。さう思へば何んだか地の底の方から、罪囚が苦しみ呻めて居る様な聲さへ微かに聞こえて來る。

「……己れは何んにもしない。こんな地獄牢などにいれられる筈は無い。……」野武士は心のうちで斯う思つた。「……アキレス將軍は日頃から何處にか獪いところがあると思つたが、よもや己れに虚言をいつて此處に連れて來たのではあるまいか。よしさうだつたら此の斧の一撃だ。だが、上手の方にも行つて見やう。あつちはどんな風か知らむ。

とさう思ひながら、武具をつけて彼の重い足はどしり〳〵と識らぬまに此の黒石材の廣間の上手の方に向つた。こちらの方の扉はずつと高く、上の方には異教の寺にある祭壇の様な彫刻が飾つてあり、此の祭壇から何か芳烈な香の煙りが渦を卷いて居る。何の意味の煙か野武士には理解が出來なかつた。それにまだおかしいのは、その祭壇の兩側から二本の銅製の腕が掌を展げたまゝ突きだしてある。その様子が何か幸福でも賜すと云つた様に愉快げに突き出された手だ。その腕のあたりにも匂ひの高い香の煙が漲つて居る。野武士は單純な心で考へて見た。「……これは一つたい何んの意味であらう。此の突き出した手が拳を握つて居るなら、此の室は練武場だと云ふことにもなるが、指を開いて居ると云ふのはいつたいどう云ふ事だらう。さつぱり判らない……」

さう思ひ迷つて居る時、アキレス將軍はその出て行つた同じ扉を音もたてず靜かに開いて歸つて來た。

「ヘレワード。こちらに參れ。これからお前には重い思召しがかゝる。お前は根かぎりの忠誠をつくして、陛下の御信任に酬ゐねばなるまい。度胸を据えてかゝらねばならないぞよ。」

「何んの御心配は要りませぬ。此の腕の力は如何なる猛者を向ふにまはしましても……」

「オイ〳〵。そんな大きな聲を出してはいかぬ。何遍も注意したことではないか。それにお前はその斧をさう高く抱えて居てはいけない。もつと低く下におろすがよい。いつそ斧は玆に置いて行つた方がよくは無いか。」

「閣下。斧は武士の魂で、我が身から瞬く間も離したくはありませぬ。斧と云ふ魂がなくては手前は何事も致すことが出來ず、すこしも心が落ちつきませぬ。」

「さうか。それでは斧を携へて行つても構はぬが、かまへて大聲を出してはならぬぞ。夢にも玆を戰場と思ひ違えてはならぬ。宮殿中の最も崇嚴な場所、神聖中の神聖なところだから。」

將軍はヘレワードに斯うよく念を押して、扉をあけて奥の方へと連れて行つた。二重の嚴かな扉をくゞつて、はいつて行つたのは、野武士の眼には夢かと思はれるやうな美麗な廣間であつた。

玆は此の君府の朝廷に君臨する現東羅馬皇帝アレキシウス陛下の最寵愛の内親王アンナ・コメニア姫の修史室と云ふべきところである。姫の文藻は世界に名高く、一代の文星と仰がれ、特に姫の歴史學の造詣は深い。九重紫美の奥の生れでその文學的天才を輝かすのであるから、此の修史室に集まる諸天才も多く、姫はさながら生ける文藝の女神の如く尊ばれて居る。

姫の明眸を湍然とした姿態とはまたまさしく君府の花で、今、小型の瀟洒とした椅子にその淑

雅な身をよせかけて深夜の輝きのものに默然として居る。姫の前の卓上には書籍が山と積まれて居り、その間に珍奇な植物や羊齒類の鉢や繪畫なども置かれて居る。姫の座席になつて居るその小型の椅子は、高い臺の上にあつて、姫の言葉を聞かうとするもの、或は姫から語しかけやうと思ふ人々は、その臺の前にすこし離れておいてある一段低い臺の上で跪座して姫と聖話を交へると云ふ事になつて居る。尚ほこのほかに三つの椅子が段々に置かれてある。

其の第一の椅子は姫と同じ高さの臺の上にあつて、姫の椅子と酷く似て居る。此れは姫の配伉であるニセフオラス・ブレニウスが座すべきところだ。彼は姫の博學を最も讃美して居る人だとのことであるが、しかし宮女達の噂の如くんば、あまり熱心には此の修史室にやつて來ず、姫の文藻に接しやうとはしないさうだ。彼よりは姫の兩親の陛下の方が餘つ程熱心であるとのこと、その理由に就いては御殿雀の曰く、アンナ・コメニア姫は偉い學者にならせられない前はもつと美人であつたけれど、學問を積め込むにしたがつて美しさが減る樣になつたから、それでブレニウスは此の修史室に來ることを餘り好まないのだと、

あとの二つの椅子は卽ち兩陛下の玉座だ。錦繡の肘掛と埋もる如き心持ちのいゝクツションからは寶石を縷めた總が輝かに長く垂れて居る。特に皇后のイレネは姫の學才を深く嘉して、姫の

新しい文章が綴られる度に必ず來て誇らしく傾聽するのである。皇帝アレキシウスはまた自分の戰歷などが姫の美しい文章で書かれる場合など一層悅にいつて姫に對する慈愛の心が止め度もなく湧きあがるのであつた。大僧正のゾシマスも、其他學者聖者も多く集まつて、姫の筆端から雲と湧き出る哲理の神秘に觸れることを此の上ない光榮のことに思つた。

今夜の修史室の夜會では、姫の配伉のニセフホラス・ブレニウスの席を除いて他は全部着席されて居て、兩陛下の如きは特に御機嫌うるはしく見えた。だがブレニウスの居ないことはいさゝか姫の美しい額に不滿の小波を寄せないこともない。姫の兩側には仙女の樣に白い衣をつけた二人の侍女が端座して居る。此の侍女たちは姫の爲めに書籍の持ち運びをしたり、姫の執筆の際に卷いたパーチメントを展げて居る役目をして居る。一人の方は名をアスタルトと云つて美麗な筆蹟を持つて居るので有名で、一度危くも文盲の埃及王に平和條約の贈物として送られかけたのを危くも遁れたと云ふ女奴隷もひとりの方のビオランテは音樂の天才で歌ふ聲を美しく、一度アブリア老侯のもとに賣られて行つたこともあつたが、年寄りで聾になつた老侯は、その頃十歳未滿のビオランテでは慰めることが出來ず追ひかへされたと云ふ女である。

姫や陛下やの椅子のある高い臺からずつと離れて低い床の上に朝廷の貴顯な面々がずらりと跪

座して居る。腰かけるのをゆるされて居るのはたゞ大僧正のゾシマスと他に二三の古老の學者聖者達に過ぎない。年の若い學生達はずつと後ろの方に置いてある長い座席につく事をゆるされて居る。それから向ふが前裁の樣になつて、噴水ののぼつて居る池の岸に四五人の高官の席がある。噴きのぼる水の飛沫が、珍奇な花の影や熱帶的な植物の葉をくゞつて來る風に運ばれて、涼しさと匂ひとを此の夜の集りに齎すのであつた。そこへかなりに年をとつては居るがミカエル・アゼラステスと云ふでぶ〳〵に肥つて居る妙な男が、昔の大儒學派の哲人の樣なぼろ〳〵した衣服を纏つて、悠然と構え込んで居る。アゼラステスはその行動が漂逸なので名高い。その思想は共和の哲學でありながら、平生の行動とは頗る矛盾して居る。そして此の男に就いて最も不可思議なことは、もう六十歳の上を幾つも越して居る程の今までの長い間、杖をゆるされて居るにもかゝはらず杖をついたことがなく、また椅子に凭つたことが無い。だから彼の友達からはエレフアンスと云ふ綽名を貰つて居る。エレフアンスとは象の事で、象は昔から腰かけたことがないと云ひ傳へられて居るからだ。

「だが、僕は百獸園のなかで、象が腰をかけて居るところを見ましたよ。」と誰かゞ云つた。

それを大僧正のゾシマスが聞きつけて、「そりや主人を背に乘せる時だらう。こちらの象だつて

その時はさうするよ。」と輕い皮肉の様なことを云つた。此の君府では皮肉や戯談やを云ふことは嚴かに禁じてあるのであるが、大僧正と云ふ顯榮な職にある以上は此の位な程度はゆるさるべきだと云ふ顔付をして、ゾシマスは悠然と構え込んだのであつた。

丁度此の時にアキレス將軍は野武士のヘレワードを連れて此の修史室に這入つて來たのであつた。將軍の心持ちでは一方に野武士が無態なことを振舞はねばよいがと云ふ懸念もあつたのであつたが、また一方には自分の部下の勇士中の勇士は此の男であるぞと云はんばかりの誇りさへあつて、堂々と歩いて來たのであつた。

一座は此の不意の闖入に驚いた。が將軍は平氣で玉座の方に近づいて行つた、ヘレワードは流石に狼狽の氣味があつて、一寸取亂した風情だつたが、すぐと沈着になつた。將軍はヘレワードに氣を落ちつけてと云ふやうな眼くばせをした。そしてはやく兜を脱いで皇帝の前に平服の禮をせねばならぬと云ふ意味を仄めかしたのであるけれど、此の野武士はその様な禮儀は寸毫も心得ず丁度戰場ですると同じ様な氣持ちで、ずか〳〵と皇帝の前に進みで〻跪き、片手を輕く兜のところにあげすぐと立ちあがり不動の姿勢をとつて斧を肩にし、さながら番兵でもあるかの様に陛下から命令の下るのを待ち構えた。

くす〳〵笑ひ聲が擴がつて行つた。

すこしばかり前から皇帝はよい氣持ちで居眠りをして居たところであつたが、此の笑ひ聲に不圖眼をさまして見ると、眼前に野武士が斧を持つてつ〻立つて居るので、すくなからず度膽を拔かされた。もとより信頼して居る戰斧隊の一兵士であつて見れば、別に生命に對する危害とまでは考へなかつたが、今までよい氣持ちで寵愛する姫の名文章の朗讀に魅せられて居た心持ちが、遽かに變化してどぎまぎせざるを得なかつた。

そしてじろ〳〵見まはしてやつとアキレス將軍の姿が眼に映つたので「將軍は何故此の場に野武士を連れて來たのか?」と訝つて聞いた。一番驚いて恐怖の念に襲はれた様に顫えたのは總元帥で、大僧正もまた平靜ではなかつた。がアキレス將軍が、二言三言、皇帝の記憶を呼びおこして實は陛下の勅命で此の野武士を探して連れて來たのと云ふと、皇帝は俄かに相好を崩して、「おゝ。そうぢやつた。賴母しげな野武士ぢや。」と云つて、やつと額の皺をのばしながら、「すつかり忘れて居たよ。あまり姫の朗讀が面白かつたから。」としてはつはと笑ひながら、全く打ちとけた態度で野武士の方に向ひ、「立派ぢや。立派ぢや。北歐武士は朕が股肱ぢや。」と眼をほそくした。實際、宮中の狡獪な大官等よりも、此の野武士の單純の方がどの位氣が置けるか知れない。

皇帝は大官達に對してこんな程度に打ちとけたことは今まで一度も無かつた。

ヘレワードは謹嚴な態度で微動だもせず、大聲一番よく響く朗かな聲で、

「陛下の聖壽はかぎりなく。」

と叫んだ。殿中に谺した。皇帝は莞爾として愈々御機嫌斜めならず、すぐと近侍を顧みて、

「酒を持つて參れ。」

との御命がくだつた。

時を移さず近侍が銀の杯を運んで來た。皇帝はその杯を一寸唇にあてゝ、そしてそれをヘレワードに渡し飲めよとの御意を示した。野武士は受けて、漾々と注いであるのを一呑みに干してしまつた。此の天眞爛漫な率直な態度がまた一堂の微笑を買つた。皇帝も悦に入つて聲を出して笑つた。そして、

「どうぢや北歐の勇しい武士。お前に此の酒の味がわかるか。」

「此の酒の味には覺えがあります。ラオヂシアの戰ひで飲みました。」と野武士は眞面目くさつた顏つきで答へた。

アキレス將軍は思はずも話題が微妙な點に觸れて來たので心のうちではら〳〵し出した。ヘレ

ワードにそれを注意しやうとあせるけれど、野武士には何等の反應が無い。眼の色で頻りに合圖するのであつたが、たゞ謹嚴と率直そのものゝ樣な野武士は皇帝の前でひたすらに正直に物語らうとするばかりである。軈てアキレス將軍のあせる有樣が、大僧正や總元帥やの眼にも映らないでは置かなかつた。

皇帝と野武士との間の問答は一方でどし〳〵進むで行つた。

「何うぢや。此の前の味と今のとどちらが善いやうぢや。」と皇帝が問ふと、

「今頂きますお酒の方が甘い樣でも御座りますが、しかしあの戰場で、太陽に照らされ、汗まみれとなり、此れで。」と斧をつき出しながら、「盛に敵を追ひ散らしたあとで、思はずもありつきましたあの時の酒の味は一生一代忘られさうにも御座りませぬ。」

するとその時側の「象」と云ふ綽名のついたボロ着物の哲學者アゼラステスが横あいから、

「今の御酒のすこし物足らないと察せられますのは、あのラオヂシアの戰場の時のに比較べて、杯が小さ過ぎるかと思はれます。」

と云つた。

「左樣で御座りますとも。」と野武士は愈々眞面目な顏付で、「あの時手前は兜で飲みました。」

アゼラステスは愈々圖に乘つて、よくもとるロ調でもつて、「兜で飲むだ勢だとすれば、その杯ごめに咽喉にはいつてしまはないのが不思議、此の野武士は餘つぽど氣を小さく謹むで居ると見える。」

野武士は依然として沈着な態度で「杯　咽喉には通りませぬ。兜で飲むだ時は、あなたよりはもちつと若い氣前のいゝ親分に注いで戴きましたから、咽喉をとほつたかも知れませぬが。」と云ひ放つた。

皆は顏を見あせながら笑ひを殺した。すこし手酷すぎる程老哲學者は野武士にやられたのがおかしかつたのであらう。

皇帝も微笑を浮べて居たが、「此の勇ましい北歐武士を弄ぶとは失禮ぢや。」と云つた。

アゼラステスは俄かに小さくなつて沈默してしまつた。恰も哮えるなと獵師に叱られた獵犬の樣にみすぼらしく、

此の時アンナ・コムネア姫は、美しい顏にもう待ち兼ねて居ると云ふ色を見せながら、

「父君陛下。今夜わざ〳〵來て貰ひました此の北歐武士に、はやく私の戰記を聞いて貰ひまして事家の相違をたしかめた上、ミューズの殿堂にお收めいたすこととと致しませう。」

と云ふと、

「はやく姫の言ふまゝに。」と皇后は娘の才に溺れた母心から賛意を表したのであつた。皇帝ももとより皇后の心持ちに不賛成の筈も無かつた。

三

姫の戰記をヘレワードが讀むで聞かせて貰ひながら、頻りとまた自分の記憶して居るところなど沈着に物語つて居るうち、夜は益々更けて行つた。

其處へ突然に修史室の大扉が嚴かに開かれて、貴顯な一人物が堂々とはいり込むで來た。それは姫の配儷であるニセフオリス・ブレニウスであつた。彼は若い。好男子だ。コムネア姫の女性美に對すべき否大に優るべき男性美の持主であつた。しかも彼は君府の朝廷を壓する位な强大な領主の家に生れて居るのであつた。

前にも云つた樣に、姫の方は學才は豐かであつたが、その美貌は寧ろ學才の進まない以前が美しかつたと云ふ評判さへある。ほんの僅かであるが年齡も過ぎかゝつて居ると云ふ有樣だ。だからよしむば如何に才華亂發であるにしても、花婿ブレニウスの心を無限に完全に領して居るとは

必ずしも云へ得ない處がある。花婿は、もとより對手が皇室の姫であつて見れば、表面から姫を冷淡にすることは出來ないけれど、此の朝廷では幾分かわが儘に振舞ふだけの自負を持つて居る彼は頗る才略に富み、戰爭平和の時機を見拔く識見を有して居ると云はれて、內外から重視されて居る位な人物だ。彼の獻策は殊に優聽せられて居る。だから姫の文藻に接すべき此の嚴かな修史室の夙會に屢々平氣で缺席する位は止むを得ない事として見のがされて居るのであつた。無論この事は姫もイレネ皇后も陛下も悅ばしくは思つては居ないのであつたが、花婿たるべきブレニウスと緣を結ぶことは勢力を强大する所以であるから、默つて我慢して居るのであつた。

皇帝はすぐとブレニウスと握手して親愛の意味を表した。だが皇后の方は默然として稍々冷淡な樣子を見せたのであつた。それよりも更に冷淡なのは姫の方で、さも自尊心を傷けられたかの樣にツンと濟まして、花婿たるべき人の方には見向きさへもせず、自分の文章ばかりに氣を奪はれた樣子を見せて居た。

一座が變に白けてしまつた。ブレニウスも大歡迎をされると豫想して來たのに、案外に冷淡にされるのが氣にくはなかつた。で何んだか手持無沙汰の樣な心持ちがしてならないので、姫の後に跪いて居る侍女のアスタルテに輕い戲談口でも云つて見やうかと、言葉をかけると、それを邪

魔でもする樣に姫は侍女に今まで讀むで居た羊皮紙を卷いてそれを姫の書齋である「アポロの部屋」に持つて行けよと用を云ひつけてしまつた。アポロの部屋で姫はいつも文章を書き、此の修史室ではたゞ朗讀することにして居たのであつた。

暫く續いた不愉快な沈默を先づ破つたのは皇帝であつた。「ブレニウス。も一度侍女に姫の文章を持つて來させる樣にしては何うであらうか。姫の文章が今丁度面白いところにさゝかつて居たのぢやつた。何でも砂漠に薔薇の花が咲き出で、巖石の山に蜜と乳との雨が降つて來たと云ふところで、姫の美しい文章が一座を恍惚(うつとり)とさせて居たのぢやつたがそれを、今急に止めるのは惜しい樣な心持ちもするのぢやが。……」

すると傍から皇后が、

「陛下。ブレニウスは姫の文章などにはあまり趣味をお持ちにならない樣に思はれます。此の頃は何時の修史の夜會にだつて姿を見せられた事はなく、餘所で面白いことばかりして遊んで氣をとられて居られるのでも御座りませう。」と嫌味なことを云ひだした。

姫は姫で、愛人から逆らはれた時にあらはれる女性特有の冷つこい眼付きをして、しかし上品な皮肉に紛らしながら、

「わたしの文章にプレニウス様の勇ましい御手柄が父上様のほど褒めて書いてありませんので、それで御氣にめさないと見えます。でも私は何も存ぜないで報告ばかり聞いて書きますのですから、プレニウス様も折々は來て、御自分の事をよく話して聞かして下さいますとよいと思ひますそしたら何の樣にでもよく書いて上げることが出來ますけれど。」

「それではアスタルテをすぐ呼び戻しませう。まだアポロの室までは行つては居りませんでせう。」と云つて皇后はプレニウスの方を見た。プレニウスは、

「それには及びますまい。私の武勳がどう書いてあるかは、あとで見さへすれば判ることです。今夜こんなに遲く私が來たのは重大な國家の事件で陛下と直接御話し致したいのですが、野武士まで一人混つて居る此の雜然とした場所では……」

すると皇帝は、

「いや野武士までとは、此のラオジシアの勇士に對してすこし可哀さうぢや。實は姫の文章に間違はないかと思つて、わざ〳〵アキレス將軍に探してもらつて來たところ、何かよい言葉をかけて慰めてやつて下され。」

「それにしても、野武士の姿のまゝは、あまりの事かと思ひます。ラオジシアの戰爭ならば陛下御

統監のことですから、わざ〳〵野武士まで御呼びにならなくとも間違ふ筈はないと思はれます。が。」と云つて傲然とした態度でプレニウスは野武士の方に振り向きながら、「何うだ何か姫君の文章に就いて他に書き加へたい事があるとでも氣付いたか。」

すると即座にヘレワードは、

「あの戰場で樹蔭の泉に手前ども兵士が腰をおろして疲れを休めて居ます時、御皇室の奥方樣の遊ばされた音樂が心を惚かす樣に樂しく響いてまいりましたが、ことさらに玆に居られます御二人の方の音樂が夢の樣に美しく聞こえました。」

「ナ、何と申す。」とプレニウスは目に角菱(かどびし)をたてゝ、「皇后陛下と姫君とが奏せられる音樂が何んで其方たちの爲めであらうに。まして御批評申すとは野武士の分際も知らない無禮至極のことだはやく此の場を立去れ。」と一喝した。

ヘレワードはアキレス將軍の方を見て、此の學を退出する方がよいか何うかを覗う樣な眼付きをし、將軍の顏にも躊躇の色が見えたが、皇帝が其の間に立つて比較的に嚴かな態度で裁きをした。

「プレニウス。それは御取消しを願ひたい。御身は朕がわざわざ呼びよせた野武士を、そのまゝ

退出を命ずるのは すこし穏かではないと思ふのぢや。朕のみならず アキレス將軍に對してもぢや。まあ此の野武士を見ておやり。隨分と正直で忠義な男ではないか。まことに此れは北歐武士の花、ヘレワードと云ふ名を聞けば家柄もあると思ふ。何の樣な大事な相談事であらうと、此の野武士の前で話して苦しうはない。」

「陛下の御意のまゝに。」とブレニウスは、アキレス將軍の顏付も見ながら、此の場合は極端まで行かぬのがよいと思つて穏しく答へて、「私の申さうと思ひますことは、何れ遠からず萬人が氣付くことですから、誰が聞かうと別に秘密にする程ではありませんが、今、北歐には異樣のことばかり起り、我が東羅馬帝國は安閑としては居られまいと思ひます。歐羅巴は今や根柢からの大瓦解が起つて、凄い大津浪が亞細亞の方に押し寄せつゝある形勢ですが……」

「私もその事は氣付いて居ります。」とコメニア姫が傍から云つた。「あの北歐の亂暴な野蠻人達がいつもの通り山賊海賊ほしいまゝに働いて、嵐の樣に我が東羅馬帝國の西の國境をおびやかして居りますが、その目的は何んでもシリアを占領するとか、また聖者や殉教者の墓のありますあのパレスタインを手にいれるとか大仰なことばかり申して居るさうで御座います。たしか十字軍とか云つたと聞いて居ります。ですが、その大嵐はもう過ぎて、危險なことはないと信じて居りま

す。ブレニウス樣、あなたはまた何かお聞き違ひになつておいでになるのではありませんか。」

「いや。前の大嵐は過ぎたが、今度のは更に酷い嵐が迫つて來つゝある。」とブレニウスは深刻な顏付きになつた。隱者ピイタアと妙戸漢のウオルターとが氣狂染みに宣傳をやつた爲め、下層社會の群集や無智文盲な奴隷が烏合の軍勢をつくつて、ゲルマニイからハンガリイへと道をとり、丁度昔のイスラエルの民衆が雲の柱に導かれて荒野や砂漠やを横ぎつた樣に神の不思議な加護を信じながら、雲の如くにこちらに迫つて來つゝある。だが彼等の爲めにはマンナの雨も降らず、その渴きを癒すために巖石から眞清水か奔り出ることも一度もなかつた。そこで彼等は苦しみのために愈々狂氣染みて來て、いたる處で掠奪を逞うして居る。ハンガリア始め我が西部北境に近い諸民族は殘らず基督教國の何の差別もなくその慘害を被り、道路には腐肉や人骨が山と埋高く自ら神の軍と名乘るとの大惡魔軍の爲めに此の世ながらの地獄の有樣となつて居る。」

と說いたが、皇帝は案外平氣で、

「いや、その事なら朕も前から知つて居る。もう幾度もあつた事で、今更俄かに警戒するまでも無からう。既にその最もひどいのは、一度來て過ぎ去つたのでは無いか。」

「陛下には御存じと仰せられますが、以前の嵐ではまだ眞當の危險はわれわれには知られては居

りませぬ。此の前のは、たゞ野獸の群れが荒れ狂ふのと同じ事でありまして、たゞ妄想を描いてその妄想の牧場に行きつかうとばかり狂氣になつて、只無暗と荒れ狂つたに過ぎず、あんな狂暴軍だけに、乳と蜜との流れるパレスタインに行く途中、此の東羅馬の希臘の國境であの樣な失敗を致したに過ぎません。あの樣な野蠻軍なら此の東羅馬の如き文明國にとつては何等怖れることはありません。陛下も御記憶の通り、彼等は我が軍の鐵火に全く辟易してしまひ、我が國境に邊在して實は我が帝國の外鄙でありながらも獨立國と思つて居る半開民族などの爲めに散々な目にあつたも道理です。それにあの時の一番獰猛な群集は、陛下の御智策によつて、わざと與へてやつた兵糧を食つて毒死した位で、われ〳〵は陛下の御智略を驚嘆して濟みました。あの時は全く彼等を陷穽におとして我が帝國は難なきを得ましたのでありますが、すぐと後から引き續いて起つた此の第二の大嵐は有史以來未曾有の大仕掛の眞に恐怖すべきものであります。今度の十字軍はたゞの氣狂ひではありません。決して前の樣な野蠻な野卑な貧弱な不用意なものではありません。全歐洲のあらゆる智慧あるもの富めるもの勇氣あるもの貴きものが打つて一丸となつて、共通な一大目的のもとに眞の信仰に齊しく燃え立つて來つゝあるとも察せられます。」

「その共通の大目的とは、いつたい何んぢや。」と皇帝も凜乎と引きしまつた。「我が東羅馬帝國の

全滅をはかるのか？今の卿の言葉によれば、それより外には大目的と云ふ事は無い樣に思はれもするが。」

「いや。その樣な目的は別に表明しては居りませぬ。新十字軍の首腦となつて居る各國の貴族や將軍や智者やが異口同音に申すことは、矢張り此の前の十字軍と同樣聖地恢復を叫んで居ります陛下。玆に一つの表を携えて參りましたが、之れによりて數個の軍勢が、各の別方面の途をとつて我が國境に迫りつゝあることを陛下に明瞭にお示しすることが出來ると思ひます。先づベルマンドアのヒウ――ヒウ大王と云はれて居るあの傑人でありますが、海軍を率ゐて伊太利から押し寄せつゝありまして、既にその先發の二十騎は、金を鏤めた鋼鐵の鎧に身を堅めて參り、聲高々に『東羅馬の皇帝陛下及び朝臣一班は御用意あれ。ベルマンドア侯ヒウ大王は近づきつゝあり。大王は王の王者たる佛蘭西王の連枝にて、佛蘭西貴族の花は悉く率ゐ給ふ。大王の旗は聖ペテロの祝福されたる旗印にて聖者の正系を示すもの、君府の朝廷は構えて正しく御歡待の御用意あれ」と叫むで居ります。」

「聲だけは素晴しいものぢやの。だが一番高く鳴る嵐が船を覆すものとは限らぬ。朕もすこしは佛蘭西人と云ふものの氣質を心得て居るが、勇ましいことは勇ましいが氣がはりのし易い民族ぢ

や。その虚榮心を歡ばせて時を過ごす間に、こちらに必ず妙案が浮んでも來やう。ブレニウス、智慧の袋は底なしぢや。心配は無用。でヒウ王の外にどんな人物が居る樣ぢや。」

「此の通りまだまだ澤山に居ります。」とブレニウスは手にして居る表を皇帝の眼の前につき出しながら、歐羅巴の獨立國は大低網羅されて居る有樣です。何れも堂々と異敎徒の手からバレスタインを奪還することを宣言して居ます。」

皇帝はつくづくと表を見ながら、「いや。これは仰山なことだ。ぢやが幸ひなことには、是れ程に澤山の王侯の數が、よもや此の宣言の樣な狂氣染みた目的のもとに眞面目に一致する筈は萬々あるまい。ウム、大分朕の知つて居る名前がある樣ぢやぞ。アンチオクのボオモンも居る。これはあの身を一騎士から起こしてシシリイ伊太利兩國の王とまで立身したアブリアのロバートの子ぢやわい。これは餘程狡獪な男で、ゲルマニアと戰爭をした際に惡智慧もあれば勇猛でもあると云ふので始末におへず、殊にあの男のたて籠つて居たノルマンの城砦は十字弩が六挺と槍の十本程もあれば難攻不落と云ふ厄介なものぢやつたから彼の武名は益々揚つたわけぢや。昔から隱謀に長けた家柄で相應の勢もある。ボーモンが來たら、きつと朕にバレスタイン奪還のことを語り同じ基督敎國の利益の爲めに協力して呉れと云ふだらうから、まあ表同意した顏を見せて置くこ

とぢや。一つたん協力するが如く見せかけた上は、もう策略はこちらのものぢや。それから他には……ブイョン侯ゴドフレーと云ふのがあるが、これは慥かにあのラインと云ふ大きな流れに沿ふて居る强國の王ぢやつたと思ふが、いつたい何んな人物ぢや。」

「傳へ聞くところに依れば。」とブレニウスは答へだした。此のゴドフレーと云ふ人物は十回の十字軍中最も智慧あり氣品あり勇氣ある將軍であるとのことで、まづ大昔のトロヤの大戰に比較して見ればアガメムノンとも云ふべき偉い大將ださうです。各國の王侯とも皆彼を尊敬し、信賴し騎士中の花と稱し、僧侶は彼を恰も神體であるかの如くに取扱ひ、彼によつてこそ敎會や寺院やの尊嚴が保たれるとまで云つて居るさうで御座ります。」

「フム。そんな立派な偉い男が、あの隱者ピーターの氣狂ひぢみた運動におだてられたとは氣の毒なことぢや。いくら大將が偉くともあんな水や食物やが無くなれば、すぐに逃げだす樣な烏合の衆を率ゐて居ては何うすることも出來まい。」

すると此の時、横あいからアゼラステスががロを出して、「ですが、陛下勇將のもと弱卒なしとか申すこともありまする。いつそあの懐柔策は如何なもので御座りませう。」と云ふと、皇帝はその方を顧みて、

「アゼラステス。實は朕もそれを考へて居たところぢや。よく朕が心持ちを汲むで呉れた。それに就いて先刻から考へて居たのぢやが、あの小亞細亞の諸州は今名義だけは土耳古領と云ふ樣なことになつて居るが、實は極めて曖昧なことで、宛然此の東羅馬帝國の外州と云つた形ぢや。ところであそこは氣候の變化にも富み土地はよく肥え住民もなかなかよく稼ぎ、全體から見てライン河畔の、よくは知らないが泥沼地よりは遙かに勝つて居る土地だらうと思はれる。あの邊をひとつそのゴドフレーと云ふ勇將に番をさせることにして、うまく懐柔したらよささうにも思つて居るが何うであらう。すくなくもバレスタイン燒熱の砂つぱらよりも、此の方がよいのは判つてはいるが。」

「それは無論懐柔の手に乘りますことで御座りませう。」とアゼラステスは思案顏を傾けながら、

「で御座りますが、陛下、あの小亞細亞外州の領主にするまへに、ゴドフレーを東羅馬の教會に歸依させて置くことが肝心の樣に心得ます。」

「無論、さうぢやとも。」と皇帝は今まで羅甸クリスチヤンやミニシア人やまた回教蠻人さへも領土内に蔓るのを手ぬかりで制止しなかつたため幾度か苦い經驗をしたことを思ひ出した。そして尙ほもつくづくと表を眺めて居たが、「どうもこれは實に恐ろしいことぢや。昔のトロヤの大軍に

何十倍かわからない。昔トロヤの大軍は飲むで河の流れを干し、大森林も忽ち踏み躙られたとか云ふが……」と思はず嘆聲を發したが、心の恐怖はかくされないものと見えて、皇帝の額は蒼ざめて冷たい影さへ漾つて居るかと思はれる位、無論侍臣等の顏色は先刻から無かつた。

ブレニウスも聲を顫はせながら、

「今度の十字軍は眞に前古未曾有なものです。殊にフランク人の勇猛は言語に絶して居ます。彼等は比類なき好戰民族で、戰爭をするのはまるで鼻呼吸でも荒くする位な心持ちに過ぎず、近づくものを悉く敵として戰ひます。彼等の着て居る鋼鐵の鎧は槍も矢も透すことが出來ず、その騎つて居る馬の迅さは天馬にまさるとのこと、ことに十字弩と云ふ武器は全く新式なものださうです。」

すると皇帝の顏は又もや緊張して來た。

「いやその十字弩と云ふやうな武器は朕も見たことがあるのぢや。如何にも恐しい武器には違ひないが、しかし神は先方に野蠻的武勇を與へらるゝとも、その代りにこちらにはまた智慧と云ふものを與へて下さつて居るのぢや。敵に十字弩があれば、こちらにはまたこちらで、希臘式火砲があるではないか。」と云つて強ゐて安心して見た樣な顏付きをして見せた。がそれも暫くで眼をしばたたきながら物凄い表の方にまた眼を遷して、「まだこの澤山の名前のなかには朕がうすれた

記憶を呼びおこすものがあるやうぢや。茲にノルマツヂイ侯のロバートと云ふのがあるが、之れは大ぶ大きな軍隊を率ゐて居る。さてまた茲に伯爵領(ヂャール)と云ふのがあるが、伯爵領とはいつたいどんな領であらうか。朕はこのやうな蠻地の様子は一向存ぜないが、何か佛蘭西語でもあるやうぢやの。大僧正はどうぢや。よく判るやうに説明をしては呉れまいか。」

大僧正ゾシムスは恐慌の態で、

「陛下。臣は今まで外國の事情の研究は一向おろそかに致しました罪で、何も存じては居りませぬ。しかし茲に御座られるアゼラステム殿は聞こゆる碩學でもあり、アレキネンドリアの圖書館の書物を殘らず御讀みなされたとの事であれば、必ず陛下への御答へ致さるることと存じます。」

すると例の象と云ふ綽名を持つたアゼラステスはやおら身を起して、如何にも卽座の明答をなすと云つた態度で説明しだした。「かの有名な大學者プロコピウスが書いた祖先記を繙いて見ますると外國の事柄が鏡を見るやうによく書いてありますが、それに據りますと、ノルマンヂーとかアングルスヲか云ひつたへられて居る民族は、實は二つではなくて一つのもの、そしてそのノルマンヂーの民族が棲むで居るところはゴオルの一部ださうで御座ります。そのノルマンヂーの向ふに、せまい海峽をひとつ隔てて、まるで幽靈の様な地がひとつ横たはつて居りまする。雲や嵐

やが絶えず懶げにたゞよつて居るところでありまして、近隣の國では人が死んでからは魂がみなそこに行くと噂して居ります。その迷霧の岸に近いところに僅かな人數の漁村がありまして、男達は不思議な海圖を所有して居り、不思議な儲けをして渡世をします。シャロンの渡舟と申して死人が渡し錢をとられるのも此の邊の事で御座りませう。夜の眞暗闇になりますと、此の邊の漁夫は交代で渡舟の仕事をする様に命ぜられるとの事でありまして、彼等の小屋の扉が不思議な手でたゝかれると、人が押さぬに自然と扉は開かれる。さながら滅び行く微風の様な人間ならぬさゝやきで、漁夫は渡し舟の役に呼び出されるのであります。漁夫は急いで自分の持ち舟を浮べてそれに乘つて來かけると、すぐと多くの死靈が乘り込みますと見えまして、舟脚がずんずん沈みます。ですが一向人間らしい姿は見えません。姿が見えないが、聲だけは極くおぼろな空ろな丁度寢言の様なものが聞こえます。そして此の舟で海峽をわたつて迷霧の岸につきますと、その岸には白い不思議な形の岩が峙つて居りまして、舟がつくとともに何時しか舟脚が浮いて來て、人間の足では踏めないその岸の上に乘つた死靈は上陸して行くのであります。渡舟の役目はそれで濟むのでありまして、今度は妙な鼻歌をうたひながら自分の小屋に身も輕々と歸つて行き、貰つた渡し錢の勘定を致すとの事で御座います。」と云つてやうやく一呼吸いれると、皇帝は、

「いや。その傳說がほんとうにプロコピウスの祖先記に書いてあるとしても、アラゼステス、プロコピウスと云ふ大學者は何しろ大昔の人間で、基督敎よりもずつと以前に書いたのだから本當に信ずるわけには行くまい。あまりに荒唐無稽な事ぢや。――時にアキレス將軍は何う思はれるおや。將軍は何をその野武士と耳うちして居らるゝぞ。」

「御意に御座ります。陛下。實は此のヘレワードと申す野武士は日頃鄕國の物語りをいたす時には、よくアングロデーンとかノルマンとかブリトンとか申す言葉を使ひますところから、或は今回押し寄せてまいると云ふ十字軍のことも何かと存じて居はすまいかと愚考いたしまして、耳うち致した處で御座りました。」

「さうか。ではヘレワードと申す野武士よ。」と皇帝は野武士の方に笑顏を向けながら、「そのノルマンヂーと申す民族は、島が味方となりさうな民族かそれとも飽くまで敵たる民族であらうか。其方が思ふ通りのまゝ勇氣を以つて話して聞かして呉れ。其方の武運は永久く朕が保護するところであるぞよ。」

野武士は肅然として皇帝に一揖して、

「陛下よ。今承りますれば陛下にはノルマンヂー及びロバート王に就きて御下問の事承知致しま

したが、手前もしかとは鄕國の事を存じては居りませぬ。たゞ小供の時分に聞きおぼえたところに依りますると、手前の祖先はゲルマニアの北部に棲むで居りました勇敢なアングロサクソン人であつたと申します。それが何時頃の事かは鄕國の僧正樣のお調べに依る他はありませぬが、何しろ今の英吉利島に移らない前の事で御座りますから古い古い大昔であります。そのアングロサクソン族が次第に今の英吉利島に移住いたしまして、王國を樹てたことを聞きおぼえて居りますうち北の方のバルチツク海。――此の海は冬は凍つて白くなる程な寒い　地方で御座りますがそこに棲むで居りましたノースマン族が次第に暖かい地方へと移住する樣になりまして佛蘭西の北方に來てノルマンヂイ國を樹てました。今陛下の仰せられましたノルマンヂーとはおゝかた此の地方の事かと存じます。さてノルマンヂイとアングロサクソン族とは海峽を隔てゝ對峙して居りましたが、ノルマンヂイのウキリアム王は突然に大軍を率ゐて英吉利島のケントに現れて、その頃の英吉利王でありましたハロルドの軍隊と戰ひ大勝利を得ました。それ以來幾度か戰ひましたが、手前の親たちの屬して居りますハロルド王軍は、何時も悲しく大敗亡をするばかり、最後のヘスチングの大戰にもろくも武運は盡きてしまひました。陛下。わがアングロサクソン民族の一大恥辱で御座りました。その敗戰後氣骨あるものは何れも鄕國を去つてしまひ、殘る意氣地の

ないものは皆奴隷にされてしまひました。手前もその時去つて此の南歐に參りました一人で御座りまするが、思へば手前の父の家は今は何の樣に荒れはてゝ居ることで御座りませう。瑞々茂つた森のかたはらに豐かな牧場がありましたが、その故郷もさぞや荒れるまゝで、綺麗な敎會堂も敵の爲めに火に燒かれ、父の骨の埋まつたところも見分け難くなりましたことと思ひます。手前は今此の南歐の放浪もの、戰斧一つに武運をまかせて居ります。」

　するとアキレス將軍が、

「いや。こちらに來て陛下の禁衛軍となつた方がどの位其方の爲めに幸福なのかわからないぞ。あの樣な野蠻地に居るよりは。」

　と云つた。

「それは何れとも判りませぬ。」

　と野武士は冷然と答へたのであつた。皇帝は、

「では今押し寄せて來ると云ふノルマン軍は、英吉利島を攻めて打ち勝つた强い民族ぢやな。」と云ふと、

「左樣で御座りまする。」と野武士、

「餘つ程勇敢な民族らしいな。」とアキレヤ將軍が云ふと、ヘレワードは端然として、

「今更となつて惡口で敵を貶すは婦女子におとる卑怯ですから申上げませぬ。よしや敵がどの樣な暴虐をいたしましたにしても、手前はたゞ默つて居りませう。彼等は手前にとつては心からの仇敵、今それが全歐洲の大軍とともに押し寄せたと承れば、たゞ此の胸の血が勇むで躍り狂ふばかりで御座ります。」

「して此のロベート侯とは何者ぢや。」

「そのロベート侯と申しますは。」野武士は考へながら、「よくは存じては居りませぬが、手前がまだ此の世に生れなかつた時か、生れてもまだほんの乳呑兒に過ぎなかつた頃、英吉利島を攻めとりましたあの虐王（タイラント）ウキリアムの第一の子かと存じます。」

「よく云ふて聞かせて呉れた。」と皇帝は侍臣達を顧みながら、「此の野武士の言葉によつてすこしはきりとした樣だ。何しろ事件は重大であるから、姫が修史を聞く夜會はしばらく打ちどめと致さう。」

　姫も頷いた。

　皆は退席することになつた。

四

アキレス將軍は忠勇な野武士と肩を並べながら、靜かに人に氣づかれず、恰も春の雪が消えて行くが如くに皇帝御前の會議から散じたのであつた。何等將軍振つた足音もたてず、鎧の摺れる響さへもしない。無論宮城内のことであるから、物々しい護衛をする程の必要は更に無い。秋毫も危險はないのである。象と云ふ綽名のあのアゼラステスも諸共宮廷内の重臣達も、護衛の必要などは更に感じては居らず、よし皇帝がわざわざ北歐から勇敢な戰斧隊を傭つて來て禁衛軍を組織して居るものの、それはたゞほんの形式的なものであつて、必要と云ふ上からでは無い樣に思つて居たのであつた。だから御前會議はまるで暗に吸はれる樣に靜かに散つてしまつたのであつた。

軈て將軍と野武士とは城壁を潛つて外に出た。その門は極小さなもので、番兵はたつた一人、出たあとでゴトリと重々しく錠をおろした響きが何となく兇兆な感じさへ齎すのであつた。振りかへつて今出て來たばかりの宮殿の姿を眺めると、巨大な城樓や尖塔やが澄むだ深夜の空に影の樣に映り、ヘレワードは何んだか急に心持ちが伸び〳〵した樣に感じた。星は煌々と輝いて如何

にも自由な大空のもとである。先刻までの宮殿の中は實に窮屈であつた。「閣下。手前には宮殿のなかの空氣はまことによい匂ひが滿ちて居ましたが、何んだか呼吸がつまる樣で堪えられませんでした。どうも人間の棲む處ではなくて墓場の樣ですね。手前はあの樣なところに勤めないで、野つ原に働く身分だつたことが悅しく思はれだしました。」

「どうせお前はその位なところが分際なんだらう。宮殿の空氣は呼吸がつまる樣な氣持ちがしたか。無理も無い。ぢやが野武士の幸福よりも宮中ではずつと大きな幸福がある。どうぢや本當に立派なよいところだとは思はなかつたか。行つて見てよかつたと云ふ氣持ちがしたらう。」

「別に惡いと云ふ程の氣持ちではありませんでした。何はさておいてもノルマン人が來ると云ふことを同僚よりは一日先きに知つて、あのヘスチングの敗戰の恨みを晴らす機會が近づいたと思つただけでも愉快極まることです。しかしあの美しいお姫さんが、何も知らないで虛言ばかり書き聯ねて長い長い時間を朗讀したのは、あまり怠屈でうんざりしてしまひました。」

アキレス將軍は流石にすこし笑つて、

「だが、ヘレワード、あんまりな事は云はぬがよいぞよ。まあお前の身分ではあの朗讀を聞くと云ふだけでも大光榮と心得ねばならぬのぢや。それにお前は姫君の顏を眞正面からぢろ〳〵見て

居た様だが、あれは實に無躾なことぢや。僕等の様な身分でさへ、金枝玉葉の方の前では下ばかり向いて居らねばならぬことになつて居るのぢや。」

「ですが閣下。美人を前に置きながら、眞正面に見てはならぬとは無理なことではありますまいか。」いつたい今夜の會はお姫様を見せる夜會と心得て居りましたが。」とヘレワードは沈着な顏付きのまゝで云つた。

「それにしてもお前だけ、あゝ特別にぢろ〳〵見るべきものでは無い。」

「ですが閣下。手前には別に悪い意味があつたからではありませぬ。が手前はあの美しいお姫様を見ながら、此のお方が將來のお后様かと思ふと根限りの忠誠をつくさねばならないと思ひましたから、それで餘所目にはぢろ〳〵見る様にとられたので御座りませう。餘程な美人だと思ひました。手前には文句がよくは飲み込めませんでしたが、あの様に長々と歴史の物語りをお書きになり、お聲は天使の様に麗しく、手前は忠義のつもりで身動きもせず聞いて居りました。ですが閣下。實は手前は姫君様よりももつと美しい女を見つけて居ります。」

「馬鹿な。お前の見つけたと云ふ美人は、さぞや北歐の荒らくれた豚みたいな奴ぢやらうて。」

「閣下。まあ。何んとでも仰せられませ。お白粉や飾やだけで美人は出來ませぬ。閣下だとて手

前の美人を御覽になりますれば屹度魂もお抜けになると思ひまするが。」

アキレス將軍は心のうちで、餘程此の野武士の心を自分のものにする事が出來たと感じた。そして美人論は此の位なところで切りあげるのがよいと思ひながら、たゞ微笑に紛らしてしまつて碌に答辯もしなかつた。がそれもしばらくで軈て將軍は將軍らしい威嚴にたちかへり、野武士も一兵卒としての慕順な態度になりながら歩いた。將軍の心のうちでは實は此の野武士に對して普一通りならぬ相談事を奥深くひそかに抱いて居るのであつたが、一寸それを云ひだす機みがなく暗示的にも表しかねて居るところであつたが歩いて居るうち禁衛軍の屯營所の方にもだんだんと近づいて來た。先に立つた將軍はすこし歩調をゆるめて、極く身近かに野武士を接近させ「ヘレワード。どうぢやお前は皇帝陛下の御前でいろいろの人物を見たらうが、あのアゼラステスと云ふ老人を何う思ふ。あの老人には象と云ふ綽名があるんだが、一度も皇帝陛下の前で跪いた事のない男ぢや。」

「はあ。あの老人で御座いますか。七十の齢も越したらしいお爺さんですが、隨分と頑健なよく肥つたお爺さんだと思ひました。頭がづぶりと禿げて、長い白い髯が胸の上に總々と垂れて一番尖きは膝頭までもとゞいて居た様に思ひました。着物はあの様な高貴な人にも似ず、たしか布か

何か、兎にかく絹では無かつた樣に思ひました。」
「ヘレワード。無論お前の云ふ通りのお爺さんに間違ひないが、それをお前に聞くのぢやない。何かあの老人に就いて特別に感じたことは無かつたか。」
「どうもあの着物があんまり粗末過ぎた樣に思ひました。しかしたとへ下賤のものゝ着ると同じい布でも、あゝまでよく綺麗に洗濯がしてあつて見れば、ほんとにさつぱりとしてよい氣持ちの樣に思はれました。」
「いや。そんなことをお前に訊いて居るのぢや無い。何かもつと他に感じたことは無いか。まあたとへば誰かお前に會ふとすると、先づ戰斧に氣が付くだらうが、それと同時にお前の人柄と云ふことも考へるだらう。丁度そう云ふ風にお前はあの老人の人柄に就いて何う思つたか。」
「手前は自分の職柄以外に他人の批評をしてはならぬと敎えられて居ります。ですが手前の感じたまゝを申上げますれば、手前にはあの老人の言葉はよくは判りませんでしたが、どうやらよく言葉の洒落を云ふ爺さんの樣に思ひました。その洒落の奥には何にか深い意味がありますことで御座いませう。」
「ヘレワード。お前は誠に人の胸に宿つた天使の樣な正直な無垢な心を持つて居る。疑ひと云ふ

ことを知らない幸福者ぢや。實はあのアゼラステスと云ふ老人は宇宙がよくもつくつたと思はれるほど矛盾した人物だ。あの老人には古聖賢の智慧を聚めた程の偉い頭があると同時にまたブルタス以上な狡猾の權化だ。あの洒落や戲談やの裡には鋭い爪を匿して居る。表面では位階には極めて淡泊の樣に見え、時々登廳して居る剽輕者ながら、實はあらゆる陰險な手段で横着に根强く宮廷内に勢力を張つて居るのぢや。何でもあの老人は匿れて妖神を拜むで居り、靈界の消息も知つて居ると云ふ噂もある。ぢやが僕はちやんとあの老人があゝまで高い地位に登つたその筋路と云ふものはよく知つて居る。僕も今その路を辿らうと思つて居るのぢやが、ヘレワード、僕を援けてくれる人としてお前を選び拔いたわけだ。彼の登つた梯子をこちらに奪つて見せるぞよ。お前はよくよく心して呉れ。」
「手前は何事も閣下の仰せのまゝで御座ります。神と皇帝との御名に恥ぢぬことならば必ず命賭けて働きます。」
「可愛いゝことを云ふ。心配はない。だが此の僕が神と皇帝との御名に恥づる樣なことでもお前に命ずると考へたのか。馬鹿なことぢや。僕は現大僧正ゾニムス殿の無二の親友だと云ふことを忘れたのか。」

「夢にも閣下の御心を疑ひは致しませぬ。」

「よろしい。では明日ゆつくりとお前に話すことがある。明日は日沒過ぎた頃僕のところに來い明日の晝、まだ太陽がある間は、お前は寢るなり遊ぶなり勝手に時を過ごすがいゝ。」

かう云ひながら、二人は禁衛軍屯所のバラツクの中に這入つて行つた。將軍はその美々しく飾つた司令部の自室へ、野武士はその質素な剛な兵寮の寢所へと。

五

その翌る朝は、はやくから更めて宮廷では御前會議が開かれた。いろいろ長たらしい肩書を食つ附けた元老が集まつた。頽廢しかゝつた東羅馬帝國の影の薄い脆弱な氣分も、これ等嚴めしい長たらしい肩書を見れば振作される程な肩書ばかりだつた。そして些細な位階の差異から長い時間のあいだ、その席順に謙遜的爭鬪さへ演ぜられた。

以前に地方の奉行だつたり司直官だつたりした連中で立身して次第に宮廷内に勢力を擴げたのも居る。それ等の大官達は陛下に直接に話しかけることは許されて居ないのであるが、澤山の部下に列をつくらせて、それ〴〵の威勢を表示すべく宮殿の各所に陣取つて居り、玆ブラカナルの

殿堂のぐるりは今肅然たる大雜沓を極めて居る。中央の玉座のあるところはたゞ五人だけの元老が陛下に咫尺をゆるされて居るに過ぎない。

皇帝アレキシウス陛下の座つて居る玉座は實に嚴かなもので、遠い異鄕から齎した豐麗な珠玉や金銀やが華やかに鏤めてあり、多方大古のソロモン王の榮華を眞似したものであらうか、その玉座の兩側に、矢張り珍らしい金銀珠玉で鬻つて居る獅子の姿が置いてある。さまざまの贅をつくした他の裝飾はさて置くとしても、最も人の眼を曳くのは、純金の幹の樹が一株あつて、玉座の後ろから、枝を繁り出させ、玉座の上に天蓋の樣に葉を漾えて居る有樣だ。その枝には種々な怪異な形をした禽鳥がこしらえてあり、寶石の果物がたわむ程重くなつて居る。此の天蓋の蔭こそ實に五名の元老のみが座を占むる特權があるところで、皇帝と直接に談話をすることがゆるされて居るのである。五人とは總理大臣（グランドメスチク）と大法官（ロゴデーテ）と總元帥（ブトルバタイル）と侍從長（アコライト）と大僧正（パトリアーク）とである。

此の御前會議とそれに隣る廣間とは、扉毎に必ず六名のヌビアの奴隷が見張をして居る。是れ等の奴隷達は何れも萎縮した妙な體格のものばかりだが、その纏つて居る衣は、雪よりも純白で綺麗だ。そしてたゞ默々として居るばかりだ。何れも東洋の專制國から買つて來た奴隷であつて暴虐王（タヤラント）の使ひしめと云ふ顏付きをして居る。是れ等見張番の奴隷は大官たちから怖がられて居る

何となれば是等の奴隷は神妙不思議な毒々しい慾望を持つて居て、自分は侮辱を加へたものに對し必ず復讐をすると信ぜられて居るから。

現代の眼から見れば頗る滑稽なことであるが、此の時代の君府の朝庭では妙な小供だましの樣な習慣があつて、極幼稚な彈機(はね)仕掛けで、誰か扉からはいると玉座の兩側に蹲つて居る獅子が起きあがり吼えだし、それと同時にさらさらとさながら怪風が吹いて來たかの樣に天蓋の枝が葉摺れの響きをたて、俄かに奇怪な禽鳥が枝から枝に飛び、果物に嘴をかけたり、絶妙な鳴聲を出したりする。外國から初めて來た大使で、之れに幾人度胸を試され、また宮庭の高官でもう五六十回も經驗しながらも尙ほ悚つと感ずる位な仕掛けがあつたのである。だが今度の御前會議は頗る緊急なのでかう云ふ準備は全く省かれた。けれども皇帝の說くところは恰も獅子の吼哮に始まつて小鳥の私語に終る樣な有樣であつた。

皇帝は先づフランク族が聖地恢復と云ふ大聲を發して怒濤の如く押し寄せて來る勢に對し、頗る痛罵をあびせかけ、朕が智慮と策略とを以つてすぐにもその勢を挫くことが出來る樣な口吻を意氣揚々と演べると、元帥はじめ武官等は何れも贊成の意を表した。

だが、皇帝の虛勢は長く續かず、始めの元氣は段々に挫けて來て、フランク族のことを妥協的

に考へだした。——どうも考へ見れはフランク族だつて熱心な基督敎信徒である以上、或者はその十字軍と云ふ吹聽が幾分か眞面目であるかも知れない。その目的がよし間違つて居るにしても幾度の尊敬を拂ふのが本當かも知れない。何しろ十字軍は雲霞の樣な大軍である。それに先年のヂユラゾの大戰でも彼等の武勇は實に怖るべきものがある。或は彼等は何處かに大に神の意に叶ふものがあつて、結局、勝利を得、此の神聖なる東羅馬帝國の爲めにも利益になると云ふ時世が來ないとも限らない。今少々無作法な態度で我が國を通過するとも見のがすのがよろしいとも思はれる——と云ふ樣に皇帝の言葉は力が無くなつて來た。そして皇帝は人道と寬仁との德をすこし混ぜながら、弱い調子で、何かよい考案を出さねばならぬが、さしあたりボスホラスの西岸に陣どらせるべき軍隊は、ざつとどの位あるだらうかと云ふことを總元帥を顧みて下問したのであつた。

すると總元帥は、

「我が軍の數は實に無慮、大空の星よりも多く、濱の眞砂よりも多くあります。」

と答えた。

「それは美しい答ぢやが。」と皇帝は總理大臣の方を見ながら、「茲は何も外國人の居席ではなく、

極内秘の會議のことであるから實際の數字を知りたいのぢや。いつたいどの位あると云ふのぢや。」

總理大臣は暫く躊躇して居たが、かう云ふ場合の皇帝の心持ちをよく呑み込むで居るので、「陛下。實は判然と調査がついては居りませぬのですが、此の首都から西部國境までに屯營して居ります軍隊の數は、歸休して居るのを除いて、二萬五千人か乃至は三萬人位なものと概算をたてゝ居ります。」

と云ふと、皇帝は俄かに失望した様に見え額に手をあてゝ打ち萎れた。五人の大官は皇帝の此の有様を見て、何かひそ〳〵と心配らしく耳語して居たが、聽て大法官が、

「陛下。臣の概算は別にあります。國庫の方に充分の準備金でありますから、すぐと傭兵をするか或は新たに徴發しますれば、今の倍の軍隊を整えることは容易で御座ります。」

と云ふと總理大臣もまた、

「その他に外州の方に駐屯して居る軍隊を撤兵いたしますれば實に強大なる軍團を組織することが出來ます。」

と言葉を添えた。

「いや。それは聞かんでもよい。」と皇帝は再び威容をとりなほして、兎に角軍隊の實數は朕が思つたよりも餘程すくない。だが此の難局を落膽ばかりはして居られない。朕には一策ある。たとへ少數ながら我が軍を首都と西國境との間の谷々、山の際、森の蔭などに散らせて置いて多くある様に見せかけて置き、しかる上で十字軍が愈々來た時に兎に角その通過に就いての談判をすればよい。十字軍に對しての通過條件としては一時に五萬以下と云ふことに決めることが出來やう五萬以下ならば一時に安全に小亞細亞の岸に船送りが出來ると云へばよいのぢや。

彼等十字軍がボスフオラスの岸まで行く途中、秩序を守り平和で進むで行くならば糧食を供給してやつてもよい。がすこしでも騷々しくし、掠奪を行ふとか、住民を恥かしめるとか云ふ事があれば、朕が勇敢なる國民は斷じてそれを見過ごすことはあるまい。朕が殊更に表面から宣戰をしなくとも、裏面からあらゆる手段で害を加えることが出來ると云ふものぢや。さうなれば單に朕が國民ばかりでなく、スキシア亞人刺比亞人シリア人其の他の蠻民は擧つて十字軍に反對するであらう。何も自國に必要な糧食を割いてまで他國の闖入者を養はねばならない道理もないから彼等十字軍に送る糧食は俵のなかに砂や泥やをいれてやつても別に神意に逆ふと云ふことになりはすまい。フランク族の胃袋は強いと聞くからには砂位は大丈夫かも知れない。また彼等十字軍

を導く案内役にも命じて、わざと難路ばかりを通らせ、水の無いところで充分に渇かせ疲勞させるのも面白い策ぢや。

さうする間に十字軍の重だつた諸將を城内に招きよせて、おもむろに彼等を軟化すればよい。彼等は何れも自惚れ過ぎた增長慢ばかりであるから、その弱點に乘じて或るものには黄白を與へ或るものには位階を與へなどして、萬事に朕が朝廷の富强盛大なるを見せてやるとよい。大法官は專ら此の任務にあたつて貰いたい。同時に總理大臣は軍隊の方を上手に指揮して、朕が忠勇な兵卒にいろ〳〵異教徒らしい變裝をさせ、各地に散在させて置き、いざと云ふ場合に手ぬかりの無い樣にして貰ひたい。此の策をとる時に十字軍は必ずや此の帝國を見て味方として賴母しく、敵として恐怖すべきものとの考へを抱かしむることが出來やう。かくして或る者には美しい言葉を與へ、或るものには恐怖をあたへ、慾あるものには金錢を、野心あるものには權力を與へて懷柔すれば、彼等は必ずや此の帝國を優越者と認め、帝國を以つて基督教團の最上權威と認め、場合によつては朕が教會の旗を樹てゝ進むと云ふ事になるかも知れない。何しろフランク族は單純だから欺され易い。十字軍を利用して帝國の光輝を發揚する絶好の機會が到來したと見るべきかも知れないのぢや。」

と皇帝は終りの言葉を巧みに云ひ終はると、元老達は口に陛下の萬歲を唱えながら、皇帝の言葉に贊意を表したのであつた。

が軈て暫くして侍從長の役に居るアキレス將軍は前に進み出て、

「深く總理大臣に御注意申し上げたい事がありますが、全軍を指揮する上において、飽くまでもこちらから攻擊的に出ると云ふことを謹まねばなりませぬ。」

と云ふと、玆ぞとばかり大僧正も發言を求めて、

「それはもとよりの事で御座ります。血を流して天國に入るもの尠しとの意味をよく兵卒に訓戒して置けば間違ひはありますまい。」

すると皇帝が

「大僧正。もとより天國は劍によつて得られるものでは無いが、しかしその御言葉通りでは士氣を衰えしめる恐れがあるかも知れない。先づ、朕が國民は宗教と皇帝との爲めに戰死するものは最も平和に死するものと齊しく天國に入り得と云ふ樣に說教されてはいかゞであらう。」

「陛下。教會の聖なる掟は左樣に自由に教義を解釋することをゆるされては居りませぬ。教會は平和の權化であります。ですが決して軍人の爲めに天國の扉を閉ぢるものではありませぬ。もと

より教義の上にたつて此の帝國を守護するものは血まみれながらに天國に入ることが出來ませう。パレスタインの聖地は此の正教國たる東羅馬帝國さへ奪還し得ざるに、フランク族がそれを口實として攻め來るは、神の名を振り翳す魔軍と云ふ外はなく、まづ此の惡魔軍を正教に化する戰と見做して軍隊に說教を致すことに致しませう。」

「大僧正はよく云ふて呉れられた。ぢやが惡魔に對する教化もさることながら、帝國の蹂躙されるは爛額焦眉の急であるから、何卒しかるべく取りはからつて呉れられたい。」

「陛下。御意に御座ります。陛下はひたすら陛下の御智慮によつて、飽くまでも進み給はむことを。」

「そうぢや。大僧正はよく云ふて呉れられた。」と皇帝は微笑を浮かべて大僧正に一寸御禮でもする樣な眼付きを向けてから、他の人々に向ひ、諸君は之れから朕が計劃の部處を守つて銘々によく義務を全うせられたい。聽て諸君が樹てらるべき功名は姫が筆によつて長く聖史にとゞまることであらうから、充分に御努力せられたい。朕みづからは飽くまでも此の宮殿にとゞまつて、戰斧隊(ジジヤン)を指揮するつもりぢや。朕はまづ勇敢なる戰斧隊を、朕が城門の前に整列せしめ置きて、十字軍の來るのを待ち、彼等の袖領を迎えて、その場に適應した態度をとらうと思ふぢや。いざと

云へばその場に戰火を燃やすかも知れないから、準備はおさ〳〵怠りない樣になされ。」

皇帝の此の言葉とともに會議は了ることとなり、文武の重臣たちはそれ〴〵退いた。各自とも十字軍の迫つた場合には、些も遺漏のない樣に準備せねばならぬと、心のうちは頗る忙しい。

聽て此の會議が了るとともに君府の全市に亘つて十字軍の噂がぱつとひろまつた。何んでも西の方から嵐の樣な大軍が此の帝國を眼がけて押しよせて來る。しかしその目的はどうやらパレスタインに行くと云ふのであるらしいから、或は此の帝國には何等の危害をも加へないか　知れぬと云ふ樣な噂だつたが、その噂が更に噂を生みだして、いろ〳〵に間違つて傳へられた。或るものは十字軍の本當の目的は聖地恢復ではなくて、實は阿剌比亜の征伐にある。そして聖地を恢復するどころか、それとは全く正反對に聖者達のあの神聖な墓を全部破壞して、そして全領土を佛蘭西の屬國となするにあるのだと云つた。またあるものは、此のコンスタンチノブルを全部征服するにあるのだとさもまことしやかに云ひ觸らし、またいやさうではない。之れは西羅馬帝國の法王から出た秘策であつて、十字軍の眞の目的は東羅馬帝國の法權を奪つて、今までの分立狀態か再びもとの法王中心にする考へに相違ないと云ふものも現れた。

是れ等の噂とはまた別な趣きのある噂が戰斧隊の間には傳はつた。何しろ戰斧隊は北歐から來

た野武士ばかりで組織されて居るのであるから、フランク族に對する舊怨が手傳つて居り、且つ此の噂の出所が戰斧隊中のヘレワードであるから、噂は愈々濃厚になつて行くばかりであつた。ヘレワードは無暗と上官のものたちから呼びつけられて、五月蠅くいろ〳〵なことを聞かれた。無論ヘレワードはアキレス將軍から嚴重に秘密を守る樣に命ぜられて居たのだから、前夜皇帝の前に連れて行かれたことは曖氣にも出さないのであるが、押しよせて來る十字軍の首領があのウイリアムの子のロバートであると知れば骨髓に浸み透つた怨みが晴らせる機會だとの勇ましい豫想のために身體の血潮が煮えかへる樣で、とても默つては居られない。われ等の屬するはサクソン民族で、あのヘスチングの戰ひにウキリアムに敗られた怨みこそは……とさう思ふだけで戰斧隊の全軍は振ひ立つた。さう云ふ苛立つた心持から想像して見ると、十字軍の目的は要するに、ロバートがサクソン武士の殘黨を征伐する爲めに、わざわざ君府まで攻めて來たとしか受け取れない。君府の朝廷がサクソン武士の殘黨を保護して居るのを、あのロバートはどんなにか癪にも觸はり、悔れもして居るだらうと思へば笑止に堪えぬ。流石に野武士の群れだけあつて戰斧隊には卑怯らしい風はそよとも吹いては居ない。彼等は何れも戰斧をたかく揭げて、互に武功を立てることを誓ひあひ、あちらでもこちらでも杯が汲みかはされて、恨み重なるフランク族をのゝし

る聲があがつたのであつた。

正午頃にはヘレワードは既うあまり方々から引張り凧にされていろ〳〵なことを訊かれるのですつかり疲れてしまつて、人々に會ふのが五月蠅くなつて來た。何遍となく同じ樣なことを質問されるので何うしやうか、何處かへでも逃げてすこし休息がしたいと思つて居る時、高く喇叭の響きが鳴りわたつた。此の喇叭の鳴るのは戰斧隊の總指揮官のアキレス將軍の新しい命令が發せられるしるしであつて、時を遷さず戰斧隊全體にわたつて、動員令が下され、やがて近く迫つて居る戰爭の氣分が凜とばかり緊張して來た。

戰斧隊及びその他の禁衛軍は何れも君府の城下で、いざと云へば勢揃ひが出來、すぐ戰端を開いてもいゝやうにせねばならないのであるから、各兵舍は此の準備の爲めに實に混雜した。そして到る處で歡聲があげられて居る。ヘレワードはほんの一兵卒の身分であるから、自分一人の事だけさつさと整つてしまへばもうそれで暇な身である。で彼は他の兵卒達が騷いで居る間をそつと拔けでゝ、獨りで靜かなところに匿れ、昨夜からの不思議なことをも一度ゆつくりと考へて見る氣になり、兵舍のなかから、そつと遁れ出た。

兵舍を拔け出た彼は、眞晝の暑さの爲めに人の影のすくない狹い街路を誰にも氣づかれない樣

に抜けて、高地になつて居る一寸した廣場へ出た。此の廣場からは段々になつてそれを降つて行けばすぐボスホラスの海岸に出られる樣になつて居る。至極美しい散歩場で、君府の歡樂場として有名なもの、珍らしい樹が生ひ繁つて涼しい影を搖るがして居る。樹は多く扁柏屬(シプレス)だからその翠の色も濃ゆく南國的だ。その間を人の群れがかしこ此處に見られる。或るものは急がしげに歩調もはやく拔け目のない顏付をして動いて居るが、また或るものは極めて呑氣さうで、何か頻りと聲高らかに論じあつて居るのは、之れもおほかた今日傳はつたばかりの十字軍の噂さであらう。如何にも南方の懶惰を物語つて居るものゝ如く、腰をおろして涼しい呑み物でも片手にしながら明日の心配は明日にまかせて、たゞ悠然とのらりくらりして居るに過ぎない。

かう云ふ間を野武士のヘレワードは、誰か知つた人に會ふと面倒だがと心配しながら歩いて行つた。無論野武士の風丰は人の眼に立つた。彼に會ふ人々は何れも物珍しげに、何か聞いて見たい樣な顏付きをして、彼をじろ〳〵と見るのであつた。だが誰とて此の野武士をつかまへて直接に十字軍の事を聞きたゞさうと云ふ勇氣を出すものはなく、たゞすこしく離れてひそ〳〵と私語(さゝや)きあふばかりであつた。だから野武士は人の群れて居るところに來て居ながらも、心のうちでは孤獨に耽ることが暫くの間でも出來たのであつた。

しかし野武士はすぐとまた獨孤になれないことを發見した。彼は自分がたつた獨りだと思つてあたりを見ると、自分の動作を先刻から注意して凝視めて居る一人の黑んぼの奴隷があることに氣が付いたのであつた。黑んぼの奴隷はその頃の君府の市街では、さう珍しいものでもなく、別に人の眼を曳く程でも無かつた。だがその一人の黑んぼに限つてどうやら絶えず彼の樣子を眼から放すまいとするもの〻如く附き纏つて居る。で彼はづか〳〵と歩調を迅めて別な場所に行つて見た。すると矢つ張り先刻の黑んぼが、自分に尾行して來るのであつた。此の黑んぼがもう探偵犬の樣に自分をつけまはして居るのだと云ふ事が明白になつたので、野武士は心に俄かに不愉快を感じ出し、人氣のすくないところまで行つて、不意に後ろに振り向き、突然にその黑んぼに、何の爲めに尾行するのかと一喝した。

すると黑んぼは別に愕いた樣な顏付きもせず、平氣で

『命令を受けましたから』

と答へた。

「誰がそんな命令をした。」と野武士。

「ハイ。お互樣の御主人樣から。」と黑んぼは野武士を嘲弄する樣な顏付をして居た。

「お互様だと。馬鹿な。お前と俺とは何時同僚だつた。いつたいお前の主人は何者だ。」
と野武士は怒鳴つた。
「偉いお方です。怒鳴る様なことはちつともしない偉い偉いお方です。」
と答へると、野武士は愈々苛立つて、
「無禮者め。お前はその頓智で俺を彌次るつもりなんだな。よろしい訊く様にして訊いてやるがいつたいお前は何の爲めに俺を尾行するのだ。それをはつきりと云へ。」
「申したぢやありませんか。御主人様の御命令によつて〻御座りまする。」
「その御主人の名前は何と云ふ?」と野武士。
「それは御主人様が御自分でお仰りませう。何も手前の御主人様は、手前の様な奴隷風情に命令の意味など解いて御聞かせになる様な筈も御座りませぬ。」
「コラ。相手を見て物を云へ。お前だつてお前の主人の名前位知らない筈はあるまい。お前はまだ此の上にも俺を愚弄する氣か。」
黒んぼは頻りと顏を歪めて困つた様子で默つたまゝもじ〳〵してゐるばかりであつた。でヘレワードは最後の手段だと云ふ心持ちで巨きな斧を翳しながら、

「もうよろしい。此の斧は御前の始末をつけるには勿體ないものだが……」
と云ふと黒んぼはよた〳〵と後ろに身をひきながら『手前を御殺しになつたら最後、手前の御主人の名も申しあげることも出來ないぢやありませんか。手前の無禮は勘忍して下され。その代り手前と一所にすこし歩いて下さいますなら、すぐと主人様のところ迄御連れいたします。どうかその名譽ある戰斧を、手前の穢れた血で汚さないで下され。」
「それならばはやく案内しろ。」と野武士「此の上俺を愚弄すると容赦はないぞ。」
黒んぼは意地悪さうな奴隷根生特有な睥睨(にらみ)を見せてよた〳〵と歩き出した。野武士は何んだか心に氣味惡く思つたが、黒んぼの行くまゝに隨いて行つた。いつたい阿弗利加生れの黒んぼと云ふものは胸のうちにどの様な惡だくみを匿して居るかわかつたものでない。さう云ふ事について今度幾度も經驗をしたことのあるヘレワードは拔け目のない様に充分用愼をしながら隨いて行くと黒んぼの方もまだ妙な他人の心持ちを見拔く様な眼付きで絕えず後ろを顧みて野武士の顏を盜むやうに覗いて見るのであつた。
黒んぼが行つた道は、例の段々をおりて行つて次第に海岸に沿ふて行く様になつて居る。そして暫く行くと、何等の手いれもしてないらしい荒れ果てた高い土壁の崩れかゝつた様なものがあ

る。玆は一つの癈墟で、他の場所の樣に瑞々と繁つた樹木などは一本も無く、見るからに物凄いボスホラスの海の入江が奥まつて居る場所だから、他の場所からは匿れて居る樣な位置になり、此の癈墟の近くに來ると、何等君府の尖塔の頂きも眼に見えず、眼に映るものことごとくうつろな古怪なものばかりであるから、ただ〳〵現世がそのまゝ冥府になつた氣持ちがするばかりだ。此の癈趾は隨分古い年代のもので、當代の君府のものとは何等似た趣も無い。巨大な玄關口らしい柱の趾やその他礎の跡らしいものも見られるが、何れも君府の樣式とは正反對なものばかりである。半分消えた埃及式の形象文字の跡も幽靈の樣に思はれてならない。

傳ふるところに依れば之れは埃及の女神サイベールを祭つた寺院の癈墟であつて、まだ此の東羅馬帝國などは建國されない以前の異教徒時代でコンスタンチノプルがビザンチウムと云はれて居た頃に埃及人が此の巨大な寺院を建てたのだとの事だ。古埃及の迷信は實に大仕掛けな巨妄なものでしかも何處までも神祕的なところがあつた。後に東羅馬帝國が勢力を獲るやうになつてからは、埃及の信仰は極端に排斥され、何べんとなく埃及人の建てた寺院は破壞されたのであるが不思議にも此の一つの癈墟だけは、癈墟のまゝに手もつけられないで殘つて居た。そして其の頃でも時々埃及の僧侶で此の癈墟を訪ねるものさえあつたとの事である。

埃及の旅僧なんかは無論此の君府に來たつて、宗教上から僧侶扱ひにされる樣なことは無かつた。魔法使とされて、妙な儀式を行つて妖術で人の心を魅するものとされて居た。

そんな有樣であるから、此の癈墟が君府のすぐ近くにあるにもかゝはらず誰も氣味惡がつて倚りつかない。特に基督教會側の方からは埃及信仰を蛇蝎の樣に嫌つて居るのであるから無暗に此の癈墟を訪ねて來たりなんかすると忽ち邪惡の徒として破門されてしまふ。此の氣味の惡い癈墟のなかに忍んで來て埃及女神のサイベールやまた牛の姿をしたアピスなど云ふ邪神を崇める事は單にそれが淫邪の神を拜すると云ふ罪ばかりでなく、實は此の癈墟に來てその崩れた祭壇の前に立つて居ると、すぐと惡魔の靈と交通が拓け、忽ち自分親ら惡魔にのり憑(うつ)られるものとして頗る危險がられて居た。かう云ふ事も此の癈墟があまり手をつけられずにその時代まで殘つて居た一つの理由であらう。皇帝の威力をもつてしても此の迷信をどうする事も出來なかつた。

北歐から來た野武士のヘレワードも、君府に着いたその日から此の怖ろしい癈墟の事は人から聞かされて居た。だから今黑んぼに連れられて此の癈墟にやつて來て、黑んぼが先づづか〳〵と此のなかに這りかけるのを見ると非常に驚いた。

「オイ。コラ。黑んぼ。玆は來てはならないところでは無いか。狗の頭や牛の姿をして居る邪神

は見る事さへ禁じられて居る。俺は氣味が悪くなつたぞ。お前の身體の色つきを見ても何んだか惡魔の樣に思はれてならん。殊に眞午時と眞夜中とは惡魔が姿を現はす時と聞いて居るから、俺はお前がしつかりとした理由を話して呉れない以上此處から先きは一歩も進むまいと思ふ。」

野武士はかう云つたけれど、黑んぼは平氣な顏付きで、

「そんな小供らしい事をお仰いますな。折角偉い御主人のところに御連れ申さうと思ひます手前の心が、がつかり致しますな。手前はあなた樣をしつかりした勇氣のある立派な御武士と見受けて居りますからに尊敬を致して居りましたが、今の御言葉に依れば、下賤な黑んぼ一疋打ち殺す御勇氣は御座りまするけれど、此の廢墟のなかにはいる御勇氣が缺けて居ると云ふことに響きまするが。」

と頗る能辯を振ひ出した。

「何だ。無禮もの、怪しからぬことを云ふ。お前は哲學者の奴隷でもあるのか。」

と野武士は又斧に手をかけて見せたが、黑んぼは一向愕かず、

「さては手前の申すことが哲學臭いと御感づきになりましたか。とにかく黑んぼだからとて馬鹿になさるは當りませぬ。馬鹿とお思ひで殺しなさるは光榮ある斧を汚すもので御座ります。それ

よりも早く手前についていらつしやりませ。」

「では隨いて行かう。」

と野武士は卑怯と見られのが口惜しく黑んぼの行くまゝに行きながら、

「若しもお前が此の俺を艮にでもかける樣なことでもすれば、お前の胴はまつ二つだがよいか。お前の樣な黑んぼが何十人來やうとも俺はびくともするものでは無いぞ。」

「あなた樣は色が黑いからとて輕蔑なさいますが、黑と色とに何で實質上の差別が御座りませう天を御覽じませ。晝は明るく夜は暗いけれど、天に變りは御座りませぬ。海の色を見てもやつぱり同じこと、色はうはべの姿に過ぎませぬ。色にだまされて實質を誤るはまことに愚昧の事に御座りまする。」

「いよ〳〵お前は哲學者だ。お前のその身體の色は塗つたのかも知れないぞ。だが色は塗つて瞞せるにしても、そのお前の突き出た唇と白い反つ齒と、平べつたな鼻とは、やつぱりお前の人種でなくては持ち合はされないものだ。お前はいつたい何者だ。此の無學な野武士の俺にはお前の正體が判らなくなつて來たぞ。」

黑んぼは此の言葉にすこし驚いた樣子だつたが、

「手前の正體に不思議も何も御座りません。奴隷のダイオゼネス……主人はいつも手前をダイオゼネスと呼んで居りまする」

「それは變なことだ。俺の生れた國にも丁度お前の様な變物があつたが、名前をキチキンと云つて長い間巡邏を勤めて居たが、しまいに此のコンスタンチノブルに來て隱居して哲學と云ふものを勉强し出した。巡邏で戰さでもやる間は張りあひもあつたらうが、隱居してからは暇つぶしの手段に困つて、哲學と云ふ言葉の遊びでもやりだしたであらう。」

「そんな男が何を學び得ましたか知ら、巡邏で兜をかぶつたまゝ年をとり、それから哲學の勉强とはあまりよい順序とも思はれませぬが。」

「おれもそんな學問は輕蔑し拔いて居るよ。お前も哲學きちがいの様だが、いつたい哲學と云ふ奴は全く暇つぶしの學問で、夢の様な空虛なことはかり論じあつて居るのだから何時まで經つても埒があく時はない。砂の上に建てた家は浪と嵐で消えてしまふ。俺は哲學には何の信用も持たないよ。」

「そんなことは主人に直接云つて下さりませ。」

と黑んぼは眞面目な顏つきをして云つた。

「お前の主人に會つたらよく云はう。俺は無學な野武士だが戰爭の心得と神信心とはしつかりして居る。どんなに詭辯とやらで攻められたからとてびくともするものでは無いぞ。」

「何もかも主人の前で。」とダイオゼネスと呼ばれて居るその黑んぼ奴隷は云つて、一寸傍に身を退いて野武士の爲めに道を讓る様な恰好をして、手をさしのべて野武士に先に進めとの合圖をした。

で今度は野武士の方が先に立つて、莠の繁つた道ともつかない様な廢墟の石屑のなかを辿つて行くと、軈て半分崩れて祭壇らしい跡に來た。見れば半の姿をしたアピスの巨像のすぐまへに、雜草に手足を埋める様に横臥して居る一人の老哲人があつた。アゼラセテスである。

六

ヘレワードが近づくと横臥して居て老哲學者は妙に須速い恰好で起きあがつて、

「勇敢なる野武士殿はよくこそ參られた。俺はそなたを偉い眞人だと思つて居る。人をうはべ許りで判斷しないで眞の價値を見拔くことが出來る偉い人だと思つて居る。よくこそ參られた。此處は哲學を考へるには實によい場所ぢや。人間が裝飾と云ふものをすつかり脫ぎすてゝしまつて

素つ裸になれるよいところぢや。かう云ふ場所に來て、人間がたゞの肉體と精神とだけになつて見ることはまことに意味深いことぢや。」

と云つた。野武士は何んだか不思議な心持ちがしたが泰然自若として、

「閣下の如き陛下の御重臣に對しまして、手前風情がかく御近づき申すのはまことに怖れ多く勿體なく存じます。無禮の程は御ゆるし下さりませ。」

「いやそなたの樣な人間こそ眞の哲人の眼には一番尊いものに映る。宮廷でどの樣に綺麗に身を飾りたて、位階の高いのを誇らうとも、畢竟は陛下の微笑によつて天にも昇つた樣な氣持になるかと思へば、すぐとまた陛下の御不興に遭つて牽牛花(あさがほ)の樣に凋むでしまふ果ないものに過ぎない。」

「しかし、閣下御自身陛下の御重臣では御座りませぬか。」

「無論俺は宮廷の儀禮一切を心得た無比な學識によつて陛下に重く用ゐられて居るのは事實ぢや俺よりも博學なものは今の世には無論無からう。だが實は俺は俺よりも眞に偉いものを求めて居る。俺があの面倒臭い宮廷に仕へて居るのも、畢竟はたゞ俺よりも偉いものを見つけたい希望があるからに過ぎないのぢや。」

「しかし閣下は此の野武士風情の手前をお呼びになりまして、何をお求めで御座りませう。手前には手前相應の小さな仕事しか出來ない身分で御座ります。手前は北歐の方から身ひとつで放浪(さまよ)つて來た一野武士で、只ひたすらに天の心に協ひ、棲むめぐりの社會の義務を全うし、仕へる君に忠義を勵まうとする正直な心があるばかりで御座ります。閣下。手前に何の御用命を下されますか。手前は今しがた廣場の樹影を歩いて居りますと、ダイオゼネスと自ら名乘つて居ます此の阿弗利加產の奴隷が手前をわけも言はずと此處まで案內して來ましたので御座りますが、此の奴隷は人を馬鹿にして居る樣なところもあり、何ものか手前には一向判斷がつきませぬ。もし此の奴隷が手前を嘲弄して居るので御座いましたら、容赦は致さず、此のまゝ一擊ちに打ちのめすばかりで御座りますが……」

「いや〳〵。ダイオゼネスは決してそなたを嘲弄しては居ない。よくおどけた事を云ふ奴ぢやがなか〳〵に頓智の深い哲理も考へて居る奴で、その點では黑ん坊ながら決して馬鹿にはならない俺は深く此の奴隷を信用して居る。」

「では閣下はその黑ん坊に命じて手前をお呼び下さいました儀に御座りますするが、何か手前風情に御役に立ちますならば……」

「いや俺には別に斯うと云ふ用件はないのぢや、俺は元來自然と人間とを觀察して居る人間だが、俺はもう宮廷の飾りたてた虚僞の塊はすつかり見飽きてしまつて、何か新しい自然のまゝのものが見たくてならないから、それで呼んだのぢや。」

「手前の樣な野武士には元氣は慥かにあります。誰でもいやしくも戰斧隊に屬して居る程のものなら御覽のとほり軍隊的規律の權化の樣なものです。」

「いや、俺は殊更にお前さん——ワルセオフの子のヘレワードよ。お前だけに特別な偉いところを見屆けて居るのぢや。よしんば宮廷の禮儀などに就いては、丸つきりの明盲目ながら、お前には實に貴いものがある。」

すると野武士は非常に驚いた顏付で、

「手前をワルセオフの子と仰せられましたが、閣下にはまたそれを何うして御存じで御座りませうか。」

と頗る訝つた。が老哲人は、

「いやなに、驚くほどの事では無い。それ位なことを調べて知るのは俺にとつては何の手間ひまもかゝらぬのぢや。ぢやが俺がお前さんの父の名まで知つて居ると云ふことが、一つこれからお

前さんと友達になる緣にでもなつたら俺は大へん悅ぶのぢやが、どうだらう。」

「此の上もなき光榮のことに存じます。」とヘレワンドは恐縮の體で「閣下のやうな高貴なおかたが此の野武士風情の素性を御氣にとめさせられたと云ふのは、試に身にあまる有難いことに御座ります。手前は手前の軍團長のアキレス將軍でさへも決してかうまでに厚く手前のことを氣にとめては居らないとさへ思へます次第で御座ります。」

「世の中はそんなもので、もつともつと偉い人でもその部下の將卒の名前を、自分の飼犬や鷹の名前ほどにも憶えて居ない位なものぢや。名を知らないから、たゞ口笛だけで從卒を呼んで居る有樣ではないか。」

「わがアキレス將軍の惡口は野武士の身としては聞き度うは御座りませぬ。」と急にヘレワードは野武士としての忠義心の眞骨頂を出した。老哲人も狼狽てゝ、

「いや。お氣に觸つたら萬々容赦して貰ひたい。俺は何もアキレス將軍の事を云つた心算では無かつたのぢや。それにしても御前の徹頭徹尾忠義心の厚いのには感心した。」

「いや。手前は御覽ぜらるゝ通りのがさつもので、北歐の岩石そのまゝで御座ります。たゞ嵐も雨も此の手前をどうすることも出來ないだけはお誓ひ申しあげます。」

「そのお前の岩石の様な心掛けが、たゞ義務と云ふことより他の一切を輕蔑させ、俺が此の樣にお前に對して友情を求めて居るのに菅なくしてしまふ理由なのか知ら。」

「御ゆるし下され。閣下。われ〳〵野武士は正直が生命で御座りまして、寸分飾ると云ふ事は致しませぬ。そこで飾りけなく申しあげますが、閣下が手前如きに友情をお求めになるとは御戯談としか受けとられませぬ。」

「いや俺を誤解して呉れては困る。俺は何時かの樣に兜の杯で戯談ばかり云つて居る人間では無い。戯談を好む樣に見えても俺は生眞面目なのぢや。そして俺のほんとうの眞面目な術は」と云ひながら考哲人は體は人間で頭が豺の姿をして居る怪像アヌビスの方に手を泳がす樣にさしのべながら「此の怪像を撫でゝ遠い世の靈魂を呼び出し奇蹟を行はせることぢや。俺は此の癈墟に來てよく昔の靈と話をする。此の世のわからない謎はみんな此の癈墟に持つて來て靈と一所に解くことに俺は大分前から決めて居るのぢや。俺は今お前さんにも此の靈との協議の仲間になつて貰ひたいと思つて居るのぢや。」

「手前は生れて始めて此の樣な不思議な言葉を承ります手。前の生れた國のケネルム樣と云ふ牧師樣は、手前が幼い頃よく惡魔に誘はれるなと戒しめて下さいましたが、異敎の哲學とか云ふ面

白い、美しい言葉は異敎の暴君よりも尙ほ怖しいものだから、用愼を堅固にして居れと仰いました。」

「ケネルムと云ふ牧師のことは俺も聞いてよく知つて居る。あの男だつて俺の考へ方に異議を樹てる樣なことはあるまい。あの男は慥かにオヂン敎の方から聖僧に導かれて基督敎に改宗して聖アウガスチンの伽籃で死んだのぢやつたね。」

「左樣で御座ります。閣下はよく御存じで御座りますなあ。手前はあの方のお言葉を今も金科玉條と信じて居ります。あの方の御言葉は今も耳にはつきり殘つて居りますが、基督ならぬ他の神に近づくものゝ言ふ事は決して耳を傾けてはならぬとお仰いました。」

「實はそれがあの男の偏屈過ぎて迷信となつて居るところぢや。隨分立派な秀れた人物だつたが偏屈なのが缺點で天國に入る門を狹くせまくたつた一つに限つたのが如何にも殘念ぢや。天國にはいるのは何もそんな窮屈なものでは無くて到るところ自由に解放されて居る。ケネルム殿にしろ、その他一般の宗敎家と云ふものは兎角神が人間に與へられた自由と云ふものを忘れて居る。その人に叡智と勇氣とさへ具はつて居るならば、人間はどの樣にも自由を享樂することが出來る筈ではないか。異端のなかにこそ餘計な眞理が生きて居る。天國と云ふものは廣いから、わざわ

ざ狹い門を見つけ出さうとして、生命の方が間に合はず、外側をまはりながら死んでしまふ例も多いゝことぢや。眞理には直覺と云ふ近道がある。お前の樣な勇氣のある純なものにはたゞ直覺さへするなら、すぐそこに天國があると云ふわけぢや。俺の哲理をよく聞いて呉れるがいゝ。」

「でも手前の耳にはそれも御戯談の樣に聞こえてなりませぬ。小供だましの樣な仰せられかたでは御座りませぬか。」

「いや。いや。決してさうでは無い。俺は今、人間が誰でも心の奥底に絶えず抱いて居る憧憬の事に就いて云ふのぢや。ヘレワード。お前の樣な正直で剛膽なものには、すぐと會得が出來ることと思ふが、人間は誰でも自分よりは偉い大きな力ある存在に近づかうとして居るのぢやが、五官の力だけは近づくことが出來ない。いや時には五官の爲めに碍げられてそれが出來ないのぢやそれが直覺で達し得られないものならば、何も神樣は始めから人間にその樣な盲目的な憧憬を與へやう筈も無い。俺の哲理の鍵は玆ぢや。こゝに眞理がある。」

老哲人アゼラステスが斯う云つた時、野武士は半分解した樣な解せぬ樣な妙な顏付きをして居たが、

「手前には閣下の御言葉が判る樣な氣持ちもいたします。しかし手前が定めた神樣以外には手前

は近よるまいと堅い決心を致して居ります。手前は何處までも、基督教信者の野武士で押しとほして居るもので御座りまして、神に對しました手前が奉仕する王者に對し、此の信念は小搖ぎだも致しませぬ。異端や邪神やによつて如何に直覺の道が拓けませうとも、それは必ず眞實の聖なるものに對する反逆と心得て居ります。閣下におきましても此の樣な怪しい癈墟に身を置かれて、邪神とお交りになる以上は所詮は陛下に對する反逆と云ふことになりは致しませぬでせうか。手前はかう云ふ信念で居りますから、如何に閣下が異端の有難さを御說きになりませうとも手前は御辭退を致します。手前は陛下に傭はれた野武士で御座りまして、忠義の道を勵むばかりで御座います。もとより宮中の典禮などはすこしも心得ず、がさつものゝ分際で、陛下に仕へる道も存じませぬが、たゞたのむは此の戰斧ひとつ、生命かけて邪道にすゝまず、たゞひたすらに忠義を致さうと思ひます。」

とヘレワードは稍々氣色ばむで斷乎として云つた。

「いや。それは無論それでよいのぢや。ぢやがヘレワード、お前は陛下に忠義を勵まねばならぬと同樣にまたアキレス將軍にも忠義を立てねばならない事も承知ぢやらう。」

「いや。將軍への道は忠義と云ふものでは御座りませぬ。」と野武士の口調は愈々斷乎として來た

将軍は親切な心のよいお方で何時も手前を友達にして下されますから、手前は世にも有難い勿體ない事に思つて居ります。しかし將軍も矢張り手前と同樣陛下の傭人で、手前と同じ忠義の道を進まれる方と思つて居ります。」

「いかにも立派な言葉だ。その心は神々しい程に尊いものぢや。武士として天晴れの勇氣あるものばかりが云ひ得る言葉ぢや。俺は感心の外ない。」

「しかし手前は何處までもアキレス將軍を尊敬致して居ります。陛下は人々の力に應じてお用ゐになります。將軍のお力と手前の力とには大きな差異があることをよく〳〵承知して居ります。」

「ぢやがヘレワード。そこに一つの懸念は無いか。」と老アゼラステスは仔細ありげに顏を野武士の方に伸ばしながら、「傭はれたと云へば既に此の國ならぬ外國人と云ふが御前の身の上ぢやが、アキレス將軍はお前と同じ民族、そこのところに陛下よりももつと有難い心持ちを感じる樣なことはなかつたか。」

茲で野武士は一寸當惑した樣な顏付きをして居たが、

「手前もそれを考へたことは御座ります。閣下の仰せられることは胸の絃には觸れますが、しかし義を覆すことは出來ませぬ。此の事に就いては何うぞ此の上は仰らないで下され。此處に惡魔

がつけ込む隙があるのかも知れませぬ。あゝ聖なる神樣。神樣は飽までわれ等北歐武士に義を守らせ給へ。」と云つてヘレワードは暫くの間瞑目して天に祈る樣な風であつたが、軈て胸のうちに深く決心をした態度で、「閣下。手前は是れで御いとまいたします。北歐の野武士は如何なる人間にもまた如何なる靈魂にも誘惑されない決心で居ります。」

と云つてて踵をかへして、逃げ出したのであつた。

野武士が去つたあとで老哲人は只獨り此の廢墟に殘つたまゝ冥想に沈むで、天地は再びもとの空寂に歸つたかと思はれたが、突然に其處にアキレス將軍が現れて來た。將軍はたゞ默々として冥想裡の老哲人に近づき、老哲人もまた默としたまゝで、物言はぬ顏と顏とをお互に見合はせて居るに過ぎなかつたが、軈て將軍の方から、「どうぢやな。アゼラステス殿。お互に計畫した目的はうまく行きさうかなあ。」と云つた。

「大丈夫だ。」とアゼラステスは嚴肅な顏付をして云つた。

「だが、あの野武士はまだこちらのものとは云へない樣ぢや。あいつの沈着と勇氣とを味方にすることが出來たら、いざと云ふ場合に下手な奴隷の何千人あるよりは力强いんだが。」

「そこまではまだ成功しなかつた。」と老哲人。

「貴下の如き聰明と智慮とを以つてしても流石にうまく行かんかなあ。他人を説服する術にかけては古今獨歩の譽れある貴下だが、何うにかならぬものか知ら。貴下の博學多識もあの脊骨の强い野武士に對しては一向價値が無いと云ふもの、それにしても俺はあの野武士が愈々賴母しく思はれてならぬが、……」

「いや。お靜かに。無論俺はまだあの野武士を手にいれては居ない。隨分頑丈一點張りな剛情極はまる奴ぢやが、俺は大丈夫失つたとは思はぬ。昨日貴下と俺とが相談した狀態からは一歩も進むでは居ないが、しかし俺は慥かにあの野武士に遁れやうにも遁れることの出來ない一つの心の種子を蒔いて置いたと信ずる。まあ、その種子が萠え出るまではあの野武士はあのまゝにして置くより外道はあるまい。屹度こちらの味方になるであらう。時に國難の方の形勢は其の後何うなつたか。あのラテン族が擧つて攻めて來ると云ふ十字軍は矢張り猛烈を極めて居ることであらう。陛下はいつもの懷柔策で、とても叶はぬ敵を中傷しやうとさぞや肉の苦策ばかりを考へて御座るだらうと思ふが。」

「いや。其の事に就いては豫期しない現象が急に起つて來た。」と將軍は説明しだした。「それもほんの二三時間前の事だ。例の十字軍の勇將であるボオモン伯が僅か七八騎を從えたばかりで身も

輕々と此の君府の都に騎り込むで來た。と云ふ次第だ。是れまでボオモン伯は幾度か帝國の爲めに强敵となつて現はれた事から考へて見ても、今度かく手輕に乘り込むで來たと云ふ眞意も實に測る可からざるものがあるに相違ない。ところで皇帝陛下もまた頗るトボけた態度で伯を歡迎された。皇帝陛下の態度は、同じ十字軍の主將であるブイヨンのゴドフレイと此のボーモン伯との中介をやると云ふ樣な出方だからなあ。」

「成る程。」と老哲人は頷いた。「それは寧ろボオモン伯の方から出た言葉であらう。伯の方から、何れ十字軍がブイヨンのゴドフイレに率ゐられて雲霞の樣に押しよせて來た際に、陛下との間に立つて屹度調停の勞をとるからと云ふことを巧に云ひだして、存分に陛下を丸めてしまひ、陛下もまたすつかり丸められた態度を見せてゐらるゝ事と思ふ。」

アキレス將軍は語り續けた。――「伯はほんの偶然の樣に宮廷に現はれると、陛下から空前絶後の大歡待を受けて光榮此の上なしと云ふ有樣だつた。以前の敵意などを想ひ起す樣な言葉はすこしも無く、あのアンチオクでの暴戾な簒奪振りなどは思ひ出されもしなかつた。たゞ天を祝福する聲ばかりが高々とあげられて、陛下とボオモン伯とは全く十年の知己の有樣だつた。ブイヨンのゴドフレに對する眞個の同盟は慥に出來あがつたと思はれる。」

「ボオモン伯は何と云つて居たかね。」と老哲人。

「伯は何う云つたか、俺は直接聞かなかつたが、あとで奴隷のナセスが話した事に依ると、伯には山ほどの金塊を賜ひ、その上、廣大な土地の讓與も約束され、その他伯にとつて莫大な有利な條件が持ちだされたさうぢや。之れはみんな伯が帝國の危急の爲めに陛下の方に味方すると云ふ堅い約束の上からであつて、まあ斯うした事が陛下があの貪婪飽くなき野蠻伯に示めされた寛大心と云ふものだ。伯にあてがはれた部屋なども、宮殿中一番立派なもので高價な絹地や寶石づくしの飾物や黄金白銀その他が埋高い程積むであつて、まだ之れでもあの野蠻伯が滿足しない時は寶物藏を全部伯の爲めに開け渡してもよいとのことださうだ。いざと云ふ時伯が陛下の味方をすると云ふ條件だけで君府の國寶は殘らず十字軍の屯營所に持つて行かれるのだが、果して敵の貪慾に乘ずることによつて陛下はよく伯を味方にとりいれることが出來るか知ら、天下の勇將が慾に眼の昏むかどうかを見るのも一興だなあ。」

「さあ。」と老哲人は空に嘯きながら、「ボオモン伯は慾に眼が昏むで全く陛下に忠誠を誓ふかも知れないよ。すくなくも是れ以上伯の貪慾に媚び得るものは他にあるまいからな。陛下も案外、かう云ふことにかけては妙手腕を持つて居るかも知れない。ブイヨンのゴドフレが來れば矢つぱり

此の術をやるだらうし、十字軍の諸將は悉く腐敗するかも知れない。だがまあ今からは何も云はないがよい。お互は玆暫く高見の見物をやつて居れば、軈て成り行きも判然として來るだらう。はやく見越すは危險ぢや。危險ぢや。」

「時に今夜の御前會議はどうしやう。」と將軍

「出かけるのは止めやう。呼ばれたら是非ないが、あんな馬鹿姫御の朗讀などは俺はもう聞き度くも無い。あれを才女と云ふのは全くの親馬鹿ぢやね。」

話は之れで終つてアキレス將軍は老哲人と別れて、お互に一所に此の癈墟に居ることを人に見られるのを怖れる樣に、別々な方向をとつて立ちさつた。それから暫くの後、例の野武士のヘレワードはアキレス將軍の幕營に呼ばれ、その夜は別に番兵としての勤めをするに及ばぬと云はれた。尙ほその時序に將軍は野武士の顏を意味ありげに見ながら、

「お前何か俺に云ひたい事があるが云ひだすのを躊躇して居る樣だな。」と云つた。

「ハイ。閣下。今日手前はあのアゼラステスと云ふ老哲學者と妙な處で會ひました。あの變な老人は全く見變つた服裝をして居りましたが、手前にはさつぱりわけが解りませぬ。何んだが深い怖しい事ばかり考へ込んで居て、そして無暗と人を味方にひきつけやうとばかりあせつて居る樣

に思はれましたが、閣下もあの老人には篤と御警戒なさりませ。」

「お前は眞底からの正直者だよ。ヘレワード。」とアキレス將軍は部下を愛撫する樣な聲で、「あのアゼラステスと云ふ老人ときては何處までも眞面目臭つた顏をしておどけて居るんだよ——時には靈魂と問答をするなどとも云ひ出して、何んでも自分を神秘なものに見せかけやうとする癖がある。それでこつちが一生懸命に信じでもすると、すぐに大聲を出して笑ふと云ふのだから、全く始末におへぬ。ヘレワード。よく氣をつけて、わが勇敢なる戰斧隊の武士は一人だつてあんな老人に愚弄されない樣にしなければならぬ。」

「御心配は御無用です。手前はあんな老人に會ひたくもなく、如何に誘惑して來やうともこちらの心は巖よりも堅固で御座ります。閣下。もう手前は二度とあの樣な魔法使の老人に會つて嬲られる樣なことは致すまいと決心して居ります。」

「いや。何もさうまで固苦しくなる必要もあるまい。兎にも角にもあの老人は古今無比の大學者であるから、時に會つて種々な智識を敎えられるのもお前の知見を拓くことにならう。たゞ馬鹿にされぬだけの用愼をして居れば結構ぢや。」

こんな風な會話でその時將軍と野武士とは別れた。

七

君府の皇帝が、今押しよせて來たところの雲霞の如き十字軍の諸將に對して、縱橫の奇策をめぐらし、盛に離間仲傷を行ひ、敵をして飽くまでも同志打ちをさせて、その間に自己の帝國の安全を計らうとするのは、もとよりその胸中を往來して居る一つの痛快事である。だがそれはなか〳〵危險だ。むしろ確實な安全を計らうとするならば、同じく此の帝國も基督敎國であるから、十字軍の前に屈し、その大主義の前に絕對の贊意を表して聖地回復の大業に參加すればよいのである。そして十字軍の總帥の意のまゝに動きさへするならば、之れより以上安全な策は無いのであるが、それが君府帝國の獨立と云ふ面目から出來ない。そこで皇帝はその中間の道をとつた。

即ちその中間の道と云ふのは、勿論君府の朝廷は其の實力において及ばないのであるから、實力を成るたけ對手に見せない樣にして安全を策すると同時に、成るべく對手から輕蔑されぬやう尊大な對度を持して行かねばならぬと云ふ事である。だから十字軍の先發としてブイヨンのゴドフレが到着した時は頗る寬大な歡迎振りをした。

それから引き續いて一ケ月半ほどの間十字軍が澤山に帝國の國境內にやつて來たのであるが、

皇帝の秘策通りに、君府の朝廷では、十字軍の各軍團に對して別々に機會あるごとに非常な敬意と御馳走とが饗せられた。だがそれと同時に朝廷から遠く離れた邊境の十字軍は時々變裝した土耳古人やスキシヤ人やの爲めに襲はれて難澁に陷り、或は狡獪な道案内に誤られて目的とは反對の方向の山や森やを迷つたりした。一方君府の朝廷では、十字軍の首領等が、君府の皇帝から異常の尊敬を受けて山海の珍味に飽き、馨の高い酒で咽喉を潤ほして、日夜歡樂に耽つて居る間にそれに從つて居る兵士達は遠く離れたところで、泥砂の混つた食料を供給され、毒の這入つた水や、着色した酒やを飲まされて居るのであるから、忽ち病氣が蔓延し、折角故郷を捨てゝ出ながらも、怨恨と希望をかなたの聖地にかけながら死に倒れるものが澤山にあつた。斯う云ふ狀態がどうして破綻を見ないで居られやう。邊境にある十字軍の部將たちは、彼等の同僚に對して不平滿々の怒氣を發し、君府にある將卒等の不德を鳴らし、遂には邊境にある十字軍の全部と帝國との間に一大戰爭が始まりさうな危機になつて來た。

だが皇帝アレキシウスはまた〳〵陰謀を弄し、種々の手段によつて中央の十字軍の將卒等の歡心をもとめる事に成功し、よくその間に處して弱點を暴露せずに居た。たとへ邊境に屯營して居る部將達から、十字軍の軍隊に受けた損害を報告して來ても、皇帝はそれをたゞ止むを得ざる氣

の毒な損害で、此の熱帶國で多分兵士等が腐敗した果物でも食つたから、その樣に惡病が蔓延するのであらうと云ふ風に說明して聞かせ、すこしも疑惑を抱かせなかつた。朝廷で饗應されて居る十字軍の將卒達は無論自分等の武力に自信を持つて居り、何時でも邊境の味方を救ふべく斷乎たる處置をとり得るのであるけれど、彼等は既に全く慾望の捕虜となつてしまつて居て、此の東方帝國の莫大に豐滿な富に眼がくらみ、今にも皇帝がそれを頒ち與へやうとするかの如き態度に釣られて、たはいも無くその誘惑にかゝつて居るから、たゞなり行きに委せて居るに過ぎなかつた。

十字軍中でも一番懷柔が困難だらうと期待されて居たのは佛蘭西から來た將卒達であつたが、その一番の首領であるベルマンドア伯が既にはやくも皇帝から恩をうられてぐんなりして居る有樣だ。それも皇帝から云はせると全く天佑の樣なことで、あの傲慢無比の尊大なベルマンドア伯が、勇姿を陣頭にたてゝ伊太利から君府へ向け船出した時は、飛ぶ馬もおとすほどの威容があつたが、海上で暴風の爲めに多くの船艦は覆され、やうやく希臘の海岸まで生き殘つて來たものは皇帝の屯營軍の前に哀を乞はねばならなかつた。ベルマンドア伯の軍は出發當時の意氣全く衰えて、君府に送られた時は捕虜の姿であつたが、皇帝はすぐと寛仁の態度を見せ、彼等を解放する

ばかりか豐富な賜物さへ與ふほどに如才は無かつた。

かう云ふ風でベルマンドア伯は希臘皇帝に對して感謝の念があり、その上慾望も手傳つて居るから、飽くまでも君府との平和を主張してやまない。またゴドフレやツーロンのレイモンドその他の面々は、相當の識見家であるから十字軍の運動をたゞの狂熱騒ぎとは見ず飽くまでも聖地恢復を念として居る立場から、その途中にある此の希臘帝國との戰爭は必す避けねばならぬと云ふ意見を主張して居る。卽ち此の東羅馬帝國の希臘は矢張り同じ信仰の基督教國であつて、且つ此の基督教國が一番東方にあつて異教國との境にある以上、もし國產多く國力弱く、他の民族の來襲にあふと云ふ樣な場合には極力保護せねばならぬと云ふのがその見地だ。かう云ふ意味から君府の朝廷で饗應を受け、何處までも皇帝との親和を持ち續けて行くことに努めて居る。

皇帝は之れ等の將卒達の心持ちをよく飲み込むで居て、その上始終巧みな術數を弄して親和をはかつて居るのであるから、流石に邊境の十字軍が危機にあるにも係らず、豫定通りに懷柔の目的を達することが出來、そして一つの大きな決議さへ出來た。それは十字軍の全部が聖地に向ふためにボスホラスを船出する際、此の東方の盟主であるところの希臘皇帝に齊しく敬意を拂ふ可く全軍にわたる謁見式を盛大に行ふと云ふ事であつた。

皇帝此の決議を聞いた時、全身がぞく〳〵する程な愉快をおぼえた。そして此の謁見式を出來るだけ盛大に行つて、威光を內外に誇さねばならぬと考えた。

その謁見式において十字軍の全部から皇帝は忠誠の誓を受けるのであるから、その場所も思ひきつて廣大なところでなければならぬと云ふのでブロポンチスの海岸に近い大きな臺地が選ばれた。その臺地の中央に一つの高い玉座をこしらえ、それには皇帝のみが座席をとるのであつて他のものは一切足を踏みいれることが出來ないこととし、その上飽くまでも君府朝廷の盛觀を呈する爲めに、玉座の周圍を悉く皇帝の重臣を並み居させることにした。攝政官をはじめ例の五重臣華美な法衣を纏つた大僧正や、また素朴で古怪な着物を着るので有名な老哲人アゼラ・ステスまでも皇帝の威容を添える爲めに侍ることになつた。そして之れ等の周圍をとりまくものはかの勇敢無比の稱ある北歐から來た戰斧隊の一團である。彼等戰斧隊は此の日に限つて、常の儀式の時によく用ゐる銀飾燦然とした盛裝でなしに、悉く黑びかりのする鋼鐵の頑固な甲冑で身を固めて居る。それもその筈、此の謁見式こそは全歐羅巴の各民族の精銳がより集まるのであるから、どの樣な大喧嘩が燃えあがるかも知れず、いざと云ふ時は何時でも戰えるだけの準備が皇帝の禁衞軍たる戰斧隊にはあるのが當然だ。

此の物凄い黒裝の戰斧隊の外側を更に希臘の守備軍として羅馬や波斯やから傭はれて來た軍隊が、之れは前の黒裝に反對に金銀五色さま〴〵の服裝をして整列し、堂々とした體格に高々と冑の頂飾(クレスト)を輝かし、手に持つ楯と槍とを無限に連ねて居る。そして更にその後には矢張り希臘の騎兵の軍團が雲の如く群り、軍團が動くにつれて立ちのぼる一抹の砂壁が風に晴れると東洋的な色彩の濃いさま〴〵の旌旗が樹つて居るのが眼に眩い。特に皇帝の聖旗とされて居るかのラバラムの旌は帝國の永き光榮の過去を物語るもの、古びて居るのも反つて崇嚴の感を曳く。

西歐から來たがさつな十字軍の武士たちの眼には、如何にも君府軍隊が雲霞の如くに大勢で。しかも訓練が飽くまでも行きとゞいて居る樣に見えて、何となく田舍ものが盛儀の場に引出された樣に面羞しく思はれるものがあつた。

十字軍は此の儀場の右手の遙かなたから海邊を沿ふて來て、皇帝の前に忠誠を誓ふのである。ブイヨンのゴドフレもヒユウ大王もベルマンドア伯爵も何れも肅々としてやつて來た。しかしもと〳〵慾望や政策の上やから皇帝に對して忠誠を誓ふのであるから、此の肅然としたあたりの狀景に對して不思議な矛盾ながら、何處かに忠誠の心が滑稽化されて、何となく一種の喜劇的氣分が漂つて居る。

その誠忠誓言の次第はかうだ。即ち十字軍の各軍團はそれ〴〵の部將に率ゐられて、玉座の前の左から進むで行つて、皇帝陛下の前を横ぎる時、それ〴〵出來るだけ簡單な言葉で忠誠を誓ふの意味を云つて皇帝の會釋を得るのを光榮とすると云ふのである。ブイヨンのゴドフレ、その弟のベルドキン、アンチオクのボーオモンその他十字軍の面々は玉座の前に出ると馬から降りて忠誠を誓つた上幕僚とともに玉座の見える處に歩まつて侍するが、第二流以下の部將達はそのまゝ退出してよいことになつて居るが。なかには誓忠の式をすましてからも尙ほその邊にとゞまつて居て自分の位置がさも其處に止まるに至當なるかの如く見せかける虚榮の徒もなか〳〵多かつた。

かくしてボスホラスの海邊には皇帝の軍隊と十字軍との二大軍團が相對して、恰も二つの大きな雲の群れが天に横たはつて居るかの樣に見え、その間を丁度稻光りが行きかう樣に十騎二十騎の騎士達が行きかいながら、頻りとお互の滿足な心持を交歡して居る。そしてボスホラスの海の浪うつ磯には、今誓忠式を終つたばかりの大勢の佛蘭西軍が屯して、そこに舳艫を相衡むで待つて居る華美な船の姿を眺めて居る。帆はあげられ櫂はおろされて、海峽を隔てゝ彼方の亞細亞の岸は手にとるやうに近く見える。戰ひを望むで一度彼岸にわたれば生還は期し難しと云ふので彼

等は互に杯を擧げて武運を祈り合つた。陽氣な心が全軍に漲りわたり、軍歌や音樂やがあちらでもこちらでも起つて來た。

十字軍が斯んな風に元氣が横溢して居る際に希臘の皇帝は此の盛儀を利用して、極度に豪爽雄大な態度を見せ大に自己の稜威を輝かさむものと思ひ込むで愈々尊大な態度に出ると、十字軍の諸部將達も、或ものは大に自分の虚榮心には詔れて悅に入り、或るものは野心の奴隷となつて居り、また或るものはその負慾が滿足されたために、皇帝の意を愈々迎えるものばかりであつた。最も眞面目に考へて居る連中でも、十字軍の爲めに皇帝の力を藉らねばならぬと云ふ意志を持つばかりであるから、皇帝の意を迎えるに何んで不贊成があらう。そんなわけで全軍の意氣は烏頂天になるまでに高潮して來た。

君府城外に樹てられた幾千百のさまざまな旌旗のもとに大勢の伯、侯、その他有名な騎士が雲の如くにあるが、皇帝の弄絡の手がその全部に及んで居ないのは勿論だ。だから不平の徒もそのなかに多くあることは免れない。なかにも佛蘭西から來た騎士はその武士氣質が最も傲岸不遜で常に十字軍中でも他民族から來た騎士等を眼下に見くだし、苦傍無人な振舞ひばかりが多く、如何に希臘の皇帝が威張りかへつて稜威を發揮したところで何とも思つて居ない。彼等佛蘭西騎士

は常に傲語して、若し天が墮ちて他の十字軍が押し潰される樣なことがあるとも、フランクの騎士だけは槍の穗先を以つて天を支へるとさへ云つて居る位だ。だから時おりさう云ふ態度が君府の朝廷でも現れて、屢々禁衞軍がへこまされたことがある。で皇帝もはやくから此の荒武者達に對する警戒の心を抱き、何はともあれ誓忠式がすむとなるたけ早く佛蘭西騎士たちはボスホラスの海の彼方に渡らせてしまつた方が無事だと云ふので、今日もはやくから佛蘭西軍だけを磯邊に出し、特にベルマンドア伯とかブイヨンのゴドフレなどによくその意を含めて佛蘭西騎士の一隊を取り締らせたのであつた。

玉座の上の皇帝は、佛蘭西の騎士達が半分愚弄した樣な態度で誓忠の式をなすのに頗る自負心を傷けられながらも前後を辨へて苦しくぢつと我慢し、澁い顏付をして居た。軀て五六の部隊が、それでも無事に通り過ぎ、各人とも皇帝の前に來ると型の如く跪座し皇帝の掌の上に自分の手をのせて簡單な誓言を私語した。が聽てアンチオクのボーモンと云ふ傑物が、前回の十字軍の時は敵ながらも今度は味方となつて皇帝に誓忠の式を行ふ番となると、皇帝も大に此の人に敬意を表するつもりで、ほんの僅かの距離ではあるが海岸の方へ見送つて行つたのであつた。

皇帝が海岸の岸へ行くと他の重臣等も從つて行つて、ほんの暫くであつたが玉座は空になつて

居た。その時、すぐとつぎに誓忠式を行ふ番になつて居る一隊の佛蘭西騎士が矢庭に馬に鞭うつて飛んで來た。その先登の騎士は頭に平たい帽子を戴き、手足の筋肉が極度に發達した偉丈夫で羊の毛皮を纏ひ、その上に仰山な鎧をつけて居たが、空になつた玉座の前に來ると、飛鳥の如く素速く馬から飛びおり、無作法に鎧を脱ぎ捨て、馬の手綱を、驅つてついて來た從者にわたしながら、悠々と圖々しく空になつた玉座の上に腰をおろした。金襴の椅子掛の上に此の偉丈夫を置いて見ると如何にも痛快だ。廣く肩を張つて、眼光が鋭く、眞にあたりに人なきが如き横柄振り滿足この上もなしと云ふ顏付きをして居ると、彼の愛犬であらう、小牛の樣な大きなものが、尻尾をゆたかに振りまはしながら、その足もとにやつて來て、金銀縫ひのダマスク織物の上に臥そべつて、之れまたお主人の騎士以外一切を輕蔑して大きな口を開いて吹呻をした。

ボーモンを見送つて行つた皇帝はすこしく離れたところから、自分の玉座が此の狼籍極はまる佛蘭西騎士にどつかりと占領されて居るのを見て呆氣にとられてしまつた。禁衞軍の戰斧隊は斧を顫はせながら、すぐにも此の狼籍ものを玉座から引き摺りおろすところであつたが、アキレス將軍はじめ他の隊長も、此の狼籍者の素性がわからないのと、皇帝がどう云ふ命令を下すかを待つたのとで、張りきれさうな勇氣をもだもだしながら躊躇して居るのであつた。

驚て此の亂暴狼籍な騎士は大音聲を張り上げた。いろいろな民族の集合した十字軍や戰斧隊だからその言葉は解せられない部分もあつたけれど、その音調と態度でその意味は判然と滿場に行き亘つた。——「いつたい先刻まで此處に坐つて居た間拂けは何者だ、——木の樽か石ころでもあるまいが傲然と威張りあがつて、西歐の貴族や騎士の花をお辭儀をさすとは怪しからぬ事ぢや。三べんも職爭に負けた戰斧隊のその仰々しい取卷きは何と云ふ態だ！」

すると何處からともなくまるで地の底からでも唸り出た樣な深刻な沈痛な聲がそれに應じて叫ばれた。——「ノルマン族が此の戰斧隊と戰ひ度いとな。陛下を罵つて何になる。卑怯者めが一騎勝負で來い。戰斧の雫にして呉れむ。」——

此の聲は滿場を肅然とさせた。玉座の上の荒武者の耳にもぎくとばかり響きごたへがあつた。戰斧隊は賑かにざはめきたつて、はちきれさうな勢が動き、皇帝は手も足も出ずたゞ狼狽して居るばかりであつたが、そこをボーモンが氣をきかせてあたふたと歸つて來て、玉座の荒武者の肩に手をかけ、半分慰撫して半分恐怖に襲はれた樣な恰好でやうやくのこと荒武者に玉座からおりることを納得させやうと努めそのあとに皇帝がすごすごとやつて來た。ボーモンは荒武者に、

「そなたは有名なパリイ伯ぢやないか。何もこん麼ところで犬音聲をおあげになることはあるま

い。高の知れた傭兵の戰斧隊風情を對手ぢやそなたの武士道の汚れと云ふもの、そなたの眞の勇氣を示さるゝは聖地に渡つてからのこと、こゝはどうか此のまゝに捨てゝ置かれよ。さあさあ。はやく玉座を陛下に讓つて下され。」

と理を解いて云ふと、その荒武者も懶げに玉座から身を起して「拙者が對手を選び損ねたかどうかは知らぬ。が傭兵と聞いてはがつかりぢや。それにしてもあの漂泊もののアングロサクソンの落武者達はこんなところによくも傭はれて立派さうな姿をして居るには興醒めた。しかしいくら奴隷風情だとて相應に勇氣があるなら厭いはせぬがなあ。」

皇帝は此の言葉を憤怒と恐怖と半分々々の心で聞きながら、自分の計畫が根本から覆された樣な不安を覺えた。これは屹度命とりに來たもので、しまつたなと絶望し今にも戰斧隊に戰への命令を下さうとしかけたのであつたが、しかしよく見ると他の佛蘭西騎士達はたゞ整然として騷がずに居るのであるからほつとばかり胸に救はれた樣な心持ちになり、騷ぐ動悸を强ゐて靜めながら、此の場はたゞ一騎士の亂暴狼籍として見のがす方が上策と云ふ事に氣がつき、やつとのことで玉座まで辿りつき、丁度傍らにバルドキン伯が居あはして居たのを幸ひ、

「何と天晴れな物凄い勇者ぢやなあ。朕が席に凭りかゝつた處を見ると餘程身分に已惚れある樣

に見ゆる。敬意は何の樣に拂ふたらよからうか知らむ。」とその場をうまくごまかして云ふと、バルドキン伯は

「あれは我が十字軍でも最も勇名を轟かせて居る一人で御座ります。無論吾が軍には勇者は濱の眞砂ほどに大勢におりますが、しかしあの騎士こそは勇者中の勇者で御座りまする名前や身分は自分から申しあげることで御座りませう。」

と答えた。

皇帝はよくその荒武者の姿を眺めた。だが此の傀偉な荒武者の眞相は一向讀めない。烱々とした眼力で侮蔑された樣に瞰みかへされて居るが、しかし別に殺意を持つて居るらしくも見えず、挑戰的な手段をたくらむで居る樣な態度も見えない。で皇帝は割合に落ちつき拂つた言葉で、

「朕はまだどなたとお呼びかけしてもよいやら存ぜぬが、今バルドキン伯爵の云はるゝ事に依れば、朕は玆に名高い勇者をお迎したわけで甚だ滿足ぢや。ようこと聖地恢復の爲めに遠路はるばると參られた。」

「拙者の名前が聞きたいとな。そのことなら十字軍のどの騎士になりとお聞きゝにならば拙者よりも禮儀に適つてお答を致すであらう。ぢやが武士は戰つて見て後に名乘りあつて一層の味はい

があるもので、先づ戰つてお互の勇氣の程も知つて、しかる後に名乘り合ふときにお互に尊敬の心を起し、眞に美しい友情も成り立つと云ふものぢやが。」

「それにしても朕は今切にお名前が承りたい。さもないとそなたの國王の前で如何樣の待遇を受けらるべきが至當か判らぬでは御座らぬか。」

「何んだと。」と佛蘭西の荒武者は太い眉根をぐつと皺寄せながら「拙者がそなたの船に乘つて行つた後でもまだ拙者の名前を憶えて居て臆病心が起つた時の藥にでもしやうと云ふのならばぢやが……」

あまりの事に皇帝に、此の荒武者の言葉がフランク語だけによく解らないと云ふ顏付をして見せ、それに今は重大な盛儀な場、這麼狼籍者を對手も五月蠅いと云ふ風にして、はやく次ぎの部隊の誓忠式をとバルドヰン伯に私語くと、それを聞きつけて隙かさず荒武者は、

「何だ、それが君府の王者らしい氣持ちかい。よもや今まで問答が出來たフランク語が急に解らなくなる筈もあるまい。そなたも一國の王者であつて女人でも僧侶でも無い以上、他人から侮辱をうけた時は何う振舞ふか位の心得はあらう。世にも臆病な王樣があつたものぢや。」

ボーモンは全く見るに見かねて、

「これこれ。陛下の前ぢや。禮儀を守られよ。誰にせよ出陣の前の誓忠式に陛下から家柄や名前を下問になつたら、必ず答えるのが武士の禮儀では御座らぬか。」

「陛下の前か馳の前かは存ぜぬが、拙者は急いで名乘りをあげたくも御座らぬ。ぢやが拙者のことを聞かうとなら云ひもしやう。こうぢや。拙者の生國佛蘭西のまんなかに大きな森があつてその森のまんなかに古い古いひとつの堂がある。礎も土に埋れて雨風にも仆れさうな廢堂に過ぎないが、そのなかに聖マリアの像が祭つてあつて、われ等騎士はその堂のほとりを武士道を練るところとしその聖像をわれ等が槍を折る淑女として奉つて居る。此の堂には四つ道が四方からついて居り、今も昔も、胸に自信のある騎士は玆に來て三度角笛を吹き鳴らしその響きは森に茂つた衿（トネリコ）や樫の葉を顫はして遠く聞こえて行く。かく角笛を吹き鳴らし置いて騎士はわれ等が槍の淑女の前に跪いて祈禱をなす。角笛を聞いて駛せて來る騎士も之れまた胸を練る爲めで、忽ち仕合が始まり、われ等が淑女の聖マリアの前で命かけて爭ふ。拙者も武術を此の堂の前で一月半練つた。來るものも來るものも拙者の武術と禮儀とを知つて斷金の友となつたが、たゞ二人だけ——一人は不運にても馬から落ちて頸の骨を挫き、一人は拙者の槍先にすこし力が籠つたため胸から背に拔け透つて血みどろに死んだのだが……」

今まで默つて聞いて居た皇帝は、

「いやよく呑みこめた。そなたの樣な立派な體格で、その上その樣な御勇氣があるとは、定めしそなたの御國でも比類を見ないことで御座らう。ましてやたゞの口論や喧嘩に生命を捨てる樣な犬侍の類は及びもつかぬことで御座らう。御自重あつて聖地で勇ましく御奮戰なされ。」

「その御言葉は承知した。」と荒武者は飽くまでも横柄に「だが、陛下も御承知あれ。われ等の武道は心に臍ぎがあつてはならぬ。われ等が故郷の森の槍の淑女に祈禱を忘れては、野に鹿や猪を狩つても面白くない如く、此の場で武道を一度練らいでは聖地にわたつても臍ぎ勝ちで困るのだが。」

「それは到底、此の地の武士では御對手も出來まい。そなたは必ず大旗のもとを離れず、此のまゝ聖地に行つて、よき敵をお撰びなされ。」

「それならば他に致し方もあるまい。では陛下ははやく玉座につかれよ。誓忠の儀式とやらも馬鹿くさいが、皆がするなら拙者もしやう。」

と云つた。皇帝が玉座につくとその手に荒武者は荒らかな手を置いた。やつとの事で誓忠の言葉が濟むと、バルドキン伯が荒武者を誘つて磯邊の方に行き、船の上に乘るのを見すまして、ほ

つと安心した顏付きで伯は皇帝のもとに歸つて來た。

皇帝は

「今の面白い剛膽な騎士の名は何と云ふのか」とバルドキン伯に聞くと、

「パリイの伯爵ロバートと申しまして、佛蘭西貴族中天晴れの剛勇で御座ります。」

聽て暫くの間、皇帝は何か心のうちで考へて居るらしかつたが、今日の誓忠式は之れで一段落をつけると云ふ事を宣した。此の上續けてはもつと多くの狼籍者が出るかも知れぬと云ふ懸念があつたからである。で殘りの十字軍の將士は再び君府の城内に召されることになり喇叭は高々と鳴り渡つて、またもや皇帝から厚い饗應を受けた。

さて玆に全く豫期しないことであつたが、一たん船に乘つた此の日の大英雄であるパリイ伯ロバートは、思ひがけなく君府の城内で喇叭が響きわたつたのを聞きつけて、またもや船からおりて君府の方に行かうと思ひたつた。ボーモンやゴドフレやがいくらそれをとゞめやうとしてもロバートは聞く耳を持たない。彼は何んだかも一度皇帝を愚弄して見たい樣な心持ちがしてならぬ。そして誰でもよい君府の武士を對手に一騷ぎやつて見たくて堪らない。

ロバートはブイヨンのゴドフレに對しては幾分か敬意らしいものを持つて居ると云ふので、ゴ

ドフレは飽くまでもロバートに其麼空想を實行させまいとあせつて見た。だが一向に効驗がないので今度はツーロン伯が一生懸命に引止めて見たが、やつぱり駄目、ロバートはぶらり〳〵とその大きな體格を磯の上にのさばり出してしまつた。ゴドフレは仕方が無いと云ふ顏付をして、いつたいあの男は、五百の從兵も引きつれないで、手ぶらで出かけて何をしやうと云ふのだらう。從兵など何處に忘れたか知らぬといふ顏付きだ。兵隊の糧食その他のことも氣にかゝらないだらうか。どうも大膽も大膽だが、かまはないにも程があるなあ。どうだあの恰好は、まるで悪戯小僧が悪戯を探しに出かけると云つた風ではないかね。」

ツーロン伯のレイモンドも之れに答へて、

「いつたいあの男は十字軍の眞の目的などはまるで念頭にない樣だね。何處の途中でもよい敵御參なれでやつつけては、我が國佛蘭西の森のまんなかの、槍の淑女の爲めなど云ひだすんだからやりきれない。とうとう剛情を徹して君府の方に行つちやつた。おや、あそこで誰か變なものと一所になつて連れだつて行く樣だが、いつたいあれは何者か知らむ。」

と云ふと、ゴドフレもその樣子を見て居たが、

「おかしいな。飾りたてた騎士の樣でもあるが、しかし騎士にしてはすこし體格が小さい樣だ。

ムウ、判つた。あれがそれロバートの心を得たと云ふ戀女房ぢやないか知らむ。それ例の武道にかけては凄腕の女さ。」

「フーム。そいつを連れて來たんだな。」

八

荒武者パリイ伯のロバートの戀女房は名をブレンヒルダと云つて、既に第一回の十字軍の際に馬を陣頭に進めて女騎士の名を轟かした女傑の一人である。隷女は東洋の板額よりも偉い。中世騎士のロマンチックな物語には必ずその名を織り込まねばならぬ代物だ。

そしてブレンヒルダは物凄いばかりの美人である。

彼女の處女の折に多くの異性に慕はれたが悉く輕蔑し去つてしまつた。その美貌は有名なもので「アスプラモントの姫君」と云へば誰知らぬものもなかつた。婚を求めて群りくる騎士は數が多く、彼女はそのうちで最も勇武な騎士を撰むで結婚すると云ふ意氣込みであつたから、その高慢は益々募つて行くばかりであつた。彼の女の父は以前に死に、たゞ母だけであつたが、母は極く淑やかな氣の優しい女であつたから、ブレンヒルダの云ふまゝに支配されて居るに過ぎなかつた。

ブレンヒルダの美に魅せられて日夜戀慕の情に燃えたつた數多の騎士達は互に戀敵の感を抱いて鎬を削つて居たが、最後に一つの提案が出た。それはアスプラモントの城外で一大ターナメントを催し、武術の試合を行つてその勝負によつて姫を手にいれると云ふのであつた。それで愈々勝つた勇士は大丈夫姫と結婚が出來ると思つたら、姫が更にそれ以上の試練を出したのには全く一驚を喫した。姫は自分自身で鎧冑をつけて、槍を脇ばさみ駿馬の背に跨つて、試合に勝つた勇者を對手に勝負を決せやうと出たのである。愈々姫と試合の出來る樣になつた若い血に燃えたつた騎士は、武術にかけては既に幾多の男性を負かしたのであるから、ましてや纖弱な身の女性を對手ならおやすいことと、莞爾とばかり微笑むで姫に向つたのであるが、結果はさうは行かなかつた。美しいブレヒルダを前に置いて、いざ一槍をと云ふ段になると、敵は自分の戀して居る女であるから、槍の穗先が鈍らないでは置かぬ。敵をねらへば狙ふほどその絶世の美に魅せられてしまつて、つい恍惚と見とれてしまつて隙を見せるものだから、機敏な姫の手練のためにたわいもなくやつつけられてしまふのであつた。かくして幾度の勇が士まるで希望の頂點から絶望の谷底に陷ち込むやうに沈欝な顏つきをしてすごすごとその場を退出するのであつたが、鷹てのことと太陽も漸く西に沈みかけやうとする頃名高い勇者パリイ伯のロバートが馬に鞭うつて驅けて來た

此の勇者がやつて來てはと、一同が思はず落膽の聲をあげたのであるが、ロバートは持前の大音聲を張りあげて、われは美人も領地も欲しくはない。一人の女騎士が多くの騎士を失望させつゝあると聞いたからには、そんな生意氣ひと拉ぎに拉ぎ吳れむと思つてやつて來た。さあこいとばかりにブレンヒルダに向つたのであるから、彼女はむつと自尊心を傷けられ、此の男、わが持つ絶世の美に一向魅せられ居らぬかとばかり、最も强い馬を擇んで、それに打ち乘つて、新手のロバートと勇ましく渡り合つたのであるが、さては姫が自尊心を傷られて慍つたので手が狂つたのか、それとも事實女の美に魅せられぬ騎士の腕が冴えきつて居たのか、或は姫の運命がいよいよ決する時機が到來したとでも云ふべきか、兎に角ロバートは難なく姫を馬上からひきずりおろし兜をもぎとり、地上に仆してしまつたから、今まで紅顏のしたゝる程に端々しかつた姫の頰の色は忽ち褪せてしまひ、明白に負けてしまつたのであつた。

ロバートはその場ですぐと、兼ねて大音聲で云つた通り、生意氣な姫を仆してしまへばそれでよしと、さつさと歸る筈であつたが、丁度その時姫の母が來て、仆れた姫の身體に何の傷も負はなかつたのを見て悅ぶと同時に此の騎士に對して、姫によき敎訓を與へよく虛榮心を破つて吳れたと感謝の意を表したのであつた。引きとめられることは、流石の騎士も心の奥底には嬉しく思

つたことで、われならずもほのぼのとする心持ちに、何時行かねばならぬと云ふ身でもなく、止められるまゝに止まつた。

ロバートはシヤレマン大帝の血族の一人でもあり、特に姫の眼に深くもとまつたのは、彼が當時の騎士氣質の花と云はれたノルマン武士であつた事だ。ロバートはアスブラモントの城内に既に十日も逗留したが、軈て姫とロバートはまだお互に純潔な身を以つて、かの「槍の淑女」と呼んで居る森のなかの聖マリアの堂に行つて、そこで結婚式を行はうと云ふ事になつた。森のなかの聖マリアの御堂の前では兼ねてから此の事を聞き知つた二人の騎士が待ち構えて居たのであつたが、逆に花嫁の方から果し狀をつきつけられたのには仰天してしまつた。花聟殿のロバートは角笛三度吹き鳴らして、わが「槍の淑女」の前で誰でも對手に勝負をしやう。勝つたものが此のブレンヒルダを取るべしと云つたものだから、今まで叶はぬ戀とばかり失望して居た多くの騎士達が殘らずやつて來てロバートと渡り合つた。もとよりロバートが常の如く勝ち續けてばかり居る。腕の冴えは騎士の禮儀とともに鮮やかなもので、ロバートと渡り合ふなら反例負けても氣持ちがよく、勝負に來た澤山の騎士達は何れも負けながらも滿足して歸つて行つたが、たゞ二人だけ、一人は腕を挫き、一人は頸骨を折られたために花嫁花婿に一方ならず氣の毒の感を覺えしめたに

過ぎなかつた。

ロバート伯が武者修業に燃えたつ心は結婚してから後も一向衰えない。否、それと正反對に何時の勝負にも花嫁を賭けて戰ふのが面白くてならず、花嫁御がまた婿殿にもまさる武術狂ときて居るから、二人揃つて武道の冒險が夢昧の間も忘られないと云ふ有樣、二人とも十字を懸けて、全く似合ひの夫婦とは此の事だと、見るもの悉くに舌を卷かせた。

伯夫人のブレンヒルダは年齢が二十六歳で天晴比類のない女丈夫振り、背も高く、容貌の美しさは云ふまでも無く、そのくろぐろと太陽に燒けた色澤までが崇嚴な位に美を添えて居る。

さて、皇帝が軍隊を先刻再び城内に呼びもどす樣に命令を下した時、戰斧隊のアキレス將軍はそつと皇帝に招かれて何か私語かれたのであつたが、軈て將軍は僅かばかりの幕僚とともに何處かへ行つてしまつた。海岸から君府の城まで行く往還には勿論陸續と軍隊が連つて居り、それを見物して居る群集も多く雜踏を極め、熱くるしく塵埃がそこらに立ち舞つて堪えられなかつた。

馬や從兵やを船にのこしてぶらりと上陸したロバートは美しい妻と從者一人とを連れたきりで君府の城の方へと歩いて行つたのであるが、どうも道が雜踏するのと塵埃がたつのが不愉快でならない。特に彼の妻はそれが堪えられなかつた。でどこか廻り道でもよいからもつと靜かな道は

ないかと思つて、その邊の森のなかを見ると、一つの小徑があつたから、是れは幸いだと思つてその方に足をすゝめた。森の徑に來ると氣がせいせいする程變つて來た。時々樹々の梢の上から敎會堂の尖塔や凉亭などが見え、處々に泉が湧いて銀の樣な水の玉が動いて居たりなどするので如何にもすがすがしい。森の茂みをとほして、君府城中で何やらさんざめいて居る愉快げな物音が響いて來る度に、ロバートの胸には騎士的な湧躍が動いて來るのであつた。

夕方の事であるから凉味が肌に心持ちがいい。斜陽をうけた熱帶的な珍奇な建築物の姿や、土地の眺めやを稱しながらロバート夫妻は進むで行つたが、不圖ブレンヒルダの眼には異樣なものが映つた。それは一人の老人が手に持つて居る羊皮紙の卷物を一心不亂に見て居る姿であつた。ロバート等が近づいて行つたのも一向氣がつかぬ位に心を奪はれてしまつて居る。何と云ふ深みのある冥想の姿だらう。凝乎と樹蔭に心を澄まして人生の諸相から永遠の眞理を擇び出さうとするかの如きその老人はいつたい何者であらうかと思つて、ロバートはずつと近よつて見た。すると此の老人は靜かに羊皮紙から顏をあげたが、極く親みの溢れた打ちとけた口調でロバート等に

「おや。若い衆たちか。」

と云ひながら、森のなかに道を踏み迷つたのではないか、それならば敎えて進ぜるがと云ふ意

味のことを云つた。

「これは御老人樣。拙者たちは異國から參つたもので、聖地の回復を夢にも忘れぬ騎士で御座ります。だが此のロバート及び戀女房のブレンヒルダには聖地へ行く途中でも、到るところ武勇の名を擧げねば收まらぬ性質が御座いまして、何がな命かけても末代まで名の殘る樣な勇名を馳せて見ねばなりませぬ。」

「すればそなたは平地に波瀾を起しても名譽の方が望ましいと云はるるかな。」と此の老人は答へた「生命だつて得たいが本當で、捨てたいと云ふのは虛言ではあるまいか」

「それはもとよりで御座ります。」

「そしてそちらの御婦人もやつぱり武道をお勵みかな。」

するとブレンヒルダは

「女性の身故に武藝を勵むのは相應はしくないとでも仰せられるので御座りますか。わたしは御老人樣の齡の半分の若い男子と鬪つても負ける樣なことはありませぬ。」

「いやこれは御免下され。さう柳眉をおたてになりましては此の老人は降參いたします。年寄と云ふものは弱いも弱いが、またよい口實にもなるもので、失禮の段は誰でもゆるして呉れるから

安心なものぢや。ところでそなた達が此の森に來てから探しあてたのが、わしと云ふ老人であつて見れば、何かお役に立つことでも教えてあげ度いと思ふが、いつたい御望は何んぢやな。」

と此の老人――實は君府朝廷の碩學鴻儒であるアゼラステス――は云つたのであるが、何も知らぬ騎士の眼にはただ優しいお爺さんとばかり映つて居るに過ぎなかつた。ロバートは、

「それは先刻も申しました通り、騎士が誓ひをたてた希望は」と云つて眼を空に向け、嚴かに十字を切りながら「たゞ勇士として青史に名を止めたい他何の望みもありませぬ。人と生れて名を擧げずば徒らな醉生夢死、拙者の祖父シャーレマンが若し一生あの不毛なサアのから拔け出すだけの決斷がつかなかつたら葡萄つくりとして終つたに過ぎなかつたでせうが、しかし祖父は生れながらの勇士でありましたから、あの樣に名を不朽に輝かすことが出來ました。」

「わしはそなた達の樣に武道に熱中した比類なき勇者が此の希臘に訪ねて來られた事を心から悅むで居る。ところで、そなた達のその熱心にもまして、わしにはまたわしの冒險があるのぢや。わしは長い間自然と云ふものを研究して來たが、だんだん自然に親しみつくして居るうち、此の現世の自然は何時しかその姿を搔き消してしまつて、此の世とは全く別な世界がわしの眼の前に開けて來た。その世界は幽界なのぢやが、わしは之れまで幽界のなかを、丁度そなた達が武道を

練りあるく樣に隈なく面白い冒險をしてまはつた。幽界探檢の面白味はまた云ふに云はれぬ醍醐味がある。此の探險で得たわしの澤山の經驗は、此の世の人間の如何にあせつても與り知ることの出來ない性質のもので、此の世の傳奇作者が如何に空想を逞しくて面白いロマンスを書くにしても、とてもわしの幽界探檢の面白味には及ばない。」

「御老人。もしそれが眞實の御話なら。」と云つてロバート伯は一寸考へて居たが、「あなたがお求めになるものは此の拙者かも知れませぬ。拙者も拙者の妻もまたあなたと云ふ珍しいお方に出くはした以上、もはや此の希臘では是れ以上痛快なものに出くはす樣なことはないから、こゝでゆつくりとあなたの神變不可思議な冒險の物語りを聞かせて下さりませ。」

と云つて、ロバートは老哲人の傍にどつかりと腰をおろすと、彼の淑女(レディ)のブレンヒルダも亦やはり老人に對して夫に劣らぬ程の興味をおぼえたと見え、茂つた樹のかげに腰をおろした。

ロバートは美しい妻を顧みながら、

「どうだ。ブレンヒルダ。本當に面白い人にぶつかつたものだ。われ等の武運を加護し給ふ天使は矢つ張りうまいところに導いて呉れたわい。おれはこの希臘につくと、どいつを見ても空威張り屋ばかりで、眞の武士の一擊よりも、やくざな皇帝の微笑ばかりを重んじて居ると云ふ腑拔け

かた、蹲に腰つてゐきらなかつたところだつたが、やつとの事で世のお爺さんに會つて聞くその悪いのがなほつた。さあ、ブレンヒルダ、ぢつと心を靜めて、此のお爺さんの云はるゝ幽界の物語りを承らうではないか。」

かうして勇士と女傑とが靜かに聞かうとする態度を見て老哲人は、

「わしは之れまで隨分長い間生き伸びて碌なこともしなかつたが、かうして世にも珍らしい武道の熱心者達にわしの物語が聞いて貰へると思へば、今までの損をとりかへした樣な心持ちがする今わしがまつ先きに物語らうと思ふのは此の希臘の國の一つの面白い奇譚ぢやが、極簡に話さう。

玆から遠い〻〻希臘の群島のはるかの彼方に、嵐や浪やに洗はれて巖の形がひどく險阻になりまるで荒海を呑むやうにおつかぶさつて峙つて居る島がある。此の島は名をズリチウムと云ひ、その邊の海は絶えず荒れて怖しい渦ばかり卷いて居り靜かな浪と云ふものは一つも無い。此の島には天産は豐富にあるが、住民は極尠く、磯近いところにばかり棲むで居る。此の島の中央はおそろしく山々の重疊したところであるが、その山奥に迚り歩むで行くと、大きな城ではあるがもう古くから癈れて、苔の青く蒸した尖塔が見える。玆はその島の王者の城で、そのなかに美しい姫君が何千年か何萬等か魔術に囚はれて居るのぢや。

ところで或る時聖地巡禮に來た一人の豪膽な騎士が、その途中で此の話を聞いて、さても光りの本源とも云ふべき聖地の近くにかゝる魔術が行はれ居るとは嘆はしきことの極みだと奮激して此の魔術に囚はれた姫君を救ひ出さうと決心を固めた。そこで此の島の二人の古老が案内役となつて、騎士を此の怪奇な古城の近くまで連れて行つたのぢや、古老は怖れてその古城から矢のとゞく距離までは近よらうともせず、豪膽な騎士は古老と分れて單身で、たゞ味方とするは天の神のみとたのみながら進むで行つた。城壁まで達して見るにその宏大な構えは、如何にも此の城を建築した王者の豪奢な心を偲ばせるもの、城内には青銅の嚴めしい扉がしまつて居たが、騎士が近づくにしたがつて、恰も希望と歡樂との手で押し開くかと思はれるほど輕やかにその鏽びついた扉がひとりでに開いたのは不思議と云ふも愚かなこと、樓閣の上や尖塔のあたりに何やら心地よげな空音が動いて、幻華があたりに奇しく輝く心持に、さながらその騎士の到來が待ちに待たれて居たと云ふ樣ぢやつたさうだ。

不思議と思ひながらも怖れる心の微塵だもないその騎士はその城門を潜づて行つて見ると、ゴシツク理想の最高の美は輝くばかりに漲つて、ことにその可哀相な姫君の囚はれて居る館は物凄いばかりに贅澤な裝飾が施してある。立つて居る番兵は東洋風な鎧兜で身をかためて、近づくも

のあらば、直ちに矢を番へて放さんばかりの有様だが、たゞ寂々として物も言はねば動きもせず
その豪膽なフランクの騎士が跫音荒らく進むで行つても、僧侶か穩者かの來た程にも思つて居な
いらしい。これ等の番兵は無論生きて居る番兵には違ひなからうが、死んだもの同然で、此の物
語を本當とすれば此等は何千年か何萬年か雨にも風にもたゞそのまゝに立つて、さながら砂漠に
おけるイスラエル人の如くにその靴も腐らず、その衣も新しいまゝに寂然として居る。即ち「時」
が彼等を離れて「變化」が滅びた姿ぢや。」と云つて老哲人は、今度此の魔術が行はれた因緣話に就
いて語りだした。

「此の怖しい魔術を施したものは、もとゾロアススル派の宗旨の奥を究めた聖者のひとりだが、
此の聖者が此の島の城にやつて來て始めて美しい姫君に遭ふた時、姫君は虚榮の心のあらむ限り
をつくして歡迎し、夢の樣な心持の幾日か續く内、如何な嚴格の聖者も美しい眉目の艶に心が呆
けると云ふことはあるもの、賢人が美女に溺れる例は昔もあつたと見えて、その聖者は齡を云へ
ば古稀の程であるにもかゝはらず、淺猿しくも戀の奴となつたとのことぢや。年甲斐もない戀と
云ふ事ほど滑稽なことは無いが、姫君はじめ城内の若い女官たちは、何がな此の老聖者を茶化し
て物笑の種子にして見たくてならず思ひ居るところに、此の老聖者はその壺にはまつて、姫君や

女官達が踊るのを見たいと望むだ。聖者は魔術に長けて居たから、山獄を動かして見せることも
出來たが、自分の老ひ姿を若やかにすることだけは出來ず、老の眼尻さげて皺顔うつとりと美女
の踊りに見惚れた有樣があまりにおかしく、女官達はお互に眼くばせをしあつては袖のかげにく
すくすと笑つた。

こんな惡戲をして、侮辱の底におちた老聖者を女官達は眼くばせしながら嘲るうちに、姫君も
興じすぎて、ついうつかりと、その眼くばせを老聖者に見ぬかれてしまつた。戀が憎みと急變す
るほど世に悲慘なものは無い。聖者の胸に一時に悔恨が湧きたつとともに、かくまでも愚弄され
たかと姫に對する憎さが胸に渦を卷いた。

流石に聖者だけあつて、心の苦しみは胸に抑え得て、此の悲慘な絶望を顏の色にも現しはしな
かつたが、皺の顏に集まる鬱悒な陰い影は何となく怖しい嵐のせまる如きものに見えた。姫もは
つと心配になりだし、ほんの一時の惡戲心に過ぎないことが、こんなに聖者を惱ますかと思へば
氣もはら〳〵して、氣の毒でならず、すぐと聖者のところに行つて、もはや寢所に行かうとする
ところであつたから、ではおやすみなさいましと親切な言葉をかけたが、その時愼悲の心の老聖
者は、

「姫君。おやすみなさいましとよく云ふて呉れられた。ぢやが朝となつておはやうと云へるものこの城内に幾人かあらうに。」

と云つた。その聲はほそく、別に意にも止まらなかつたが、たゞ聖者の氣質をよく知つて居るほんの二三名だけは、すぐとその夜に此のズリチウムの島を遁れ出で、それ等の人によつて此の城が千古の不思議な魔術に封じこまれた事が世間に知られる樣になつた。死の樣な眠りがすぐと城内に落ちて、來てそのまゝの睡魔の金縛りは以來ほどけないで居る。島の住民は大抵は他の島に移住してしまつたが、僅かに殘つたものは海岸近くに棲むで居て、決して此の古城には近よらうとしない。たゞ何んとなく時さへ來れば剛勇な騎士が訪ねて來て必ず此の呪縛をほどいて呉れるものとばかり思つて居る。

それで、その時此の古城にはいつた騎士は名をアルタバンと云ふ大膽なものであるが、その力ある足音は、何となく今度こそ魔術の呪縛をほどく好機會であるかの樣に思はれた。騎士の右は宮殿と天主閣とであるが、左側は何となく官女等の棲むらしい華洒な館である。その館の入口には、椅子に凭りかゝつた二人の番人が、睡魔と死との間を漠搔いて居る樣な苦い表情をして、近寄り來るものを滅亡に導くと云つた恰好だ。だがアルタバンは怖れはせぬ。づかづかと進んで行

くと、此の入口の戸も前の城門の大扉の樣にひとりでに開いた。その中の番兵小屋には大勢の兵卒が身體は、死んで居るかの樣に動かないが、開いた眼に瞳を動かず挫えて、さながら亡靈の樣に、入り來るものを咎めだてすると思はれた。だがアルタバンは怖れはせぬ。館の奥深く進むで行くと軈て多くの美しい顏をした女官達がその夜の化粧麗しい踊りの姿のまゝで呪縛されて居るのが見えた。そのなかには隨分と綺麗の美人も居て、アルタバンの樣な若い騎士の心を迷はすのもあつたが、騎士の心は一圖に絶世の美人である姫君の呪縛を解いて自由の身にすることにある。また此の目的が達せられない以上一歩たりとも緩めるものでは無い。彼は美しい艶な女官達には眼も呉れずに尙ほ奥へと行くと、一つの小さな象牙の扉がある。そのなかこそ美しい姫の寢室であると思ふと、騎士もさすがに一寸ためらつて心に處女の樣な羞さをおぼえたが、軈て象牙の扉は靜かに開いて、なかにはいると、はや春きかけた夏の光りは、やはらかに寢室のなかに滿ちわたり、室内の調度ことごとく夢の如く、埋立く重ねた夜の羅布がほんのりとして淡雲の樣に見え、その贅澤な寢臺の上に、さながら淡雪が輕く置かれた樣に、十五歳ばかりの花の樣なズリチウムの姫君が、丁度人魚かなにかのやうに……」

「お爺さん。おはなしを邪魔する樣ですが。」と突如とブレンヒルダは云ひだした。「その寢室の有

様がどんな夢の様に美しかつたかは、わたしにはよく想像がつきます。ですがどんなに美しうても、もう私たちには用もないこと、さあ、はやくどうなつたかを話して下さい。」

「御免なされ。奥さん。」と老哲人「實はわしの話では鼓が一番得意で面白いところなのぢやが、それでは一つ省くとしまするが、實は一番惜しい處ぢやて。」

ロバートは

「ブレンヒルダ。こん麼に面白かつた話を、そんなに鍛蛇に邪魔すると云ふ事があるかい。折角の興を殺ぐとは殘念ぢや。話す方の人はどんなにがつかりするか知れないぞ。」

「だつてお爺さんの寢室の話しやうときたら、隨分くどくなつて來たんですもの。」

「ブレンヒルダ。おれはお前を始めて叱るが、そこが女の……」

「ロバート。わたしも始めて叱りますが、騎士らしくもなく淑女の心に逆ひなさるとは……」

そこで老哲人は、

「いや。これこれは。そなた達は隨分とおかしな痴話喧嘩をなさる。奥様は御亭主の見もしないお姫様に對して嫉妬をして御座る様ぢやが、まあ心配は無用で、姫は二度と此の世に生れて來ることもなからうぢやないか。」

「さあ、どうぞそのあとを」とロバート伯は續きを催促した。「若しそのアルタバンと云ふ勇士が呪縛を解き得なかつたにすれば、このロバートが必ず槍の淑に誓をかけて……」

するとブレンヒルダが、

「あなたはまた御忘れになりましたか。あなたの誓は聖地の回復で、その途中では何の誓もたてゝはならない筈ではありませんか。」

と云ふ。

「無論さうぢや。」とロバートは妻の口出しを半分滿足に思ひながら、「もとより聖地回復の誓は夢昧の間も忘れはしない。」と云ふのを老哲人が引きとつて、

「ぢやが、ズリチウムの島は、聖地への近道で別段に手間どる程ではないのだが……」

と云つた。ブレンヒルダはもどかしげに、

「さあお爺さん。はやくさつさとお終ひまで話して聞かせて下さい。それからあとで何うするかの決心は致しませう。わたしどもノルマンの淑女は古ゲルマンの血が通つて居ります以上、戰の前にあづかる權利は主張いたします。もとよりわたし達が戰はねば戰の出來ないことも知れきつた事であります。」

ときめつけた。此の高飛車な調子が、老哲人に何んだか厄介だと云ふ感じを與へた。老哲人は心のうちで女がついて居ては此のノルマンの騎士も思ふやうには行き難いかと嘆じた。そして以前よりは低い聲で續きを、極く簡單に話し出した。

「で、騎士のアルタバンは眠れる姫を前にして、之れはどんな樣にして姫を醒ますのが一番よいかと考へたあげく、わしは別に惡いとは判斷せぬが、此の騎士はその姫の唇に接吻するのが最も適當だと考へたのぢや。

無論それは純無垢な無邪氣な心持ちからではあつたが。」と老哲人はすこし聲を高めて「結果は怖しい事になつた。ほんのりとした夢の樣な夏の夕べの靜けさが、その突差に黑雲亂れて見るかきり暗澹となり、呼吸もつまる程に硫黃の匂がくすぶり出すと思ふと、その寂室の華やかな窓掛も、贅澤な調度も、壁も一切が荒い巌石と變化し、倏ち野獸の棲む如き洞穴になるかと思ふと、アルタバンが接吻した姫の美しい花の蕾の樣だつた唇が、見る見る大きく裂けて、火焰を吐くかと思はれるほどな巨大な腮となつた物凄さ、姫の全身が憤怒の龍の姿となつて、翼をひろげて立ちあがらうとするその一瞬間の躊躇、もしその時アルタバンに三度姫に對して禮儀を正すだけの沈勇があればアルタバンはその美しい姫のあらゆる美と富とをわがものとし得たらうに、その機

は空しく過ぎてしまひ、龍は翼をのして絶望の聲を悲しげに叫んで暗雲のなかに逃げてしまつたと云ふことぢや。」

これで一通りの物語りは終つたが、アゼラステスはそのあとで次の樣な言葉をつけ足した。

「その姫君の魔術は今も尙ほ解けないで居る。ズリチウムの島はかうしてその後五六人勇士が行つて冒險をやつて見たのであるが、その眠つて居る姫君に近づくことが出來ないのか、それともまた龍の姿があまり怖し過ぎるのか、魔術はまだ解かれないまゝで居る。わしはよくその島へ行く道を知つて居るが、そなたがよしと云ふならば、明日にもその古城に向けて船出することが出來る。」

ブレンヒルダは之れを聞いて非常な心配をした。もし下手にとゞめやうとでも試みるなら、夫は必ず此の魔術にかゝつた美人を救ひに行くと否應なしの決心をするに決まつて居る。で彼女はたゞ呆然と羞しさと憶した氣持との間で、日頃の勇往不退轉な性質にも似ず、ためらうばかり、夫はどんな樣な返答をするだらうかと氣をはらはらさせて、その顏色を覗ふのであつた。

ロバートは妻の手を把りながら、

「どうだ。ブレンヒルダ。騎士の革帶を腰に卷いて居るほどのものとして、お前の夫に名譽と勇

氣とほど尊いものは無い。お前も世の常の女ならぬ覺悟は日頃からあらう。お前がかの樂しく美しきセースの河岸を捨て此の不健康な異鄕に來たのは何の爲め――またお前が死よりも恥を輕しとするは何の爲め――何の爲めぞ――此のパリイ伯のロバートは持つに相應しい妻を持ちたいぞお前はしばらく愛を忍べよ。勇士一度び妻を犧牲にしても、武名を樹てんと志せば妻は悅んでその壯擧を讃せねばならぬ。」

哀れなブレンヒルダ！胸は寸裂斷々の想ひに苦しく、日頃天晴れの女丈夫であつた筈の毅然とした態度を、わずかに崩さず持ちこたへやうとしたが、その衿持も傲慢も今は何處へやら、夫の胸にその身を投げかけ、兩手を夫の頸に卷きながら、さながら村娘のやうに悲み嘆いた。まことに戀の心は此の刹那ばかりその純な眞實が現れた事は無い。夫のロバートは妻の日頃とは全く正反對の此の痛切な愛の悶えに、胸を深く刳られたのであつたが、他人の前であるから心いつぱい慰めてやることも出來ず、自分が試みむとする武勇の決心が高いだけに、それだけまた純眞な愛の悶えを、此の大膽不敵なわが妻に與へたかと思ふと犇と悶えを感ぜずには居られなかつた。

「ブレンヒルダ。ブレンヒルダ。おれはお前の爲めにもおれの爲めにも斯歷に御前を嘆かせやうとも思はなかつた。だが此の餘所のお爺さんにお前は斷じて常の女の涙と思はせてはならないぞ

お前が邪魔になつて、おれがズリチウムの姫を援け出すことが出來なかつたとなれば騎士の末代の恥だ。さあさあはやくお爺さんによくその嘆きのことを云ひわけして呉れ。」

と云はれても、ブレンヒルダの嘆きは急に自分で制することが出來ず、あれ程の女丈夫がその渾身の力を出して涙を抑えやうと、しばらくの間は身藻掻いたが、軈て身内の苦みを流石にぐつと堪え忍むで、天の身體から自分を引き離し、まだ掌は夫のと繫ぎながらも、涙に濡れた顏に微笑をつくつて老哲人の方に振り向き、尊敬の心を示すと同時に、その忠告に從ひかねた心持ちを

「お爺さん。わたしが邪魔をして、世界の勇士中の勇士がお爺さんの御すゝめになりました武道の譽れを樹てさせないのを、どうぞ卑怯とは思つて下さいますな。眞實を申しますれば、私達の故鄕の國では騎士の道と宗教とが全く一致して居りまして、騎士はたゞ一人の女を愛しそれを淑女として、妻となすことがゆるされて居るのでありまして、妻としてのわたしは、古城の處女を夫に救はせる危險を認めることが出來ませぬ。まして接吻によつて魔術が解かれると聞いては私達、愛の騎士、愛の淑女としての道が立ちませぬ。愛と武士道と何れに行くか、生れて苦しむ此の悶え……」

手練手管の權化である老哲人も流石にブレンヒルダの此の心根には動かされずには濟まなかつ

たと見え、「愛の騎士、愛の淑女――わしにはよくよく判りました。何もわしのお焉めした道が騎士の唯一の道とは限りませぬ。古城の姫君の狀態は別にあれ以上に惡くなつたと云ふのでもあるまいし、運命の時さへ來るならば、必ず勇士が現れて魔術を解くことでありませう。」と云つたがブレンヒルダ伯夫人は悲しげに淋しく頭を振りながら、

「痛ましい古城の姫君の身の上を思ふと、姫をお救い申す世界きつての大きな力をわたしと云ふ此の身が、邪魔しましたので、此の世に生きて居られぬ程恥しくもまたお氣の毒にも思はれてなりませぬ。わたしは嫉妬――嫉妬は最も卑しいことと知りながら、わたしは勇ましい夫が勇ましい働きをしやうとする決心にそむいて深い悔恨を身におぼえずには居られませぬ。」

と云ひながら不安さうに夫ロバートの顏色を見るのであつた。そして自分の欲しない抗議をやむなくした心を察して吳れの情がありありと表れ出たのであつたが、その心をすつかり掬むだロバートは「ブレンヒルダ。おれは古城の姫は救ひに行かぬことに決心して居る」ときつぱりと云つた。

すると ブレンヒルダは凛然として、

「ならば、此のブレンヒルダが自分で行つて古城の姫君を救ひだしませう。此のブレンヒルダは

女性の身ながら、龍が怖しくも、魔術が怖しくもない勇士ですが……」

「いや。あなたは。」とアゼラステスは云ふ「あなたは駄目ぢや。古城の姫君はたゞ異性の接吻によつて魔術が解かれるのであつて、友情ではどうすることも出來ませぬ。」

「それも道理で御座ります。」とブレンヒルダは淋しく微笑むだ。それでこそわたしがまた夫ロバートを拒むだわけですから。」

ロバートは此の時姿勢を正して、

「お爺さんとばかり呼むでたゞ親しさにお慣れいたしましたが、さぞや此の國の尊き長老におはすあなたから、かく樂しく一時を送らせいたゞき面白い御話しを受けまして、よし拙者の武勇は試し得ずとするも、心の感激は此の上もありませぬ。これは粗末な品ですが何卒拙者の感謝のしるしに御受納くだされ、佛蘭西の騎士は富むでは居らぬが、譽れは豐かで御座ります。」

と云ふと老人も嚴かに、

「是れより尊き品がまたと世にありませうか。かゝる勇士と淑女との手から贈られた此の尊き紀念はわしの身にとつては千倍の價値あるもの、御辭退も致さず。之れは眞珠の鎖に透してわしの頸にかけ、華やかな騎士や淑女達やの宴席に出るたびに、之れは名高い佛蘭西の勇者ロバート殿

及びその比類なき勇婦から贈られたものと自慢して見せることに致しませう。」

と云ふと、思はず名前を云はれて伯は夫人と顏見はせながら、夫人の手から純金の指環をぬいて、此の老哲に手わたしたのであつた。老哲人は更に、

「わしはもひとつ、つまらぬ願ひがあるのぢやが聞いて下さらぬか。わしは玆から君府の城門に行くまでの途の中道に、ほんの小さなわしの涼亭、――いやほんの隱居小屋に過ぎいながよくそこに此の帝國では重きをなして居る友達を招くことにして居るのがありますぢやが、今日も何かの用意をして居ることでありませう。もしあなたの樣な世界の勇士をお招きすることが出來たらわしの涼亭は不朽の光榮を增すわけですが……」と云ふと、ロバートは愛妻を顧みながら、

「どうぢや。ブレンヒルダ。此の尊き御老人がわれ等をお招きになるとは、光榮至極ではないか之れを拒むは騎士道に背くと思はれるが。」

「すこし晩くなつた樣にも思ひます。ですが夜をとほすは始めからその心算で來ました以上、御老人樣の御言葉のまゝになりますことが、ことにわたしが御老人樣のおすゝめを邪魔いたしました以上、是非とも御涼亭のお招きを受けるが禮儀と思ひます。」

老哲人は

「それに道も近くすぐそこであるから、奥樣が別に馬をとの御心さへなければ、揃つて歩いて行く方が樂しいかと思ひますが。」

ブレンヒルダは、

いえ。私の爲めなら馬の御心配は要りませぬ。侍女のアガタがわたしの必要なことは一切して呉れますし、ロバートはまたこれほど手道具のすくない手ぶらな騎士は他にはありませぬ。」

と云ふので、やがて老哲人アゼラステスは愈々幽邃に繁つた深い森の奥に騎士達と連れだつて行つた。夕暮るゝ風が心持ちよく涼しくすがすがしい。

九

ロバートと其の妻のブレンヒルダとは御世辭たつぷりの老哲學者アゼラステスに導かれて行つた。老哲學者の話振りを聞いて居るとまるで古文學の雰圍氣にある樣に面白くロバート伯夫婦は愈々傳奇的な興奮を身におぼえるばかりであつた。

導かれて行く道は茂つた森の暗みのなかに吸ひ込まれるかと思はれる程な幽寂なところがあれば、また突然にプロポンチスの海の磯に來たりした。かと思ふとすぐに田舍路になる。眺めの變

化がいろいろで、如何にも巡禮者の氣分に相應はしい。海の岸では人魚の群れの樣に濱の小供達が踊つて居り、牧場では牧羊者が角笛を吹いたり、タンバリンを叩いたり、なんだか古い希臘の彫刻にある顏と同じ顏をして居る。老人達の姿を見ると長い衣を着て居る具合から、何となく閑雅なものごし、頭の上の仰山な冠りものなども、昔の聖者や豫言者やの樣な感じがする。

だが此の時代となつてはもう此の鄕國の希臘の地においてさへ純粹の希臘民族は珍しいものになつて居る。いろいろな雜人種の血を雜ぜえてしまつて、昔のペリクレス時代の樣な生氣が無いのは何となく、此の夕陽の寂さに照されて物の憐れを覺えさしめる樣なものが無いでも無い。

ブロポンチスの灣の一番奥まつた處は岩が多いが、その岩を一つ越すと稍廣い平たい砂濱があつて、それが四方から森に圍まれて居る樣な位置になつて居る。そこへ異敎徒のスキジア人の一群が、妙な形の神樣を曳き出してお祭騷ぎをやつて居た。彼等の偶像であらう。鼻の平べつたいのに鼻の腔を大きく擴げた有樣はまるでそこから腦髓が見えさうな恰好で、顏は長さよりも幅が張つて居る。その横張つた顏の兩極端にどんよりした愚鈍な眼玉が喰附けてあつて、全體の有樣が倭人の樣に無ざまで釣合ひがとれておらぬ。それにまた馬鹿に筋骨の逞しい、さながら力量の權化である樣な手と足とが喰つつけてある。異敎徒のスキジア人達は此の怪像をかつぎあげてお

祭騷ぎをやりながら、或る武道の練習をやつて居た。丁度其處にロバート伯等が行きかかつたのであつた。彼等スキシア人のやつて居るのは大かた投槍の練習であつたらう。長い棒の樣なものを頻りと狙ひを定めては投げるのであつたが、其の力は餘程籠もつて居るものと見え、その棒にあたつたものは馬でも人でも仆れた。スキシア人達は伯夫妻の姿を非常に物珍しげに見つめた。特に伯夫人のブレンヒルダの美しい容貌を臆面もなく指してつくづくと見惚れて居たのには、流石の女丈夫も嫌な氣がしたと見え夫の伯に、

「わたしは怕しいとは感じはしないし、怕れると云ふことを知りもしないのですが、嫌なと云ふことが怕れの一つなら、此の變なスキシア人は嫌でたまりません。早く行きませう。」

と私語いたのであつた。

スキシヤ人はまた一向頓着なくつけつけとロバートに向つて、

「よう。こら。西の歐羅巴から來た騎士だな。お前さんの妻君だか情婦だか知らねえが、女人の身を這麼場所に引つぱつて來るとは罪が深いぞ。玆は女人禁制だ。はやく何處かへ引つぱつて行け！　だが隨分と此の女あ別嬪だぞ。お前さんも一つたん喰付いた以上容易なこつちや放すまいつて。」

と云つたのでロバートは、

「無禮至極な異敎人め等。佛蘭西の貴族に對して言語同斷だ。」

と云つた。

老哲人アゼラステスはこれは大變だとばかり心配して、例の上手な口調でもつてスキシア人のところに行つて、十字軍の騎士に對しては飽くまでも叮嚀にせねばならぬと云ふことが皇帝の勅令に出て居ることを注意したのであつたが、半野蠻のスキシアの一首領らしいものが、手に一二本の投槍を持つてぶるぶる振はしながら出て來た。その投げ槍の先きには鋭い鋼鐵と血にぬれた鷲の羽とがついて居る。

「何んだと。老耄れ奴。そん麼事は百も承知だ。此の血に染め拔いた鷲の羽に誓つて云ふが、皇帝陛下は十字軍の騎士が從順であれば叮嚀にし給ふのぢや。何處の馬の骨だかわからない騎士風情の機嫌を伺ふ必要は爪の垢ほども無いのぢや。」

「默れ。トクサチス。」と老哲人は一喝した。「陛下の勅令に背向くか！」

「默れ老耄。」とトクサチス「默らなきやその儘では置かぬぞ。老耄れの癖に厄介なことばかり云ひ出して、五月蠅い。」

と云ひながら、トクサチスはぐつと手をのばしてブレンヒルダの面紗を剝ぎとらうとした。その突差女騎士のブレンヒルダは瞬く隙も見せず身をかはし劍を拔いて對手を突き刺すと即座にトクサチスは殺されてしまつた。その間一髮を入れず、ロバートはトクサチスの騎つて居た馬に飛び來りながら、大聲をあげて、

「シヤレマンの子ロバートは玆にある。」

と云ふがはやいか、馬をスキシア人の群れのなかに乘りいれて、馬具につけてあつた巨きな戰斧を振り翳し、見る見る七八名を殺してしまつた。その物凄い勢にスキシア人達は全く辟易してしまつて逃げまはつてばかり居る。その有樣を見ながらブレンヒルダは老哲人に、

「ほんとに醜い奴等ぢやありませんか。あんなものの血で、尊い騎士の手を汚すのは全く恥辱で御座います。あんな奴等はあれで武道の練習をやつて居る心算なのでせうか。あの投槍をするところを見ましたのに、みんな背を狙つてばかり居るぢやありませんか。あれは逃げ出す敵を殺す時ですね。向つつて居る敵を殺す練習はしないぢやありませんか。」

と云ふと老哲人は、

「いや。あれはあゝ云ふ風習です。別に卑怯と云ふわけでもありますまい。陛下の前で練習をす

る時も矢張りあゝするのですが、今殺されたトクサチスなども、槍を投げる時は、すつかり背を敵に見せる様な身體つきになるのです。眞面目な騎士で驅けながら向つて來る敵に對しては、大矢で敵の胸を射ることになつて居ります。」

丁度此の時ロバート伯も敵を追ひ散して歸つて來て沈着な態度で、

「どうもこん麼やくざなものは武士と云へません。眞實の勇氣と云ふものが、藥にしたくも無いんだから。」

と云つた。老哲人は、

「はやくわしの凉亭に急ぎませう。逃げたのがまた大勢集つて來ると五月蠅う御座いますから。」

と云ふので、ロバートもその言葉に從つて歩きだしながら、

「あんなやくざな軍隊は西歐には決して見られませんね。拙者がもし十字軍で生き殘つて聖地から歸つて來る樣なことかあつたら、先づ第一に希臘の皇帝に會つて、どうしてあんな無禮至極な大道で淑女を罵る樣な軍隊を養つて置かねばならぬかと問ふて見やう。そして此の希臘にも立派な騎士道を樹てる樣にせねばならぬから、ひとつその爲に骨を折りませう。」

「それは大さう御結構のことで……」

と、老哲人は巧に話題を他に轉じて、道の案内の方を急いだのであつた。行くに從つて景色が愈々よくなつて來た。ロバートの樣な外人の眼には絶景と云ふ樣な眺望が展開して來た。氣持のよい清らかな水の流れが、森の蔭から出て、凉しい響をたてながら海にはいる。そこには奇絶な巨巖が峙つて居て、此の巖をめぐつて流れて行くなら、水は靜かであらうが、あだかも迂回が面倒で、巖を越すとでも云つた有樣で水は勢のよい響とともに奔走るのであつた。巨巖は樹木がなく、たゞ水が洗ふまゝにまかせて居るが、それに連る徑には濃ゆく翠りの篠懸の樹や胡桃樹や糸彩やその他熱帶性の樹木が蓊然と生ひ茂つて居る。瀧をおとすことは熱帶では特に心持ちのよいものであつて、いろいろな技巧が施されて居る。が玆はまつたく自然のまゝの瀧であつて見るからに爽かだ。此の場所は太古の埃及信仰の殿堂の跡らしく、多神教中の最大の女神であつたシビルの祠があつた跡でもあらう。その型式が隋圓式の祭壇のあとでそれと知られる。その跡をそのまゝに此の數奇な老哲人アゼラステスが自分の凉亭として、當時の多くのエピキュリアン哲學者達をあつめて閑談に耽るところとしたのであつた。建築は極くあつさりとしたもので、風どほしがよく、非常に幻想味のあるものにしてある。その建築が、近づくに從つて森の梢の間から見えだした時は、なんとなく夢の國にでも訪れて行つた樣な心持ちがした。

氣持のよい勾配で、茂つた草に半分かくれた道を登りつめると大理石の石段がある。老哲人は先に立つて案内しながら、その石段をのぼつて行きつまると、丁度立闕の前のところに柔かな天鵞絨の様な芝生があつて、例の瀧になる流れに沿ふてその家が建つて居るのであつた。

十

老哲人アゼラステスが會圖をすると例の黒人奴隷のダイオゼネスが凉亭の扉を開いた。無論此の奇體な恰好をした黒奴隷の姿が伯夫妻の好奇の眼をひかないでは置かぬ。するとそれをすばやく見てとつた老哲人が、また此の黒奴隷を種子に、自分の物識り振りを發揮しないでは置かなかつた。

「此の可哀相な黒妓隷はハム族のものですよ。それ、あの聖書にある箱船のノアの不幸息子のハムの子孫ですよ。ハムは兩親の言ふ事に耳を傾けなかつた罪で阿弗利加の沙漠に迫ひやられその子孫は永久に義務を守る人々の奴隷となる様に運命をさだめられてしまつたのです。」

騎士夫妻は斯うした老哲人の言葉を別に疑ふ心も起さず不思議相に黒奴隷ダイオゼネスの振舞に眼をとめたのであつた。老哲人はなほ得意になりながら、

「斯うしてわしの様に齢をとつてから奴隷を使用して見ますと、成る程之れも人道の面白味かと領かれる節もあります。奴隷と云ふ事は大抵な場合人間の罪悪の一つなんですが、年が寄つて來て手足が自由でなくなれば、どうしても他人に水を汲むだり薪を搬むだりしてもらはねばならぬから、眞實奴隷が有難くなり、奴隷の存在に對して感謝する様になります。奴隷を使ふことが、神の攝理を讀むことになりますから、ほんとに人道と云ふものは妙味なものですよ。」

黒んぼと云ふものを始めて見たブレンヒルダは

「まあ。こん麼不幸な民族が他にも澤山あるでせうか。わたしは黒んぼの事は是れまで聞いて居りましたが、仙女や幽靈の様なもので本當にあるものだとは思ひませんでした。」

すると老哲人は尙ほ勿體振つた口調で、

「さう云へば世界中の民族はみんな奴隷として此の世に生れて來た様なものです、たゞある民族は幸福な氣持ちで奴隷になつて居るしある民族は悲慘な奴隷になつて居るだけの事です。一番悪い性質のものは悪い主人や暴君やに奴隷になつて酷く虐げられますが、すこしその道德性の善いものになると、よい主人に使はれて小供同様に可愛がられる。ずつとよい部類になると陛下の奴隷卽ち重臣にもなつて非常な榮達もするし、さまざまなよい地位もあたへられるのですが、玆に

最も擇ばれた少數のものには殆ど奴隷と云ふ氣分のない哲學と云ふ館が與へられ、その主人即ち眞が與へる智叡の輝によつて眞の幸福が棲む世界を望み見ることが出來るのですよ。」

「お話はよく判つた樣な氣持ちが致します。わたし等騎士も立派な奴隷だと思ふ樣になりました。」

「そしてもつとよい奴隷になることが人道です。」と答へながら老哲人は奴隷の方に振り向いて、

「ダイオゼネス！お客樣が參られたのだが、何かよい御馳走はないか。」

かう云ひながら、老哲人は尙ほ奥の方へと案内をして行つた。奥の部屋には東洋的な胡莚で疊むだ椅子や座蒲團やが置いてあつて極めて原始的な素朴な感じがする。だがすぐとその隣の扉を開くと、之れはまた正反對に極めて美々しく裝飾をほどこした贅澤な廣い一室があつた。

その室に掛けてある絹は何れも麥藁色の高價な波斯の織物で、緣を縫つた模樣は簡單だがしかも怪奇な色彩のけばけばしいものであつた。天井は一面に亞剌比亞式の唐草模樣で、四隅にはそれぞれ彫刻物を置く可き龕が出來て居り、その中には當代の名匠の手になつた制作が飾つてある。一つの隅に置かれて居るのは自分の纏つて居る服裝が粗末なので、おづおづ差しげに退きかけて居るが、しかも手にした牧笛の冴えを合奏のなかに加へて貰ひたいと云つた顏付の牧童であるし

また他の一隅には希臘の三美神の樣に肉體の均勢のとれた美しい三人の乙女が、今にも奏樂が始まらば、輕い足どりで踊りださうとして居る風情の彫刻である。美いことはこの上なく美しいが這麼老哲人の思索の部屋に置くものとしてはすこし艶すぎる。

老哲人は是等の彫刻が客の眼にとまる樣に心のうちで思ひながら、

「かう云ふ彫刻は希臘藝術の最高潮に出來たものですよ。此の地の女神を讃美する爲めに水の精が踊らうとして居るところださうですが、相當に此の藝術品を鑑賞る側の人は、そんな由來よりも此の彫刻に現れて居る動作ですな。そしてまた柔軟味ですよ。よくも大理石に這麼に柔みを浮べたものですなあ。」

それからその部屋の壁にはいろ〳〵な動物の繪が描いてあつた。老哲人は特にその巨象の繪に客の注意を呼びよせて、象に關するいろいろな說明をすると、伯夫妻は物珍しく熱心に耳を傾けたのであつた。

森の彼方から何やら音樂の樣な樂しい響がかすかに傳つて來た。瀧のひびきにその微かな音樂はまぎれ勝ちであつたが、しかも尙ほ手にとる樣に聞こえて來るのであつた。それを聞きながら老哲人は、

「あれは岐度わしの友人達が此の凉亭に遊びに來るのですよ。來ればまた屹度面白いことが始まりませう。何れにしても人生は神が與へたものを最もよく娛むと云ふ事にあります。」

するうち食堂の方では、ダイオゼネスが御馳走の準備を整えたのであつた。此の凉亭では食卓につく樣式がすつかり古羅馬の風に眞似してある。卽ち凭蒲團と椅子とを一つ置きに並べてあつて、男性のお客樣は蒲團の上にゆつたりと安座して凭りかゝつて御馳走を食ひ、女性のお客樣は希臘風に腰をかけて居ると云ふ樣式であつた。御馳走の種類はなかなか多かつた。ペトロニウスアビタルが諷刺小說に描いてある馬鹿げたツリマルチオの御馳走もかくやと思はれる程で、その濃厚の極度と云つた樣なものがあるかと思へば、希臘料理特有のあつさりした甘やかなもの、乃至は東洋の諸民族が好む汁氣の多い藥味の强く利かせてあるのもあつて、眞にお客の意のまゝに委せてある。それを一々老哲人が說明しながら騎士にすゝめるのであつたが、ロバートはたゞ。

「おれなどは食物は何んだつて介意いはしない。まして聖地へ向ふ途中であつて見れば何んでも御座れだ。おれも妻も兵卒と同じものを食つて居ます。それに何時戰爭が始まるかも知れないと云ふのだから、出來るだけ急いで早く食ふ事にして居る。さあ、ブレンヒルダ座つて食はう。さつさとはやくたいらげて、食ふ時間よりも此のいゝお爺さんと、遊ぶ時間を多くしやうではない

か。」

すると老哲人が狼狽氣味で、

「ちよつとお待下さい。今の音樂でもわかる通り、わしの友人達が直ぐと玆に來ますから、その時御一所に樂しく食卓に着きたいと思ひます。」

「そんなわけなら別に急ぎもせぬ。ブレンヒルダもおれも待つた方がよいとなれば何時までも待つて居る。それとも今大急ぎ食つてしまつてもいい。水とパンとさへあればよいのだから。」

「いえいえ。たとへどのやうな高貴な客人が來られやうとも決して御遠慮には及びませぬ。あなたがたに必ず上席に座つて戴かなければなりませぬ。」

するうち突然に、前に聞いたのよりは幾十倍も大きな喇叭の響が、つんざく樣にすぐ前の森の蔭で起つて來た。實に痛快な鋭い響でまるでダマスカスの劍が鎧を突きぬいて來るやうに猛烈に聞く人の鼓膜にぶつかつたのであつた。特に老哲人があまりに魂消た樣な顏付をして居るので、ロバート伯は、

「お爺さん。何も愕くことはありません。何か危險があるなら、玆にちやんと騎士が保護して居るんだから大丈夫ぢやありませんか。」

「別に怖れたわけではないが、こんなに突然だとは驚きいつた。此の喇叭の響きでは皇族がわしの玄關に參られたと察せられる。だが伯爵決して御遠慮には及びませぬ。わが希臘の皇帝は必ず初謁見の外人に對しても厚い思召を持たせられます。どれお出迎に出て來ませう。」

と云ひながら老哲人はいそいそと出て行つた。ロバート伯も妻の手を把りながら、老哲人に隨いて玄關の方に行きながら、

「處變れば品變るで、異郷に來ればまた別な習慣もあるものだ。一國の皇帝がこんな氣まぐれにやつて來るのも變なものだね。」

十一

老哲人はロバート伯夫妻よりは一歩さきに出迎えに出たので、はやくも皇族が乘つて居る巨象の前に身を恭しくひれ伏して居るのであつた。象は當時にあつてはロバートの如き西歐人には全く珍らしい、生れて始めて見る動物であつた。其の巨象の背には屋臺がしつらえてあつて、その中にイレネ皇后陛下と例の美文家のアンナ・コムネア姫とが嚴かに座して居り、その側に姫の配偶であるニセホラス・ブレニウスは騎馬で、美しく盛裝した騎兵の一隊を隨えて居る。何れを見ても此の上飾りたてることが出來ない程綺麗に飾りたてた派手な兵隊さんばかりで、十字軍の騎士の眼には實に仰山に見えた。まるで五彩陸離とした夕燃雲が一時に渦卷いて來た樣な感がする。軈て象の背の皇族達が靜々とおりて來て、凉亭の玄關先に立つ間、此の綺麗な禁衛軍の將校たちは、恭しく下馬して地上にひれ伏し、最上の敬意を示すのであつた。かうした際こそ、すこし年增だが威風ある皇后の姿と、まだ若やかな姫の高慢ち氣な顏とが最もよく民衆の眼に見られる機會である。その背景はまるで禁衛軍の槍の林で、ギラギラ輝いて居り、その間に綺麗な羽毛の動いて居る兜が無限に連つて居る。例のつん裂く樣な凄い響を出した喇叭隊は人の眼につく樣な一段高い巖の上に居て大きなぐるぐると卷いた喇叭を抱える樣にして持つて居る。

女騎士ブレンヒルダが、その美しい顏に、男性的な武裝をして居る凛々しい姿が、すぐと皇后や姫やの眼には物珍しげに映つたが、皇族の身分であるから、別に驚くと云ふ顏付もせずに居たが、丁度その心持ちをくみとつた老哲人アゼラステスは今がお互を紹介する好時期と思つて、すぐと、之れは十字軍とともに來た佛蘭西の武名の高い貴族で希臘皇室に深く敬意を有する騎士夫婦であることを告げると、皇后は、

「アゼラステス。よくこそ陛下に好意ある外國の貴顯を饗應し下されました。すぐにもいろいろ

と打ち解けてお話を致したう思ひます。特に姫も日頃から西歐の女騎士のことを想像して、美しい文章に綴り度いと思つて居りながら、まだ親しく話すことが出來ないで居ましたわけで、どの樣に此の機會を滿足に思つて居るか知れません。よく承つて日頃誤つて居たことを正しく書く樣になれませう。」

と云ふとロバート伯が、

「今此のお爺さんが、私が希臘皇帝に大變な敬意を表しにやつて來た樣に云ひましたが、誤解があるといけないから、すこし無作法ではあるがよく申して置きませう。われわれの目的はひたすら聖地の恢復であつて、元來希臘の皇帝に意氣地が無いため聖地が異教徒の手にわつたまゝであるから、止む得ず十字軍が組織されたのである。十字軍の最も賢明なものは何等希臘皇帝の權威を認めて居ない。たゞ通り路にあたつて居るのだから、同じ基督教國でもあり、いろいろ便宜と友情とを與へてもらはねばならぬと思つたから、それで儀式だけでも忠誠を誓つて置いたのであるが、其の爲めに希臘の皇室が威張ると云ふ理由はすこしも無い筈だ。」とつけつけと云つたので皇后は心のうちでは憤怒に燃え立つて居て、頗る希臘皇室の威嚴が地に墮ちた樣に感じ、直に禁衛軍に命じて此の無作法な騎士を捕縛させてしまはうと思つたのであるが、しかし皇后は皇帝か

ら今まで何過となく、斷じて十字軍の騎士に對しては怒を發してはならないと深く戒められて居ることを思ひ出し、それとなしにロバートの言葉を解し兼ねた樣な顏つきをしてまぎらはせて居た。そんな有樣で此の場が一時に妙に白けてしまつた。

涼亭の主人の老哲學者アゼラステスは、一度地面から身をおこしたのであつたけれど、又もや皇后の前に恭しく這ひつくばつたまゝで頭を空にはあげることが出來ず、すこし夕陽がまばゆ過ぎるのか知れないが、人に顏を見られるのが羞しいとでも云つた恰好で片手を眉のあたりにあげたまゝ、何か皇后から命令が下るまでは、こちらは發言しないが一切無事であると觀念して居るらしい。その後で例の黑んぼ奴隷のダイオゼネスが矢つ張り主人の老哲學者に對して同樣の態度をとつて居る。また一方傲然としたベリイ伯爵夫人のブレンヒルダやロバート伯やは、皇后イレネとコムネア姫とにとつて怒りの的ながら同時また頗る好奇心の的となつて居る。皇后や姫やは此の騎士ほどに筋骨の逞しい堂々たる男性美の權化を見た事が無い。ブレンヒルダの方に對しては、女性としては何となく武張り過ぎて居てあまり傲慢だと云ふ嫌な感じがしないでもなかつたが、ロバートの男性美に對しては全くの無限絶對に心をうばはれてしまつて、憤怒の心が何時か恍惚の心に消え込むでしまいはしまいかと、自分で自分を警戒する樣な心持ちになつてしまつて

居る。

ところでロベート伯とブレンヒルダはまた全然別なことに好奇の心を奪はれてしまつて居る。今まではついぞ夢にさへ見たこともない眼前のおどろくばかり巨大な象と云ふ動物に對して全く呆氣にとられてしまつて居るのであつた。此の巨獸が駄馬の様に屋臺を脊に喰付けられて皇后や姫やを運んで居るのが不思議な様な氣持ちもする。皇后の尊嚴も姫の美貌もすつかり騎士夫妻の眼にはとまらず、ひたすら象が不思議でならないのだ。その長い鼻や、牙や、巨きな耳朶などどんなに使ふのか知らむと、まるで小供の様に見惚れてばかり居る。

たゞこゝに一人ブレンヒルダの美貌をそれとなく見て居るのは姫の配儷であるニセホラス・ブレニウスであつた。彼は恰も人に氣づかれては困る——特に姫や皇后やの妬心を起こさせてはならぬと心に戒めながらも、ぢつと此の佛蘭西から來た女騎士の美しさをぬすみ見て先刻から心の時めくのを押し匿して居たのであつたが、早く何か言葉をかけて、此の白けた場面をとりつくろつたがよいと云ふ心持ちで、「佛蘭西の伯爵夫人、さぞ象がおかしいことで御座いませう。何しろ始めて御覽になりました御様子ですから。」

と始めて沈默を破つた。ブレンヒルダは、

「いえ。象の事は先刻から此のお爺さんで承知して居りましたのですが。」

と云つたので、一同は一寸おかしくなつた。實は宮廷ではアゼラステスは象と云ふ綽名でとほつて居るのを、此の女騎士は一向知らなかつたのであるけれど、聞くものの耳にばうまく諷刺が云ひあてられた様で、笑窪が頰にのぼるのを禁ずることが出來なかつた。コムネア姫が、

「それは、アゼラステスのお爺さん位象の心得のある人はありませぬから。」と故意に諷して云ふと、アゼラステスも亦、

「ほんとによく心得たもので御座ります。」と平氣な顏で笑ひもせずに嚴肅な滑稽を行つたのであつた。姫がまた

「ほんとうにさうですね。アゼラステス。しかしわたし達は、わたし達を乘せて吳れる爲に跪く此の動物のことは批評しないことに致しませう。さあ佛蘭西からのお客様。」と云ひながら、特に女騎士の方に向いて、「どうか、佛蘭西にお歸りになつた上は、希臘の皇族は誰とでも食事をしたとお仰つて下さい。ことに十字軍の騎士の爲ならば、どの様にも謙遜して歡待をいたしましたと。」

ロベート伯がその言葉を受けて、

「いや。有難う。よくさう傳へませう。だが珍らしいのは希臘の皇族よりも此の大きな象と云ふ動物です。何か此の象が食べる處が見たいものだが……」

と云ふと姫は

「食卓で御覽あそばせ。」と矢つぱり諷する心持ちでアゼラステスの方を顧るのであつた。

ブレンヒルダが

「姫君。御歡待を受けまして食卓に伴はれますのは此の上ない光榮で御座いますが、しかしもう日も落ちて暮れかゝつて來ましたから。」と云つたが、此の美しい修史姫は、

「どうぞ御懸念なく、いくら晩くなりましても大丈夫、わたし達の禁衛軍が立派に御保護申しあげて御送りいたします。」

「懸念！保護！私はそんな言葉は夢にも存じません。姫君、わたしの夫、パリイ伯ロバートはわたしを保護します。よしんば伯爵が居なくても、此のアスブラモントのブレンヒルダは女騎士。自分で自分の保護が出來ます。」

また形勢不穩になつて來たので、アゼラステスが

「いや。佛蘭西の伯爵夫人。どうか姫君のお言葉を惡く御とりにならない樣御願いたします。姫

君はうつかり此の希臘の淑女達に對せられる樣な心持ちで申されたのに過ぎませぬ。姫君が心の底からお望みになることは、佛蘭西の女騎士の有樣でありまして、特にあなたの樣な女騎士の立派な此の上もない模範から、直接に御承りなれば、姫君の筆でどの樣に立派な歴史が出來るか測り知れない程であります。ですから、姫君と食卓をともになされましたなら、姫君はその御禮として、珍らしい動物苑を御案内せらるることで御座りませう。君府の動物苑は皇帝の勅令によりまして世界の隅々から、ありとあらゆる珍奇な動物を取り寄せ、如何なる大學者と雖も、之れによつて更に深い智慧を增すべきもので御座います。鼠よりも小さい鹿も居りますればまた、高さが四十丈もある樹の若芽を喰ふ位に長々と頸をのばす動物も居ります。しかも足は極く短かなものですが……」

伯夫人は俄かに熱心の色を彰して

「それは面白さうです。」

と云ふのを、老哲人は得たり賢しとばかりますます對手の好奇をそそる樣に、

「まだ他に巨なき蜥蜴も居ります。他の國の澤地などに棲むで居ります蜥蜴は無害な小さなものですが、埃及に行きますと、長さが三丈に餘る怪物となつて、その皮膚は綱鐵の如くに硬く、一

度人間を捕えますと、人間の斷末魔の泣聲を眞似して、他の人間をも呼びよせて喰ふと云ふ稀代なものも居ります。」

ブレンヒルグは

「ロバート。行きませうか。何うなさるの。大變面白さうな話ですね。」

老哲人は愈々茲ぞとばかりつき進めた。

「まだまだ巨きな動物で、鼻先に一本、時には二本の角を有し、その黑い皮膚の革の厚く堅いことと云つては全く古今無類で、その動物が身體を縮めて一つたん皮膚を硬くした以上、如何なる騎士の鋭い劍でも……」

「ロバート。行きませう。」とブレンヒルグ。

ロバートも

「えい。何んだ。騎士の劍がどんなものか、希臘のものたちに見せて呉れやう。」と力みあがつた。

「さうですとも。」とブレンヒルグが强く和した。「此の邊の國はもとから魔術にかゝつた國々で、魔術がどの樣な姿をしてひそむで居るかも判りません。騎士の劍で、何時その魔術が解けるかわからないと云ふ冒險の國ですもの、あなたの劍の試しどころかも知れませぬ。」

「ブレンヒルグよ。萬事は此の胸に定まつた。姫君の禁衛軍が全部擧つてわれわれに反對しやうとも斷じて姫君の饗應にあづからう。佛蘭西騎士の魂は之れを辭すべきでは無い。その眞骨頂は危險を快樂と心得て行くのであつて、危險を以つて誘はば何處までも誘はれて行かう。」

猛者のロバート伯は斯う云ひ終ると、腰にある大きな劍欄に手をかけて、大きな武者振ひ一つするかと思ふと、劍の響きか落雷の樣に鳴つた。侍女達は此の響に魂消てしまひ、皇后もさつさと凉亭のなかにはいつてしまつた。

だが流石にアンナ・コムネア姫だけは、物慣れた宮廷生活の粹を見せて、閑雅な態度で淑やかに荒武者ロバートの手をとりながら、「母君が最先にアゼラステスの凉亭におはいりになりましたからには希臘の流義にしたがつてわたしがあなたをお導きいたす役目となりました。」

と云つた。猛者伯が後ろを顧みやうとするのを、「あら。どうか奥樣のことは御安心遊ばせ。私の夫のブレニウスが御案内いたすことになつて居ります。此の希臘の宮廷では外國の人を皇族が伴つて食卓につくことは風習にはなつて居りませぬのですけれど、今度こそはそれを破つてかう云ふ立派な騎士がお迎え出來ました。また母君はたつてあなた方に決して御窮屈には思しめさぬ樣に、宮廷の儀式などは一切破つて下さる樣にと望むで居りますし、もとより父陛下もそれを大

賛成に思召すことと思ひます。」

「いや儀式に通ぜぬのは佛蘭西騎士の面目で何等の御遠慮も致さぬ。が戰もしないで御馳走にあづかるとは是れが始めてだ。いや何れにしても姫君の樣なうつくしい方に案内されるのはうれしいもの、如何なる場合も加護致しませう。」

と云ふと姫君も此の野蠻伯と腕をかはして居るのを無ざまと思ふと正反對に、かゝる頑固な荒武者の心を、よくも之れまでに手なづけ得たと思ふ誇りの方が先にたつて、得意滿面と云ふ顏色で、反例暫時の間でも此の樣な世界無敵の勇士に衞られて衞ることを頗る光榮と思つたのであつた。

食堂に行つて見るとイレネ皇后は既に食卓の一番上席に座つて居た。そして皇后は自分の娘や婿やが此の西歐のがさつな御客樣を自分の兩側に案内して來るのを見ていさゝか面喰つた樣な顏付をして居た。ロバートは蒲團の上に凭りかゝる樣に、ブレンヒルダは椅子に腰をかける樣に希臘式な饗應の席がとつてあつたのである。イレネ皇后は此の西歐から來た無禮もの達に兩側に座られることを非常に嫌に思つたのであるが、かねて皇帝から十字軍の貴族に對しては如何なる事があつても默つて忍ばねばならぬと云ふ事を嚴命されて居ることを思ひ出し、ぢつと我慢をした。

伯夫人ブレンヒルダは示された通りブレニウスの傍に腰かけたのであつたが、伯のロバートは希臘風に蒲團の上に臥そべる樣なことは大嫌ひとあつて、西歐風にコムネア姫の傍にどつかりと腰をかけながら、がらがらと笑つて、

「おれは臥そべる樣なことは武道に敗けた時より外はしないのだから腰かけた方がすきだ。」

と云つてのけた。

軈て卓上には御馳走が運ばれて來たが、その御馳走の仰々しいところを見ても此の饗宴はその日の最も重大な役目であることが察せられる。饗宴の雜事に從事する澤山の人々が、或るものは卓上の飾りつけに、或るものは料理を運こぶとに、或るものは皇族のその時々の嗜好に應ずべき香料や藥味やを持つて來る爲めに一時は此の食堂がごつたかへしと云ふ有樣だつた。それ等の事に就いての一々の指圖もみんな此の老哲人のアゼラステスがせねばならぬで、老哲人はその古典に通じたあらゆる智識をしぼり出して、むづかしい樣式の御馳走ばかりを準備させたのであつたそしてその御馳走が完全に行かない場合の責任を殘らず黑んぼ奴隷のダイオゼネスに塗りつけて叱り飛ばすと云ふ事にした。

「どうも私がいくら念に念を入れて申しつけて見ました處で、此の馬鹿な奴隷がみんな打ち壞し

を平氣でやるものだから致しかたが御座りませぬ。ダイオゼネス！　いつたいお前は何と云ふ馬鹿者に生れついたのだ。それそんなに鹽漬けの胡瓜を猪の頭から遠くはなして置くと云ふことがあるか。此の立派な海鰻鱺を蘰香を添えないで出すと云ふことがあるか。シアン酒には必ず貝類を添えるものだ位は心得がないのか。お前の馬鹿さ加減は箸にも棒にもかゝらぬ。」かう云ふ風に老哲人ががみがみと云つて居る間に、お客様たちは各自初對面の物語りなどして融和し合ふ時間は充分にある筈であつたのであるが、此の饗宴におけるロバート伯夫妻はまるで醋のなかに油をおとし込んだ様なものであつた。

ロバートは先づ手近にあるものをぐん〳〵り貪り食つて、そして注がれた酒を布臘葡萄の眞のよい味がするとも何とも云はないでガブリと一息に片づけてしまひ、もうこれで腹一つぱいだと云つて、それからあと美しいコムネア姫が、いくらおいしいものだと賞美しながら焉める料理でも片つぱしからもう嫌だで退けてしまつた。伯夫人のビレンヒルダの方は一番手輕さうな簡單な料理をほどほどに食つて、そして透明なコップの水にすこし酒の香が染ましてあつたのを一杯飲んだきり、あとでブレニウスが何をすゝめても平然として振り向きもしなかつた。かうして夫妻とも滿腹したまゝで椅子に凭りかゝつて、他のお客がいろいろ食ふのをじろ〳〵と眺めて居るの

であつた。

近代の最も繁文褥禮な食道樂と雖も、此の騎士時代の希臘の饗宴の食ひ方の七面倒臭いことにかけでは到底及びもつく可きものでは無い。主人側から一々御馳走の因緣來歴が出ると同時にお客側からはまたそれ相應の批評や註釋やが數かがりもなく出て來る。皿の上のものなどは無論一寸嘗める様にして味はうだけであつて、新しい皿が重ならない様に盛に追ひやつてしまふのであつた。軈てナンナ・コネムア姫は自分の傍に座して居る佛蘭西の騎士が一同の焦點になつて居るのを幸ひ、何か騎士と話し合ふよい話題はないかと思つて、恰も現代の外交官夫人が、極めて手輕に巧みな偶然を捕えて話術上の手腕を振ふやうに、

「ね。佛蘭西の名譽ある騎士。わたしはあなたの爲めに隨分と笛を吹きましたが、あなたはちつとも踊り出さうとはなさいませぬ。また私は貴方のためにバツカスの歌やコマスの歌やを歌ひましたが一向踊り出さうとはなさいませぬ。佛蘭西の騎士達はミューズの神々の前にはお拜みなさいませぬのですか。」

と云ふとロバートはたゞ端然として、

「美しい姫君。私の言葉ははつきりとし過ぎて失禮かも知れませぬが、私は正直正銘の基督教信

者で、バツカスとかコマスとか云ふ異教の神には唾氣でもかけたい位に思つて居ます。」

「まあ。私の言葉はそれ程までに慘酷に曲解されましたのでせうか。私の申します神様はたゞ音樂や詩歌や雄辯やを司る神様で御座いますわ。藝術と云ふ言葉の代りに使ふ名前の神様ですわ。だのに異教徒の神様だつて、佛蘭西の騎士の前では、言葉をよつぽど愼むで用ゐなければ、すぐと誤解されますのね。」

するとロバートはから〳〵と高く笑つて、

「いや。姫君。私は別に惡くとつたわけでも何んでもありませぬ。あなたの御言葉が美しいお心のあられたものであることを何で露ほども疑ひませう。聞きますところに依れば姫君は勇ましい戰爭の歷史をお書きになることがお上手ださうですが、之れは吾々騎士道をはげむものが、その名譽を後世に傳へて戴くことで御座いますから、どの樣にか立派な御仕事で御座りませう。願はくば此の後とも御麗しい文章で、益々勇ましい騎士の物語を御書きになつて下されたい。私の妻のブレンヒルダの劍にも增して、姫君の筆の力は强いかも知れませぬ。おや。ブレンヒルダと云へば、私の妻は席から立つた樣ですが、おゝ。さぞやはやく君府の城の方に行きたいであらう。私も實は行きたくなつた。」

と立ちあがつたので、コムネア姫は、

「暫らくお二人ともお待ち下さいませ。私達もすぐとお一所に出かけて。父が集めました立派な動物苑に御案內いたさうと思つて居るところで御座いました。どうやら私の夫のブレニウスが勇ましい奧樣の御興味を損ねました樣で御座いますが、ほんとうは極心の置きやすい人でありましてもつとよく話して下されば、此の上とも面白くなりまする。」

と云つたのであつたが、一つたん席をたつた女丈夫ブレンヒルダは二度と食卓につかうとはせず、玄關の方に向かつてづか〳〵と出て行くのであつたから、老哲人はじめ皇族のものたちは俄かに狼狽して、此のまゝ佛蘭西の騎士夫妻とともに君府も城に行く可きか、それとも、もつと長く此の饗宴に引きとめる可きであるかと迷ひながらざはめいたのであつた。だが騎士夫妻の態度は全く犯すべからざる强いものがあつた。そして一同はすぐとまた城に出發せねばならぬことになり、その準備の爲めに、ごつたがへしの大騷ぎがはじまつた。皇族のお伴をして來た禁衞軍の兵士たちは思つたよりも一時間ばかりも出發の時刻が早くなつたので、ぶつぶつと不平を云ひ出すものもあるし、遊びに出かけたものを呼びかへす爲めに大聲をあげるものもあつた。

かうした騷ぎのなかに象が引き出されたので、ブレニウスは象の上にのりイレネ皇后と相なら

むで屋臺の中に座をとつた。老哲人アゼラステスはわざわざおとなしい婦人乘りの乘馬を擇むで乘つた。之れは女丈夫ブレンヒルダと轡をならべながら、行く々々大にブレンヒルダを對手に話さうと云ふ心があつたからである。美しい歴史家のコムネア姫は、いつもならば必ず象の屋臺に席をとるのであるが、今度に限つて、元氣のよい馬を擇んで乘つた。之れは勿論佛蘭西の勇士ロベートと轡をならべて駛せたいからである。さて象の上でイレネ皇后とその婿との會話はさして重要のものであるべき筈も無い。要するにがさつな西歐騎士の無躾な振舞ひを罵倒し合ふ位のことであつた。だが一方老哲人アゼラステスは女丈夫のブレンヒルダを對手に、何んだか見當もつかない樣なまはりくどい調子でもつて、君府城内の動物苑の面白さを說き出したのであつた。その動物苑を創めるについて希臘の國帑がどの位費されたかと云ふことや、皇帝が此の樣な智識的事業の爲めに苦心した事が如何に賢明であつたかと云ふことや、またその創設については姫や姫の夫たるべきニセホラス・ブレニウスの手腕が大にあづかつて力があつたと云ふやうなことも說いて聞かせて、盛に動物苑の興味をそゝり立てたのであつた。

「まあ。そんなに有益な面白いところですか。」と馬上に爽颯たる女丈夫ブレンヒルダは大きな快活な聲で云ふ。「さうですか、ブレニウスと云ふあのやくざ男でも、さう云ふ處に力を盡すだけの

心掛けがありましたのですかね。ぢや外國の婦人に冗談を云ふ時よりはすこしは賢明ですね。注意して置きますが、此の戰雲亂れた時世に鼓までも出かけて來て居る女騎士は多勢なのですが、あんな口のきき樣を二度としたら、此の瀧のなかに投げ込まれてしまひますよ。」

一驚を喫せしめられた老哲人は

「ですが、よもやあのブレニウス樣の樣な容貌のいゝ男を、さう手荒くする女もありますまい。」と云つた。だが、沸然としたブレンヒルダは

「何だとお仰います。私はあの二人の皇族の女の方が居られましたから、遠慮いたしましたまでの事で、さうでなかつたら、あのブレニウスとやらが皇儲であらうが、何であらうが、生かして置けないところだつたのです。」

老哲人は心のうちに益々驚いて、此の女は餘程警戒せねばならぬと、すくなからず怖れた。そしてこれははやく話題を他の方に變化させた方がよいと思つて、昔の女丈夫の物語など持ち出して、此の女傑の氣に入りさうなことばかりを語つたのであつた。

その間にロベートはまた美しいアンナ・コネムア姫から種々な話題を浴びせかけられた。藝術の話から歴史の物語その他さまざまの事を燕の如くに喋りたてられたのであるが、ロベートの心

には何の興味も起らぬ。むしろ此の姫がそんなに饒舌でなくてヅリチウム島の魔術にかゝつた眠れる處女の様だと何んなによいかとそればかりを願つて居た。だが姫の方は益々口數を多くして盛にノルマン民族に對する褒め言葉を並べだしたので、ロバートはとうとう此の姫の半可通な智識が堪えられなくなつて來て、

「姫君。私等一味のものが時々ノルマン人と呼ばれて居るのですが、實は間違つて居ます。と云つて別に私はノルマン民族の悪口を云ふわけでは無い。ノルマン民族はかつて私等の父の時代にその民族よりもずつと大きな英國の民族を敗かしたのであつて、その時英國から遁れ出た敗殘者は今日此の希臘に漂泊して來て御覧の通りの戰斧隊となつて居ります。戰斧隊はよしんばノルマン族に打ち破られたとは云ひながら、なかなか勇敢な民族であつて私等は決して之れを敵として愧づるものでは無い。私等はフランク族と云つてライン及びサアレの流れの東の方に棲むで居り、聖僧クロビス尊者の布教をうけて基督教信者となり、勇氣は勿論その數においてもなかなか多くわれ等フランク族が一度動いて鄕關を出た以上、よしんば他の全民族が不贊成を唱へやうとも、退却しやうとも、單獨でエルサレムの聖地を奪還し得る。」

と云つた。凡そコムネア姫の様な智識上の虚榮心に富んだ人間が、その智識を振りまはして居

る眞最中にかうまで誤謬を暴露される程苦痛なことは無い。姫は陶のうちをむかむかさせながらも、

「では、では、あの奴隷が私に虚言を教えましたに相違ありません。忌々しい。あの奴隷は私にノルマン族は戰斧隊にとつて不具戴天の敵だと申しました。あゝ、今あの男は戰斧隊長のアキレス將軍の傍を歩いて居ります。誰かあの男を呼んで下さい。あの背の高い巨きな斧を肩にして居る男です。」

その時ヘレワードは丁度戰斧隊の先頭に立つてその偉軀が人目を曳きつゝあつたのであるが、すぐとコムネア姫の前に呼び出された。彼は姫に對して恭しく頭をさげたのであつたが、すぐと擡たげた顏には、炯々とした眼光が輝いて鋭くも姫と相ならむで騎馬して居る佛蘭西の勇士を見据えたのであつた。コムネア姫は嚴かな調子で、

「ヘレワード。お前は一月ばかり前に私にノルマン人トフランク族とは同じ民族で、お前の屬する戰斧隊にとつては不具戴天の敵だと申したのではないか。」

と云ふとヘレワードは

「ノルマン族は手前共の不具戴天の敵で御座ります。彼等憎むでも餘りあるノルマン族の爲めに

手前共は祖國を追はれました。フランク族はそのノルマン王の親族の部下の民族であります以上彼等はこの戰斧隊を好まず、戰斧隊もまた何處までも彼等を憎みとほします。」

それを聞いて居たロベート伯は

「これは面白い事を云ふ奴ぢや。お前がフランク族の惡口を云つて戰斧隊の身最負をするのは、成る程相應の困緣はあらう。だが、可哀相にお前達の民族は、滅ぼされて獨立出來なくなつてからはや一昔も過ぎて居る。何をしやうとてもう破戸漢の民族になつてしまつては、笑ひの種となるばかりではないか。」

「民族が追ふと追はれるは時の運だ。勇ましい戰斧隊と雖も、神の御思召で時利あらざる事もあらうが、われ等が胸のほこりは何時までたとうともノルマン族等よりも適かに上にある。小癪と思ふならば何時でも花々しく戰場で爭つて見やう。ただ神ばかりが、その勝敗を定める迄ぢや。」

とヘレワードも屹となつて大きな聲をあげた。ロベートも屹となつて、

「どろつき民族だけあつて、へらず口だけはよく云ふ。その言葉だけてもフランクの貴族を慍らせるに充分であるぞ。」と云つた。

「何んの。」とヘレワードは顏を怒らせたが、不圖前後を考へた樣な態度になつて、「此のまゝゆるし

しては置かぬ。生命をとるかとられるかの場ぢやが、殘念でまた愧づかしいことながら今は警護の任にある時、何れ……」

「おゝ。此の馬鹿ものは大ぶ腦髓が煮えて來たと見える。お前は何の身分があつて、おれの刄に血をけがす光榮があると思ひあがつて居るのか。お前は氣狂者か。それとも惡酒でも飲み過ごして分際をわすれて痴言を云ふのぢやな。」

と云ひながら、佛蘭西騎士の手は電光石火の如くにはやく劍欄に觸つたのであつたが、すぐと其の手をもとにかへし、極めて莊重な沈着な聲で、

「お前の分際ではおれに渡り合ひは出來かねる。」と貴族らしく云つた。がヘレワードは

「だが、其の方こそまつさきにこちらを侮辱したのではないか。しかも男子の面目にかけても無念を晴らさねばならぬ程な侮辱を與へたのでは無いか。」

「聞く程の事でも無いがこちらには其のおぼえは更にない。いつたい何體何處で其の方如きものを侮辱したと云ふのか。」

「今日此の日だ。其の方の君主の同盟である此の希臘の皇帝陛下に對して、畏れおほくも厚き歡待を受けながら、その恩を仇にして大侮辱を加え奉つたのではないか。皇帝陛下をさながら村の

狼籍ものが愚弄する様に無禮を振舞つたのは其方ではないか。しかも其の方は此の無禮を多くの皇族方が並み居られる面前で振舞つたのではないか。」

「それは其の方の主君が云ふべき言葉で、御前の様な奴隷風情がかゝり合ふところではあるまい。」

「主君の恥は臣の恥であると云ふことを心得ないか。ましてわれ等は信任厚き戰斧隊である。われ等戰斧隊が禁衙の任をさづけられて居る以上、陛下の恥は悉くわれ等の恥である。其の方は佛蘭西の伯爵か、貴族か呼び名は何んでも構はぬ。其の方と戰斧隊とは今日からは不具戴天の仇である。男らしく一騎々々の勝負を決し度い。われ等戰斧隊の警護の時間でない時なら何時でも相手にならう。神こそ、どちらが正しいを裁かれる。」

ヘレワードが斯う云つた言葉は、ロバートに對してであつたから、フランス語を多く交ぢえて居て、その傍に居たコムネア姫の耳にははつきりとは了解が出來なかつた。で姫は妙な顏付をして、長々しいことを怒氣滿々で云ふヘレワードを眺めて居たのであつたが、軈てヘレワードが默つたのを見て、ロバートに、「あなたはあの様な男を對手にしては、到底騎士の仕合は出來ないとお感じになりますのでせう。」

と對手の顏を覗つたが、ロバートは只

「その様な事は、私の妻のブレンヒルダの様に劔に磨かれた淑女以外の人には答えられません。」

と云つた。

「でも。」とコムネア姫は尙ほ顏をのぞき込みながら、「わたしとてブレンヒルダさんに負けない位な男氣は持つて居る心算で御座いますが。」と云ふので、

「いや別に祕する程の事でも無い。見かける處あの男は戰斧隊のなかでも最も勇敢で强い奴の様ですから、私は場合に依つては勝負をしてやつてもよいと思つて居ます。勿論あんなものと渡り合つたら私の位置の穢れとなるかも知れないが、しかし世間は廣いから、それを償ふ可きよい對手は又幾らも見つかることであらう。何しろあの身分で、あれだけのことを云ふ男であつて見れば、餘程胸のうちには功名心が燃えたつて居るものと見える。のぞみに任せて勝負を受けてやることにしませうか。」

「では……」とコムネア姫

「では……とは何んです。あの男の方から勝負を申し込んで居るではありませんか。」

「では……ではあなたは、私の父が最も信頼して居る勇士の一人を御殺しになる御決心で御座い

ますか。」

「それを聞いて私は愈々氣乘りがして來た。流石それ程の男だからこそ、あの樣な公言が出たと云ふわけでありましたか、いやそれ程に陛下から信頼されて居る男だつたから、私は私の身分などを考へて躊躇する筈ではなかつた。あの男流石に心掛けは立派で、卑怯と云ふ振舞ひは微塵もないのが氣に入つた。いや、姫君。何もその樣に心配らしい顏付きをすることはありませぬ。また私は彼の挑戰をひきうけたと云ふわけでは有りません。それに勝負は神樣のお心次第、私も武士道には生命をかけて居る。」

姫君は心のうちで、これは意外なことになつて來たものだとはらはらしたのであるが、あとは何も云はず、何れアキレス將軍にあつて、よく打ち合せをして、此の二勇士のうちどちらかが殺されねばならぬと云ふ運命を持つた勝負を成るべくならば未然に防止せねばならぬと考へた。行くうちに、はや眼の前の君府の市街には夕暮れの暗がおりて、市民の家々に輝く灯りが星の群れの樣に美しかつた。君府の城壁の入口になつて居る大金門のところまで來ると、番兵達は嚴めしく盛裝して聖象に乘つて歸る皇族達を迎えて居た。その大金門のところで、ロバートは

「それでは玆で御別れを致しませう。わたし等は昨夜宿つたところに行つて寢ることにしますから。」

とその夜は君府の市街を自由に横行して痛快事に行きあたりたいと思ひながら云ふと、皇后は

「いえ。どうぞ宮殿のうちにお泊り下さい。あなたがたは貴族として相應しい場所で、御ゆつくりとお休息になりますことを、希臘の皇室では希望して居りますから。」

ロバートは今まで默り勝ちだつた皇后から此の優しい言葉をかけられて躊躇した。もとよりロバートの全心はブレンヒルダの美に捧げてあるのであつて、ブレンヒルダ以上の女性の美は彼の眼に映る筈は無いのであつたけれど皇后と云ふ地位の高い美しい女性の優しい言葉に對し、更にコムネア姫も切な懇望を以つて優しい言葉を添えたのであるから、騎士の心としてそれを拒絕することは出來なかつた。それにもう今となつてしまつては、ロバートの心はすつかり柔いでしまつて居るから、今朝玉座の上にのさばり出たほどの荒々しい蠻勇は何處かに置きわすれた樣な氣分になつて居る。老哲人や姫や皇后やの上手な交際術は騎士の荒い氣持ちを蕩かすには充分の効果があつた。それに暮れ落ちた黃昏れの闇は、ブレンヒルダの額に集つた不機嫌な皺をかくして、ロバートの眼に映らずに濟むだかも知れない。とにかくロバート夫妻は辭退もせず莊嚴な大金門を悠々と潛つて、以前へレワードが通つて行つた樣な迷宮路を辿つて行つた。宮殿のなかに

はいると美裝をした侍女達やが恭しく雅やかに跪いて迎え、先づ衣裳を改める部屋へと案内されたのであつた。之れは何れ皇帝と同席する爲めに衣服を正す爲めであつたが、その部屋でブレンヒルダは不圖自分の武裝が血だらけになつて居るのを見て、女丈夫ながら恥しく思つた。之れはあの無禮なスキシア人を刺殺した時に著いた血潮で、ロバートの鎧にもまた方々に血痕が斑々とついて居たのであつた。でブレンヒルダは宮殿の侍女達に、

「わたしの從者のアガタを呼むで下さい。わたしたちの鎧はアガタに片づけさせますから。」

と云ふと侍女達も鎧に觸れて見ながら、

「まあ。何と云ふ重い頑丈な鎧だこと。」

と云つて驚きあつた。

此の間にイレネ皇后と姫と姫の婿のブレニウスとは又別な部屋に行つて衣裳を更えるために長い時間を費した。騎士のロバート夫妻は衣裳を更える事がすむと別な美しい氣持ちのいゝ控室に通されて、侍女たちからいろいろな話を聞いて面白く時間を過ごした。

その間に皇帝は、老哲人アゼラステスだけをこつそりと呼んだ。老哲人が恭々しく七重の膝を八重にも折る樣にして玉座に近づくと、皇帝は御機嫌うるはしくにつこりとして

「流石に御老熟な手腕だけあつて、實によくやつて呉れられた。朕は感激に堪えない。貴老の機智と才略とがあればこそ、あの逞しい猛獸を群れから離して、此の宮殿に連れ込むことが出來たと云ふものぢやが、何しろ十字軍中の最も勇敢な騎士だけあつて、こちらの扱ひ樣ひとつで、なかなか重大な影響を敵に及ぼすことが出來る。」

と云つて悅にいると、アゼラステスは

「いえ。之れはまつたく陛下の深き叡慮の餘德で御座いまして、老臣ごときの企て及ぶところではなかつたので御座ります。」

「何しろ形勢が頗る都合よくなつて來た。これ等の勇士を此の宮殿內にとゞめて置きさへすれば朕の味方とならうが、敵とならうが何れにしても朕の國家の爲めに有利になつて來た。之れに越した人傑は二度と得難い。」

「それに致しましても、先づこちらの味方とするのが第一と思はれますから……」

「そこは朕もよく飲み込むで居る。今夜朕があの廣間の玉座で彼等を謁見する際には、あらゆる

贅をつくした嚴かな華やかな衣裳を纏ふことにしやう。そしてソロモンの獅子に物凄く吼えさせコムネナスの黄金の樹木にあらゆる不思議なことを現じ、怪鳥を鳴かせ、あのフランクの騎士夫妻の眼を、此の宮殿の無限な幻怪を以つて惑はしてしまはう。彼等は必ずや此の爲めに、心に深く朕が帝國の無限の富を信じ、自分等の鄕國の貧弱なことに思ひ較べて、朕が味方になるであらうと思ふがどうであらう。アゼラステス、卿が老熟した智慧は何う判斷をするか。朕が意見を一つ遠慮なく判いて呉れまいか。」

すると老哲人はまたもや恐惶度なき態たらくで、額を皇帝の衣服の裾に摺りつけながら、いかにも自分の云はうとする言葉が皇帝の御意を傷けはしないか、それが心配で堪えられないと云ふ表情をしながら、おづおづと唇を顫はせながら語つた。

「聖上陛下。只今陛下の仰せられました御意見はまことにお尤も至極の事で御座いまして、それに對して何等の異見を申しあぐる筈のものでは御座りませぬが、しかし老臣がつらつら考へまするところでは、如何なる名論卓說も之れを理解し得ざるものにとつては愚論に等しく、あだかも盲人に美しいものを見せてもわからず、豚に眞珠を投げてやつても豚は何とも思はないと同樣、陛下の御意見は卓絕此の上もないことながら、何しろ先方の騎士が頑迷不靈の徒で御座いますか

ら、いや實に先方は頑迷不靈で御座いますから……」

「アゼラステス。もつとはつきり云つて呉れないと朕にはわかりかねるが……さあさあ、こんな急ぐ場合ぢや。何も遠慮して廻りくどく云ふことは要らぬ。」

「では申上ますが、元來西歐の騎士と云ふものは他の人間とは全く違つたもので御座いまして、その慾望もまた失望の所以もわれわれの判斷には及びかねるものが御座います。此の尊い帝國の富は彼等の慾望を唆りはいたしまするが、しかし、富を獲れば獲るにしたがつて、更に富むだ國を征服したいと云ふ慾望を起こさせます。そこで此の黄金慾のある好適例を申しますれば、タレンタムのボーモンなどと云ふてあいの騎士どもでありまして、之れに類するものは案外多數に御座ります。ですから此れ等の騎士は黄金の輝きを見て眼がくらむと云ふ事がありまするが、玆に一つ餘程違つた例外が御座ります。それは卽ちフランク族の騎士魂で御座いまして、之れ等はタレンタムのボーモン輩とは全然ちがつた魂を持つて居ります。で、われわれは此のフランク騎士を取扱ひまするには全く違つた方法に依らねばなりませぬ。彼等は十字軍中でも最も高尙な魂を持つて居るもので御座いますが、彼等は何をするにも必ず騎士道と云ふことをまつさきに目標に立ててやります。そして黄金などには斷じて眼も呉れないと云ふ氣性で御座ります。何事をする

にも劍の名譽にかけてやりとほすと云ふ荒々しい性質で御座いますから、もし黄金が欲しい樣な場合にたちいたりますと、極めて無造作に掠奪するに過ぎず、要らない時に黄金を見せたとて、たゞ輕蔑するばかりで御座います。ですから彼等を慾で誘ふと云ふことは先づ出來ない事と心得置かねばなりませぬ。彼等は黄金などは齒牙にもかけませぬ。全く土芥視して居りまする。」

と云ふと皇帝は

「彼等が黄金を欲しがらないとは不思議なことぢやなあ。黄金は羅馬人も異敎徒も、貧富貴賤僧俗ともおしなべて人類はみなこれを至寶として此の上なく尊く思つて居るのに、フランクの騎士だけが土芥視して居るとは怪しからぬ。アゼラステス。彼等は氣狂ひぢやなあ。よろしい氣狂ならば、嚴罰に處して荒い鞭をあて、手酷い眼に合はせて屈伏させるより他に道はあるまい。」

「いえ。酷い眼にあはせればあはせる程彼等は勇氣が百倍します。彼等は幼少の時から危險とか恐怖とか申すことは全く輕蔑視去る樣に慣らされて來て居ります。他の人間ならば恐怖におのゝくところを、彼等は此の上ない愉快なところとして喜むで行きます。今日も私は彼等にあの有名なズリチウムの眠れる美人の物語をして聞かせましたところで御座いますが、あの怖しい龍のことでも、蜻蛉ひとつ追ひまはす位にしか思つて居らず、すぐにもその龍を退治に行かうと思ひた

つた位で御座ります。」

「行かうと云つたか?」

「ハイ。陛下。今すこしであの騎士は出發しさうで御座いましたが、わたしがあまり上手に眠れる姫の美しさを話したものですから、あのビレンヒルダと申す妻の嫉妬心を起こさせまして、それが出來なかつたと云ふわけで御座います。」

「いや。それでは、朕が帝國にもいくらも話上手が居るわけだから、それを僅かばかりの賃銀で傭つて巧みに騎士の心を釣つてやりさへすればよいではないか。」

「さやうで御座りまするとも、ですが騎士の心を欺くと云ふことは餘程綿密な智慧が要ることで御座いまして、うつかり間違ひでもすると全くの命がけで御座います。昨日も實はまかりまちがつて、あの女騎士にもうすこしのことで瀧の中に投げ込まれるところで御座いました。」

「それはまた物凄い女性ぢやな。朕もよくよく氣を附けずばなるまい。」

「そして特にブレニウス殿下の如きは最も御氣を附けにならねでならぬかに思ひます。」

「それは姫からよくよく注意さすことに致さう。」

「何しろあの女騎士は危險極るもので御座います。今日もあの勇猛なスキシアの部將トクサチス

をほんの一刺に串し殺してしまひました。」
「ウム。トクサチスを殺した。あの男は隨分と頑迷で傲慢な奴ぢやつたから、殺されても惜しいとは思はぬが、しかしお前がよくその場の光景を見おぼえて居るならば、他日必要な場合に、十字軍　會議の席で、ロバート夫妻の暴戾を糺彈する材料につかつてもよいのだから、よくよく記憶にとどめて置いてもらいたい。」
「御意で御座りまする。しかし何れに致しましても今度は、西歐騎士道に最高の名譽ある傑物を陛下の味方にとりいれ得ると云ふ絶好の機會が參つたので御座りますから、飽くまでも愼重に念には念をいれて取扱ふことに致しませう。陛下の御叡慮によりて、今回はまつたく此の老アゼラステスが一生の智慧を絞る場で御座りまする。」
皇帝は何か考へるものゝ如くに暫くの間默々として居たが、「アゼラステス。全く卿が老熟な手練を見せて呉れゝばこそ此の難澁な仕事が切り拔けられると云ふものだ。よろしく賴み置く。ぢやが朕が考へたあのソロモンの獅子を吼えさせることと、黃金の樹木の不思議とは、矢張り何かの効果がある樣な氣持ちもするから、やつて見てはどうか知らむ。」
「それはもとより結構で御座りませう。だがただ御注意申上たいことは成る可く武裝した番人は

尠くすることで御座ります。彼等フランクの騎士の性質はたとへば荒馬の樣なもので御座いまして、氣分一つで絹絲でも曳き得らるるのですが、何かの疑ひとか不機嫌とかで一つたん荒れだす時は、鐵の轡を以つてしてもどうすることも出來ませぬ。」
「特にその點に遺漏なく注意することに致さう。ではアゼラステス。銀の鈴を鳴らして下さい。衣裳掛を呼んで篤と裝ふことに致さう。」
「もう一言ちよつと玆で。」と老哲人は聲をひそめながら、「陛下は、ただ今此の老臣に、あの珍らしい猛獸の數々が集めてある動物苑の鍵を渡して下され度う御座ります。」
皇帝は懷から、獅子の附號のついて居る小さな鍵を渡しながら「何か名案でもあるか。とにかく鍵は玆にある。アゼラステス。卿もなかなか他を欺くことにかけては名人だが、正直なところあの猛獸をどうして手なづけ樣と目論むで居るのか敎えて呉れまいか。」
「やはり欺くと云ふ力で。」老哲人は答えたきりだつた。
「だが釣り出す敵の弱點は？」と皇帝。
「彼等の名譽心を唆かして。」と老哲人。
やがて衣裳がかりがはいつて來ると同時に老哲人はその部屋を退出してしまつた。

十二

皇帝と老哲人は、お互ひに別れて後も、お互ひの心を讀み合つてゐた。皇帝は其所に這入つて來た衣裳掛りの耳にはいらぬような小さい聲で獨言を言ひ續けた。

「きつと斯うなると思つた。あの古呆けた哲學者の爺いめは、今度の十字軍の場合にも巧みに騎士の心持をのみ込んで、それを利用してこの宮廷の中に獨特の地磐を築き上げようとしてゐる魂膽だ。あの老哲學者は最初は道化役者の風をしてこの宮殿に這入り込んだのだが、はやくも錯雜した宮廷の祕密の鍵を握りしめ、ゆるり〳〵とその頭をもたげて來、果ては皇儲のブレニュースと相結んで禁衛軍の間に不拔の勢力を植ゑ、朕が勢力を削いでしまつた。——イヤ全くあの爺は今ではまるで蜘蛛網のようにこの宮廷内にこの老辣な手づるを延ばしてしまつた。朕はいまでは偶像同樣のものに過ぎない、從臣達からまるつきりの無能扱を受けてゐるのだが、これとて十字軍を受けた一時のこと、一度び十字軍が、ボスフオラス海峽の彼方に渡つた後は朕が眞んとうの軍の實力を目覺ましいまでにあの傲岸な皇儲ブレニースにも、又臆病で自惚なアキレス將軍にも、またあの蛇のような狡獪な老哲學者アゼラステスにも確かりと見せつけてやらう。」

皇帝は斯んなことを言ひながら、華やかな衣裳を纏つてゐたが、一方老哲人のアゼラステスは別な室で、次のような獨言を言つた。

「どうも皇帝は迷妄で困る。ほかの臆病な國賓でも取扱ふつもりで今度の荒武者夫妻に對しようとするのだから全く危ない。」

然う言ひながら黑奴隷のダイオゼネスに手傳はせながら例のあつさりとした純白な着物を纏つた。この老哲人は心の中では斯うして着物を單純化することが皇帝の豪奢な複雜な服裝に對して正反對な極點に立つてるものと思つた。

一方又別な衣裳室では騎士のロバート夫妻が、十字軍の長い旅の中には斯ういふ機會もあるとかねて用意した一番立派な衣裳を出して粧つた。ロバートは其鄕國のフランスに於てさへも此のように美しい羽毛がたか〳〵と飾られてある兜を頂きながらうしろに曳く禮儀用のマントを身につけてゐるやうな場合は極めて稀れだつた。今日のこの日の服裝は華やかな鎧を纏ひ銀の金具が特に胴全體に渡つて輝やきダマスクで錬へた劒の鞘の鐵が紫色に映えた。踵には拍車をつけ、肩には三角の盾を掛けた。盾の模樣は白百合の花で白百合の花こそは當時歐洲を震駭させた騎士の勇武の記號である。

ロバートの圖抜けて背の高い體格は殊にこの日の服裝に威嚴を添へ、その傍に居る人が恰も矮人の樣に見える。その顏つきはいかにも凛々しく周圍の者を眼下に見下して流石十字軍の第一の武勇とうたはれた態度が莊嚴な位いに見えた。伯夫人のブレンヒルダの服裝はむしろ簡單ともいふ程な淸素なもので裳も短かく非常に活潑な風丰であつた。上半身は肌にぴつたりと固くついた胴衣二枚でスカートは膝のところにとゞまり、その縫箔は華やかで近世の淑女の服裝とほゞ似てゐる。髮は兜の下に房々と垂れて愛くるしい二つの眸がその蔭から星のように輝やいてゐる。まとつてゐるびろうどの外套は濃綠の色で、腰につけた劍は逞ましいばかりに大きい。

流石女だけにブレンヒルダの方がその服裝を整へるにロバートよりは長い時間がかゝつた。ロバートは自分の妻が服裝に手間どるのをもどかしがりながらブツ〳〵言ひながら側に立つて手持無沙汰に見てゐるもあらゆる男性に共通の癖と見える。だがブレンヒルダが全く愛の權化の樣な神々しい姿になつて、共に衣裳室を出る時、騎士は恍惚として心の中に、かゝる美人に接吻をする權利我一人に備はれりと思へば何となく胸がときめいてくるのであつた。ブレンヒルダは良人の抱く手を一度は嫌と言ひながらも溫かい接吻をかへしてみづ〳〵しい心になりながら皇帝の玉座のある謁見室の方へと進みゆくのであつた。

恰度其所へやつて來たのは老哲人のアゼラステスで、彼は特にフランク騎士氣質を能く心得てゐるのでこの時も特に皇帝からロバート夫妻を案內するように命ぜられたのであつた。やがて遠くの方から獅子の遠吠へのような響が聞えた。これは卽ち謁見の儀式の始まる合圖だ。豫てアゼラステスが注意した通り番兵の數は極めて少ないが金と白とのその服裝は人の目を曳き片手に拔劍を持ち片手に燭の輝やきをかゝげ默々として騎士の行く道を衞つたのであつた。

謁見室の入口は普通よりづつと低くしてある、これは宮廷の迷信深い狡猾の役人がわざ〳〵案出した事で羽毛をたが〳〵と飾つた騎士の兜が、この入口をくゞる際に自然と頭を下げるべく前半身を屈め皇帝に對して、深く敬意を表するかの如き態度を示させる爲めである。その入口まで來ると、ロバートはつと立ち止まつて中を覗いて見たが、皇帝が嚴かに座してる玉座の邊りは明燭燦として輝やき、其所等邊りに無限にちりばめてある寶石にその光線が分解し、屈折して七彩陸離として眼を射るばかりである。だが直ぐとロバートはその入口の低くしてある理由を悟つてしまつた。老哲人アゼラステスは先づ眞つさきに恭々しく七重の膝を八重にもと折りながら、おづ〳〵と玉座の前に進んでゆくのであつたが、騎士夫妻は入口の前に立つたまゝ、珍らしげに其所に所る黑奴隷の番人を眺めながら、

「何うしてこの人達は斯んな奴隷になつて默つてばかりゐるでせう」
とビレンヒルダが問ふと、
「罪の償ひのためだらう。」
とロバートは答へたがその顏は澁い。老哲人アゼラステスはひたすら玉座の前に額をすりつけて此の上なく尊敬の態度を示し、心の中では直ぐ自分の後に騎士夫妻も從つて這入つて來て同じく陛下の前に恭敬の態度を取つてゐることゝ信じきつてゐた。ところがロバート伯は此の入口の小癪な技巧がムソとばかり氣に觸れて、ぐるりと體を廻はし尻の方を玉座に向けて、體を折りながら後すざりの體で這入つて來た。さうして謁見室の眞ン中に來るまで皇帝の方へは顏を振り向けず、矢張り同じ振りをして這入つて來る妻のブレンヒルダの方ばかり見てゐたが、やがてぐつと脊伸をした。今まで騎士が頭を下げて這入つて來るものとばかり思つて、待ち受けてゐた皇帝は、騎士のこの傍若無人な振舞に頗る呆氣に取られてしまひ、その不愉快な度合は今朝玉座を奪はれた時よりももつと酷いものがあつた。
玉座の邊りに侍つて居る宮廷の重臣達は、何れも顏を見合せて、全く途方にくれた樣な表情をしてゐる。其の席に居るものは皇帝の心の中を察して唯だ爲すこともなく、身もだへするばかり

であつたが唯だタレンタムのボーモンだけは、一種皮肉な痛快な喜びを顏に浮べてゐた。恰度この場の光景は恰かも弱いもの臆病のものが、侮辱を受けてもそれを報復することは出來ず、唯だ眼を白黑させて壓迫されてゐるといふ表情を最も明白に示したものだ。
皇帝は直ぐと大儀式に取り掛かるやうにと合圖をすると、其所に並んでゐるソロモンの獅子達は俄に鬣(たてがみ)を振り上げ尻尾を立てロバート伯に對して、大きな唸り聲をあげた。伯は既にその時癪に障つて氣があがつてゐる時だから、それを眞とうの獅子が襲つて來たのだとしか思はれなかつた。伯にとつては其の吠えたてた獅子の姿が、全く森に棲む百獸の王の姿としか見えなかつたのか、或はとても敵し難いと思つたのか、或は餘りに能く出來た巧妙な擬物と思つたのか、そんな事は問題ではない。何はおいても伯が第一に受けた衝動は、此所に自分の勇氣を振ひ起す絶好の相手を見つけたといふので、一番手近かにはね上がつた獅子のところに近づいてゆき「ウヌ。この犬ころ双」と言つてその鋼鐵の小手をはめた手を振り上げて、偉大な力で以て横なぐりに擲り倒した。玉座の前や階段に敷いてある絨壇の上に獅子の首や足が目茶苦茶にころがり中のバネ仕掛けが醜くゝも現はれて來た。
獅子の正體が斯うまで露骨にたはいもなく現はれて見ると、流石のロバート伯も騎士としての